

菊と星と五輪

—1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱—

高 嶋 航

はじめに

1945年4月、大阪の陸軍幼年学校に入った前田祐吉は、日々野球を楽しんだ。「学校で禁止された野球が、まさか幼年学校で許されるとは……正直言ってびっくりでした」という前田の率直な感想は、幼年学校に入っただれもが抱いたに違いない¹。なぜなら、戦時中スポーツは軍による「弾圧」の対象となったというイメージが流布していたからである。実際、1944年までに学校関係のスポーツはほぼ姿を消していた。にもかかわらず、軍の内部では、戦争の最末期までスポーツがおこなわれていた。なぜこのような現象が起きたのか。

近年、戦時下（1937-1945年）のスポーツに対する研究が注目を集めつつある²。筆者もこれまでの研究のなかで、スポーツ界の側が自発的に軍に協力する姿勢を見せたことを示し、軍が一方的にスポーツ界を「弾圧」したというイメージを修正しようと試みてきた³。しかし、戦時下のスポーツを本当に理解するには、軍がスポーツをどのよ

¹ 山室寛之『野球と戦争：日本野球受難小史』中央公論新社、2010年、173-174頁。不可解なことに、前田は最近出版した自伝のなかで「幼年学校のベッドに寝ころんで、夏空に入道雲が湧くのをながめながら、「ピッチャーをやってみたいな」と、ぼんやりと考えていた」とあたかも陸軍幼年学校で野球ができなかったように記しているが（前田祐吉『野球と私』青蛙房、2010年、7-8頁）、これは明らかに事実と反する。なお山室の本はその副題に見えるとおり、スポーツ受難史観の典型である。山室は「軍部と野球」と題する一節で軍隊内の野球を取り上げるが、それが野球の「受難史」にどう位置づけられるかについて明言していない。

² 坂上康博、高岡裕之編『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社、2009年など。

³ 拙稿「戦争・国家・スポーツ：岡部平太の「転向」を通して」『史林』93巻1号、2010年1月、拙稿「戦時下の平和の祭典：幻の東京オリンピックと極東スポーツ界」『京都大学文学部研究紀要』49号、2010年3月。さらに言えば、戦時下スポーツの研究が日本内地に偏してきたことも「受難史」観形成を促した。「外地」や占領地でスポーツ界が加害者の立場に与したことは、拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年で論じた。

うに考え、その内部でスポーツがどのように実践されていたのか、ということを理解する必要があるのではないか。奇妙なことに、軍のスポーツ観や軍隊内部のスポーツの実態はこれまで研究の主たる対象になることはなかった⁴。

軍隊史の側からすれば、スポーツは取りあげるに値しない、あるいはふさわしくないテーマであった。それは軍隊の本質とはなんの関係もない、些末な問題に過ぎなかった。一方、スポーツ史の側からすれば、軍隊とはひとえにスポーツの抑圧者であり、軍隊そのものをスポーツ史の対象と見るができなかった。つまり、この問題は軍隊史とスポーツ史のはざまにあって顧みられることがなかったのである。

しかし、それは本当に些末な問題なのだろうか。近年、軍隊とスポーツの関係について、欧米では重要な研究が次々と発表されている⁵。イギリスの場合を見てみよう。マンガンらの研究によれば、パブリックスクールでアスレティシズムが盛んになるのは19世紀半ばのことであった。アスレティシズムは勇気、愛国心、英雄崇拜、自制など、帝国の指導者にふさわしい資質を養成できると考えられた。そんな彼らが将校となり、軍隊にスポーツを取り込んだ。それは彼らにとって娯楽でもあり、また自己の地位にふさわしい資質を持つことを証明する手段でもあった。パブリックスクール、

⁴ ここでいうスポーツは、戦時中に「弾圧」の対象となった外来スポーツ、たとえば野球やテニスなどを指す（軍隊体育に関する研究は数多くある）。唯一の例外と言うべきは、宮尾正彦「日本陸軍の団体スポーツ採用のねらいについて」『体育学研究』42巻3号、1997年9月で、1928年の『体操教範』でスポーツがいかなる基準で採択されたかを論じた。このほか、木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年、193-195頁、高津勝「政策としてのスポーツ—大正デモクラシーとスポーツの政策化—」（中村敏雄編『スポーツ政策』大修館書店、1978年）にも軍隊スポーツへの言及がある。

⁵ 代表的なものを挙げると、イギリスについては、J. A. Mangan, *'Manufactured' Masculinity: Making Imperial Manliness, Morality and Militarism*, Routledge, 2012; Tony Mason and Eliza Riedi, *Sport and the Military: The British Armed Forces, 1880-1960*, Cambridge University Press, 2010。アメリカについては、S. W. Pope, *Patriotic Games: Sporting Traditions in the American Imagination, 1876-1926*, Oxford University Press, 1997; Wanda Ellen Wakefield, *Playing to Win: Sports and the American Military, 1898-1945*, State University of New York Press, 1997。フランスについては、Thierry Terret, *Les jeux interallié de 1919: Sport, guerre et relations internationales*, L'Harmattan, 2002。またテレの主編で *International Journal of the History of Sport* の28巻3・4号（2011年3月）は第一次世界大戦におけるスポーツと男性性の特集をした。ドイツについては、Peter Tauber, *Vom Schützengraben auf den Grünen Rasen: Der Erste Weltkrieg und die Entwicklung des Sports in Deutschland*, LIT, 2008。

スポーツ、軍隊は、いずれも帝国の指導者にふさわしい力強い男らしさの表徴となり、三者はわかちがたく結びついていった⁶。イギリス軍やアメリカ軍でスポーツが制度化されたのは、第一次世界大戦の最末期である。第一次世界大戦における英米軍の活躍は、軍隊とスポーツに密接な関係があることを示した。その経験に鑑みて、フランスやドイツは軍隊へのスポーツ導入を本格化した。じつは日本も1920年代に同様の文脈でスポーツを導入し、その結果軍隊内部にスポーツ熱が広まった。軍隊の新しい動向ははるか満洲でも好意的に伝えられた。

規律と服従とで固められた軍隊生活にも、現代思潮とやらの響きは三十八^{サンチ}瓏の大砲よりも効めがあつたと見え、先には野球熱に魔された「国家の干城」達がゲームを許して呉れと只管嘆願してやうやく公認され、折角の日曜日をバットを握つて暮らす事となつた⁷。

民間スポーツ界もこの動向を歓迎した。報知新聞記者の寺田瑛は次のように言う。

大正十一年三月からは、各鎮守府に於て、四月からは各軍隊に於て、陸上競技を正科として採用したことは、洵に日本体育史を編むものにとつて、忘れることの出来ぬ事実である。第六回万国々際オリンピック大会に優勝した米国は、三百余名の選手中八十名、仏国では二百八十名中百名、白耳義では大部分、而して第五回極東大会に優勝した比律賓では約四割が軍人であつたといふ事実の前に、私共はそれが当然のことであると共に、その当然のことすら出来ない日本の現状を慨嘆したのであつたが、今や斯くして、由来久しく閉ざされてゐた所謂軍規の門戸が、体育の為に開放せられ、陸軍では体操教範の一部を改正して、……一転して陸上競技を実施の機運に至つたのは、猶その實質に於て不満足の点はあるが、我慢せなければならないであらう⁸。

彼らにとって、軍人がスポーツに従事することは、当時の世界の情勢から見て、むしろ当然あるべき姿であつた。しかるに、この「忘れることの出来ぬ事実」は、いまや日本体育史から抹殺されている。

⁶ J. A. Mangan, 'Manufactured' Masculinity.

⁷ 『満洲日日新聞』1922年9月14日。以下、引用資料は新字体に改め、句読点を補った。

⁸ 寺田瑛『趣味のスポーツ』文省社、1924年、126-127頁。

本稿とその後の研究でめざすのは、日本の軍隊とスポーツの関係を解明し、欧米との比較を通じて、日本の特徴を描き出すことである。本稿ではさしあたり、満洲事变までの陸海軍を対象とし、スポーツの実態とスポーツに対する考え方を明らかにする。分析にあたって3つの点に留意したい。

第一は、男性性である。近年、日本の軍隊についても、男性性という概念によって読み解こうという試みがなされつつある⁹。軍隊の男性性とスポーツの男性性はいかなる関係にあったのか、スポーツ導入を要請することになった軍隊の男性性の問題とはなにか、スポーツを導入することで軍隊の男性性はいかに変化したのか。男性性は軍隊スポーツの分析枠組としてだけでなく、欧米の研究との接続を可能にするという点でも有用である。

第二は、スポーツのなかが評価されたのかという点である。1927年、陸軍戸山学校の大井浩少佐は「「スポーツ」と我国武道の精神を論ず」という文章のなかで、スポーツは訓練を目的とするものと「リクリエーション」を目的とするものがあり、スポーツの第一義は前者だと論じた。1943年、大日本体育会理事長の郷隆は、スポーツは国民体力向上の手段でもあるが、「楽しさ」も忘れてはならないと主張した¹⁰。本稿では「鍛錬」と「娯楽」という言葉を使うことにするが、両者はともにスポーツの本質をなすものであり、ある時には鍛錬の側面が、ある時には娯楽の側面が強調されるに過ぎない。しかし、1943年の状況を考えればわかるように、スポーツ評価の差異が、軍隊とスポーツのあり方（軍隊内でのスポーツという意味と、スポーツを通じた軍民関係という意味の両方）を大きく規定することになる。

第三は、皇室である。1920年代のスポーツの発展に皇室が果たした役割はこれまでも指摘されてきた¹¹。じつは軍隊スポーツにも皇室はきわめて重要な役割を果たしていた。

⁹ 代表的なものを挙げると、阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史1 男たちの近代』日本経済評論社、2006年、同『男性史2 モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社、2006年の各論考、大日方純夫「「帝国軍隊」の確立と「男性」性の構造」『ジェンダー史学』2号、2006年、内田雅克『大日本帝国の「少年」と「男性性」：少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』明石書店、2010年。

¹⁰ 大井浩「「スポーツ」と我国武道の精神を論ず」『偕行社記事』629号、1927年2月、近藤良信『撃つ体育人』体育出版社、1943年の郷隆による序文。

¹¹ 坂上康博『権力装置としてのスポーツ：帝国日本の国家戦略』講談社、1998年、同「スポーツ

当時の男性皇族は基本的に軍人でもあった。とりわけ若い皇族＝軍人にはスポーツの愛好者が多く、彼らが軍の学校で、また卒業後はそれぞれの任地でスポーツを実践した。皇室の支持は軍隊スポーツを正当化する際の重要な依拠となった。デモクラシーの逆風のなかで天皇制と軍隊がスポーツを利用して権威を再構築しようとした点については拙著で指摘したが¹²、本稿では皇族＝軍人のスポーツに着目することで、両者の関係がより直接的であったことを示したい。

以上の3点に留意しつつ、第1章で海軍、第2章で陸軍を対象とし、軍がスポーツにどのような意義を認めてそれを導入したのか、また軍はどのような方針のもとでそれを実践したのかについて検討する。第3章では軍隊がスポーツを導入した社会的背景を探り、それが1920年代の特殊な時代状況のもとに成立したことを明らかにする。この事実は、本稿につづく研究のなかで、冒頭に挙げた疑問を解く鍵となるはずである。

第一章 海軍とスポーツ

1. 海軍兵学校

明治政府は1870年に、陸軍はフランス式、海軍はイギリス式とすることを決定した。イギリスの陸軍では1860年代にクリケットやサッカーが広まっていた。1868年には最初の部隊対抗試合（陸軍砲兵隊対陸軍工兵隊）が開催された。1888年には陸軍サッカー協会が設立され、初年度の大会には44チームが参加した。海軍の状況ははっきりしないが、少なくとも1879年にはスポーツが海軍に入ろうとする少年にとって有益であると考えられるようになっており、19世紀末までにほとんどの軍艦でサッカーチームが結成されていた¹³。したがって、イギリス軍に範を取り、イギリス人教官を迎えた日本の海軍でスポーツがおこなわれたのはけっして不思議なことではない。

1873年7月27日、ダグラス（Archibald Lucius Douglas）率いるイギリス海軍武官34名が海軍兵学寮に着任した。海軍兵学寮は軍の学校ではあったが、「生徒は、毎日テ-

と天皇制の脈絡：皇太子裕仁の摂政時代を中心に」『歴史評論』602号、2000年6月、同『スポーツと政治』山川出版社、2001年。

¹² 拙著『帝国日本とスポーツ』119-122頁。

¹³ Mason and Riedi, *Sport and the Military*, pp. 6, 9, 21-22, 29.

ブルにかがりついて居り」、「大砲、帆前、端艇等」の訓練は「時たま」実施されるだけであった。そのため生徒の身体は強健とはいいがたい状況にあった。イギリス人教師はまずこの点に着目し、午後の時間を「実地外業」として、稽古や諸種の操練にあてた。さらに生徒の体育として、馬術や剣道もいいが、より慰安的、娯楽的なものとして、ビリヤード、サッカー、クリケットを推奨し、ビリヤード2台が設置された¹⁴。ダグラスはスポーツの必要性について、「欧米各国海軍学校ニハ遊戯ノ具ヲ備ヘテ、講究ノ余暇常ニ生徒ヲ楽マシメ、以テ勞ヲ慰ムルノ法有之。故ニ心意ノ方向不善ニ移ラスシテ、汚行醜態ノ弊ヲ醸スニ至不申、随テ學術益進歩、身体愈健強相成申候」と説明している¹⁵。

1874年10月に海軍兵学寮に入った木村浩吉は「学校に遊びの道具が備へ附けてあるのを見て、不思議に思つた」が、当時の日本人にとって学校といえば勉強するところであったことを考えると、木村のような感想は誰しもが抱いたことであろう¹⁶。さらに木村は、当時の海軍兵学寮について、「授業で生徒を苦しませる様な詰込方法を探らず、午前に三時間、午後に二時間位で、可成遊ばしてやらうと云ふ様であつた。稽古が済むと、運動場に飛出して、「ハマ投げ」を始め、或は「フートボール」を始めた。稽古はゆとりが充分あつた」という¹⁷。

ダグラスにとって、勉強ばかりしている海軍兵学寮の生徒たちは海軍軍人にふさわしくない、つまり男性性を欠いているように見えた。ダグラスはクリケットの効用について「元来「クリケット」遊ヒハ人体ノ健康ヲ催スル戯ニシテ、最モ海軍生徒ニ益アリ。当今英国ニ於テハ此遊戯ヲ以テ少年養育ノ一科ト定ム」と述べている¹⁸。たんに体力を養成するのであれば、馬術や剣術でもいいはずである。あえてクリケットを導

¹⁴ 沢鑑之丞述、一二三利高編『海軍兵学寮』興亜日本社、1942年、234-235、248-249頁。

¹⁵ JACAR（アジア歴史資料センター）：C09112110600（1画像目）。原文では兵学寮当局が欧米の事例に鑑みてスポーツの導入を提案し、ダグラスに諮ったところ、ダグラスはもともとそのような考えを持っていたが、多大な費用を要するため黙っていたと言った、とする。しかし、木村吉次も指摘するように、ダグラスの側から提案したと考えるのが自然であろう（木村吉次「競闘遊戯会へのまなざし：「やらせた人」「やった人」「見た人」」『現代スポーツ評論』5、2001年）。

¹⁶ 木村浩吉編『黎明期の帝国海軍』海軍兵学校、1933年、44頁。

¹⁷ 木村浩吉編『黎明期の帝国海軍』54-55頁。

¹⁸ JACAR: C09111671700（1-2画像目）。

入したのは、それがイギリスで「少年養育ノ一科」となっている、つまりイギリス人の男性性を養成する手段と考えられていたからである。

海軍兵学寮の生徒たちは様々な形でイギリス的な男性性を受け入れた。たとえば彼らは外出に際して服にブラシをかけ、ズボンの折目を揃え、靴を磨き、頭髪を梳き、姿勢に注意した。これはもともとイギリス人教師が注意していたもので、やがて習慣になった¹⁹。当時の生徒は110名ほど、それに対してイギリス人教師が34名もいたから、その影響力は絶大であった。しかも生徒たちは「志ザス処ハ、英人カラ學術ヲ学ビ、他日国家ニ貢献スル処ガアリ度イト誓ツタ人々」であったから、「古来ノモノヲ洋式ニ改良シタノデハナク、全ク英国ノモノヲ丸取り」することも多く、スポーツもその一つであった²⁰。しかし日本の男性性とイギリスの男性性が衝突することもあった。1874年の春に海軍兵学寮の教務課は校長にダンスの稽古が必要であると上申した。ダンスは外国との交際上、さらに生徒の体育上に適当だからである。士官の多くが貴族であったヨーロッパの軍隊では、ダンスの教養は不可欠であった。しかしそうした感覚は日本人には受け入れられず、結局この計画は実施されなかった²¹。

ダグラスはカナダで生まれ、ケベックのハイスクールで学んだが、学業を半ばで放棄し、14歳で海軍に入った、たたき上げの士官であった²²。ダグラスが活用できたのは来日前の数年間にしていた砲術学校教官としての経験だけであり、海軍兵学寮の教育も砲術学校にならっておこなわれた²³。砲術学校でスポーツがどのように実践されていたかは不明であるが、ダグラス自身はスポーツマンであり、その反知性主義的傾向（これはイギリス軍やパブリックスクールの伝統でもある）と相俟って、「座学」重視の教

¹⁹ 木村浩吉編『黎明期の帝国海軍』25-26頁。

²⁰ 木村浩吉編『黎明期の帝国海軍』43、48-49頁。

²¹ 木村浩吉編『黎明期の帝国海軍』48頁。ただし、いわゆる鹿鳴館時代は例外であった（沢鑑之丞『海軍七十年史談』文政同志社、1943年、379-385頁）。

²² Archibald C. Douglas, *Life of Admiral Sir Archibald Lucius Douglas: Commander of the Legion of Honour, Order of the Rising Sun of Japan, Spanish Naval Order of Merit*, Mortimer bros., 1938.

²³ チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌』2、平凡社、1969年、113頁。チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）も海軍兵学寮で英語を教えていた。なおダグラスはパブリックスクール自体には反感を持っていた（Archibald C. Douglas, *Life of Admiral Sir Archibald Lucius Douglas*, pp. 7, 86）。

育に反対し、スポーツの導入を提起したのだろう。

スポーツの導入に続いてダグラスが目指したのは Athletic sports の開催であった。日本で最初の運動会として知られる「競闘遊戯会」である。競闘遊戯会については木村吉次の一連の研究に詳しいが²⁴、ここでは木村が使っていないダグラスの伝記を用いて論じることにする。1874年3月10日、競闘遊戯会の開催予告が『新聞雑誌』『日新真事誌』『郵便報知新聞』などの新聞に掲載された。これに対して「THE MAN ON THE MOUNTAIN」なる人物が批判を提出した。競闘遊戯会は勉学に没頭する生徒をリフレッシュさせるために開くとのことだが、それだけのために300両もの金を使う必要があるのか。4月の試験を控えた大事な時期に、学校当局は怠惰を招きかねない措置をとり、無駄なことに時間を使わせるのか。「蛺蝶趁花 てふのはなおひ」（二人三脚のこと）とはなんなのか。将来放縦にふるまいそうな連中をあらかじめ懲罰しておこうとでもいうのか。それとも戦争で足を失った人をくっつけて一人の兵士にでもする手立てか。「挽馬脱轡 ばしゃのはなれうま」（目隠し競走のこと）とはなんなのか。まったく危ないことで、怪我でもしたらどうするのだ。気晴らしが必要というなら、馬や舟を与えるほうがよい。それこそ士官候補生にふさわしい、云々²⁵。競闘遊戯会は当時の人びとの抱く軍隊イメージから大きく乖離していた。同様の印象は生徒自身も共有しており、彼らは競闘遊戯会を楽しむよりも、「はにかみ」が先に立ったようだ²⁶。人前に出て、そのうえ士官候補生らしからぬ姿を見られることに躊躇した生徒は多かったであろう。競闘遊戯会が2回の開催で終わったのも、結局のところそれが海軍兵学寮、そしてのちの海軍兵学校の目指す男性性とは相容れなかったからではないだろうか。

1876年、築地に移転した海軍兵学寮は海軍兵学校と改称した。1880年6月28日午後6時半ころ、フットボールをしていた浅田亨は左眼窩上縁を強く打ち、頭痛や吐き気がしたにもかかわらず、試験中だったために「強テ非常ノ勉強ヲナシ甚タ腦力ヲ勞」

²⁴ 木村吉次「海軍兵学寮の競闘遊戯会に関する一考察」『教育学研究』63巻2号、1996年6月、同「明治九年の海軍兵学寮競闘遊戯会と東京在留外人の「アスレチックスポーツ」」『中京大学体育学論叢』38巻1号、1996年、同「競闘遊戯会へのまなざし」。木村によれば1868年に横須賀製鉄所でおこなわれた運動会が「最初の洋式運動会」である。

²⁵ Archibald C. Douglas, *Life of Admiral Sir Archibald Lucius Douglas*, pp. 65-67.

²⁶ 木村吉次「明治九年の海軍兵学寮競闘遊戯会と東京在留外人の「アスレチックスポーツ」」。

した結果、7月2日に亡くなった。死因は脳震盪兼脳膜炎と診断された。享年14歳11か月だった²⁷。たまたま打ち所が悪かったのかもしれないが、フットボールがかなり激しくおこなわれていた可能性がある。

1886年、大学予備門を出て海軍兵学校に入学した秋山真之は、ある日アメリカで出版された野球のルールブックを持ってきて、「これは米国で専ら行はれてゐるベースボールといふ遊戯ださうだ。ルールが書いてあるから、これを翻訳して我々同志がひとつやってみやうではないか」と仲間と呼びかけた。彼らはルールを翻訳し、バットの代わりに棒切れを使い、海軍兵学校の生徒を集めてチームを作り、野球をはじめた。これが海軍における野球の起源となった。秋山の左手小指が硬直していたのは、この時野球を盛んにやったためだという²⁸。

海軍兵学校は1888年に江田島に移転した。その翌年に運動会がおこなわれたという記録があるが詳細は不明である²⁹。1899年3月に定められた海軍兵学校教育規程ではじめて体育の目的が明記された。それによると、体育の目的は「海軍々人ノ多艱多難ナル任務ニ所シテ能ク之ニ耐ヘシムルニアリ。故ニ衛生ニ注意シ、特ニ活潑ノ運動ヲ奨励シ、以テ身体ノ強健ヲ致サシムヘシ」とあり、娯楽的な効用は言及されない³⁰。同年4月より、海軍兵学校では体育に「随意運動」が加わり、乗馬、剣術、柔道、相撲、「ベースボール」、「フットボール」、「カノー」、伝馬船漕ぎなどが許可された。相撲、「ベースボール」はときどき大会が催されたという³¹。同年10月28日、皇太子が海軍兵学校を訪れた際、生徒たちは砲台操練、剣術、柔道、カヌー競漕、玉争い、棒倒しを披露した。ここで注目したいのは、「棒倒し」である。海軍兵学校でいつから棒倒しがおこなわれていたのかはわからないが、学校を代表する行事として登場したのはこの時がはじめてであった。そして棒倒しこそ海軍兵学校(の男性性)を代表するスポーツになっていく。

たとえば『海軍兵学校生活』（1908年刊）は棒倒しを次のように説明する。

²⁷ JACAR: C09114787100 (1-6 画像目)、JACAR: C09102790100 (1-4 画像目)。

²⁸ 秋山真之会編『秋山真之』編者刊、1933年、56頁。

²⁹ 広島県体育協会編『広島スポーツ史』編者刊、1984年、198頁。

³⁰ 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』巻2、原書房、1968年、108頁。

³¹ 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』巻2、137-138頁。

世上一般の学校などゝは異り、軍隊間のこと故、普通の如き遊技などはする折もない。雖然又校内には、種々の勇壯快絶なる遊技が幾らもある。夫等のうちで最有名なものを棒倒しといふて、外国武官などの来られた時は、能く見せることが在る。……兵学校生徒の此の棒倒しぐらひ、勇壯極まりなき者はあるまい。先年〔1906年〕英国皇甥コンノート殿下が、兵学校参観の爲め、御臨校ありし際に、殿下歓迎の余興として、此の棒倒しなるものを御覧に供し……実に日本海軍々人の武侠なるは、平素かゝる遊技をして居るのでも分る、真に末頼母しき事だと、深く御感賞が在つた……³²。

ここで示されるのは、軍隊とふつうの遊戯は相容れないこと、棒倒しが海軍兵学校独特の勇壯な遊戯であること、そしてそのことは外国人によつても認められたということである。競闘遊戯会の種目にもあつた「豚追い」は、豚も生徒も疲れ切つたところで豚を抱き止めて終るというほほえましい遊戯であつたが、ここで紹介される豚追いは豚を鉄拳で打ち、靴で蹴つて殺すという惨絶野蛮な遊戯に変わっている。運動会も内容は駄足行軍、小銃射撃、兎狩りで、競闘遊戯会とはまったく違うものになっていた。一方、スポーツについては、このほか「ベースボール」「テニス」「フットボール」「クロッケー」「野仕合」「雪合戦」等もあると軽い扱いしか受けていない³³。

1911年から1914年まで海軍兵学校の英語教師をつとめたマーター (Graham Martyr) はある土曜の午後、大掃除が終つた後の自由時間の様子を記録にとどめている。運動場では「イギリス独特のゲーム」であるラグビーの試合がおこなわれ、イギリス人教師が審判をしていた。テニス、相撲、野球がおこなわれているところでは、多くの生徒が集つて観戦していた。野球の点数は英語で数えていた。弥山登山競走の練習に励むものもいた。平行棒、ぶらんこ、跳び箱、ロープ、鉄棒などの器具で遊ぶものもいた。柔道や剣道をするもの、散髪屋へ行くもの、ボートの練習をするものもいた。校長はしばしば生徒たちの様子を見に運動場へやつてきた。時には棒倒しがおこなわれることもあつた。こうして生徒たちは午後5時半の夕食の時間まで、土曜の午後を

³² 杉本巴水『海軍兵学校生活』光村出版部、1908年、137-140頁。

³³ 杉本巴水『海軍兵学校生活』140-144頁。

楽しく過ごしたのだった³⁴。

当時兵学校の生徒であった草鹿龍之介（海兵41期³⁵）は、マーターの指導ぶりを生き生きと描いている。

マーター教授は、生徒にサッカーの指導をした。棒倒し一本に攻撃精神を発揮しつつあった生徒は、初めはボールを中心に殴り合ひをこととした生徒も、遂にはボール等眼中になく、鉄拳を振り掴み合ひに夢中となり、ボールは飛んでもないところに転ろがって居る。「おお！江田島ゲームストップストップ」と叫びながら、マーター教授は汗を流して駆け回る³⁶。

草鹿が語るスポーツはマーターの筆致とはまったく異なる。マーターはイギリス的な「ゲーム」を教えようとしたのだが、彼らはそれを棒倒しと同じように実践したのだ。

1913年刊行の写真集『海軍兵学校生活』には棒倒しのほか、庭球、蹴球、野球の様子収められている³⁷。それぞれキャプションが附され、庭球の場合「学業ノ余暇茲ニ嬉々トシテ快ヲ採ルハ庭球ヲ好メル生徒ノ或ル者」と、娯楽としての側面が強調される。サッカーは土曜日の午後に時々おこなわれ、野球は「斯術ノ心得アル生徒」が土曜の午後に時々おこなうと紹介される。「海軍兵学校独特トモ云フベキ勇壮ナル運動」である棒倒しとはやはり筆調が相当異なっている。

1920年12月に軍隊教育規則が定められ、体育に「体技」が加わった（後述）。海軍兵学校では翌年8月に、土曜の午後の自由時間が「体技」に改められ、「棒倒、綱引、人取、相撲、野球、庭球、弓術、オリンピックゲーム〔陸上競技〕」などが実施された³⁸。このころ高松宮が海軍兵学校に在籍していた（1920年-1924年）。高松宮の伝記は当時の様子を次のように描写している。

³⁴ Graham Martyr, *Etajima Tales*, Imperial Naval College, 1913, pp. 65-71. ラグビーはマーターがはじめて兵学校に紹介したもので、サッカーボールを使用し、ルール抜きで格闘したという（水交会編『海軍兵学校・海軍機関学校・海軍経理学校』秋元書房、1984年、158頁）。

³⁵ 以下、議論を進めるうえで必要な場合に限り、海軍兵学校（海兵）、海軍機関学校（海機）、陸軍士官学校（陸士）出身者の情報を提示する。

³⁶ 草鹿龍之介『一海軍士官の半生記』光和堂、1985年、91-92頁。マーターは第一次世界大戦に従軍するため日本を離れたが、1928年に再来日し、1937年まで第五高等学校の教師をつとめた。1941年に勲五等瑞宝章を授与されている。

³⁷ 海軍兵学校編『海軍兵学校生活 大正二年』編者刊、1913年。

³⁸ 有終会編『続・海軍兵学校沿革』原書房、1968年、32頁。

体技にラグビーも加わったので、生徒館前の練兵場の芝を削ってのトラックフィールド造りが〔1923年〕七月十九日からはじまった。課業の合間をみての作業で、秋まで続けられたが、高松宮もこの芝生削りに参加された。このラグビーも外人教師〔D. E. Randall〕の奨めではじめられたもので、香山蕃を招いて指導を受けたりしていたが、首の骨を折って長期入院する生徒も出るなど練習もはげしかったようだ³⁹。

首の骨を折ったというのは佐藤辰次のことだろうか。1924年3月5日、佐藤はスクラムを組んでいる際、地に頭を突き、「頸椎脱臼シ、脊髓切断セルモノノ如ク、直ニ入院手当」ということになった⁴⁰。スポーツによる事故はしばしば起こったようで、恩給の問題もあって1927年に次のような規定が設けられた。

近來各種体技ノ実施ニ伴ヒ死傷者ヲ出シ、其ノ取扱方ニ付疑義ヲ生シタル例モ有之候ニ就テハ、軍人ニ在リテハ、左記ノ場合ニ於テハ公務ニ依ル疾病トシテ取扱ハルルモ、其ノ他ノ場合、例ハ自己ノ任意、若ハ同好者ノ随意ニ依ル等ノ場合ハ、仮令上官ノ許可又ハ指示ヲ受ケタルトキト雖、公務トハ認メラレサルコト御承知相成度⁴¹。

これにより、体技の時間、もしくは上官の指示で部内、部外の競技に参加した場合以外は恩給の対象として認められないことになった。この規定から逆にスポーツがそれ以外の形でも広くおこなわれていたことがわかる。

高松宮も協力した運動場づくりは1923年11月まで続いた。運動場の開場式において谷口尚真校長は次のような訓示をおこなった⁴²。軍人体育の目的は「心身ヲ鍛練シテ軍人報効ノ根本ヲ培養シ、併セテ品性ノ教養ニ資スル」ことにあり、精神と身体が相俟ってはじめて体育の目的が達せられる。スポーツマンシップは諸君のよく知るところであるが、海軍士官を養成する学校として、また軍隊としての特色がなければならない。そう言って、谷口が挙げるのは以下の諸点である。

①運動場内ニハ常ニ溢ルル計リノ元氣ガ充滿シテ居ルコト

³⁹ 「高松宮宣仁親王」伝記刊行委員会編『高松宮宣仁親王』朝日新聞社、1991年、202-204頁。

⁴⁰ JACAR: C08051223000 (2画像目)。

⁴¹ 「体技ニ因ル疾病者ノ恩給上ノ取扱方ニ関スル件」『海軍公報(部内限)』26号、1927年2月24日。

⁴² 有終会編『続・海軍兵学校沿革』59-60頁。

②審判ニ対シテハ絶対ノ服従ヲ守ルコト

③応援ハ拍手ノミトシ、其ノ他ノ声援ハ一切行ハヌコト

④競技ハ礼讓ニ始ツテ礼讓ニ終ルコト

⑤競技ノ前後ヲ通ジテ之ヲ貫クニ軍容整齊、肅然タル紀律ト秩序トラ以テスルコト

これらはスポーツマンシップ一般についても言われることであって、決して軍隊の特色とは言えない。海軍兵学校の武田盛治教官は谷口の訓示を引きつつ次のように言う。スポーツマンシップとはイギリスでは紳士道に等しいが、この紳士道は我が国古来の武士道と同じもので、誠実親愛、公明正大、名誉廉恥、規律服従、勇氣忍耐を内容とする。谷口校長が言うように、これらはすべて軍人勅諭に含まれるものであって、結局軍人勅諭の精神とはとりもなおさず運動の精神である、と⁴³。このように軍人とスポーツマンの男性性は、武士道＝スポーツマンシップを介して一致すると考えられたのである。

海軍兵学校にはスポーツ界の著名人がたびたび訪れ、スポーツの指導をおこなった。先ほどの記事に見える香山蕃もその一人である。香山は東京帝国大学ラグビー部の創設者で、1923年12月に数日間海軍兵学校に滞在し、「ラグビー蹴球ニ就テ」という講演をおこなった⁴⁴。この時谷口校長は香山に、明治8年〔1875年〕ころ八代六郎（海兵8期）らが海軍兵学校でイギリス人教官からラグビーを教わり、谷口自身も2本のゴールポストが在ったのを覚えていると語った（谷口は海兵19期、1892年卒）。香山は「今日の有名なる兵学校の棒倒しは、之れから転化したものではないか」と推測するが、時期的にいてその可能性は否定できない⁴⁵。香山のほかにも、1924年10月にパリ・オリンピックで活躍したアメリカ人選手ショルツ、ノルトン、スベアローとフィンランド人選手ミラーのいわゆる「四大選手」、1927年4月に木下東作、1930年11月に清水善造、1931年3月に織田幹雄、1939年7月に松沢一鶴らが海軍兵学校を訪れた⁴⁶。民間チームとの試合もしばしばおこなわれた。たとえば1923年にはじまった陸上競技の広島-呉対抗戦は第1回が呉海兵団で、第2回が海軍兵学校で開催されている。1924

⁴³ 海軍兵学校編『運動競技提要』編者刊、1925年、28-29頁。

⁴⁴ 有終会編『続・海軍兵学校沿革』61頁。

⁴⁵ 香山蕃『ラグビー・フットボール』目黒書店、1930年、373頁。

⁴⁶ 有終会編『続・海軍兵学校沿革』71、92、153、161頁。

年には海軍兵学校で広島高等師範学校対海軍兵学校・海軍機関学校の陸上競技対抗戦がおこなわれた⁴⁷。この時関東大震災で校舎をなくした海軍機関学校が江田島に仮住まいしていた。両校の生徒は互いに競争意識を剥き出しにして摩擦も多かったが、この時だけは一致団結したようである。

兵機両校が一年余同居した生活はどうしても競争意識があったので楽しい思い出は少ないのですが、当時オリンピック選手になった三段跳の織田選手が在学中だった広島高師を相手として兵機両校合同で陸上競技を行い勝利を得た事があります。私は八百米で頑張ったのですが、この時だけは兵も機も一号も三号もないただの海軍生徒だなあと後で思ったものです⁴⁸。

さらに海軍兵学校は合宿地としても利用され、たとえば、京都帝国大学陸上競技部は1927年から1936年まで毎年海軍兵学校で夏合宿を実施している⁴⁹。

1928年12月に海軍兵学校校長に就任した永野修身は生徒の自発性を尊重するドルトンプランを持ち込んだ。教官は講義を禁止され、生徒は自学自習にはげんだ。そうした自由な雰囲気の中でスポーツはいっそう花開いた。永野校長のもとで教官をつとめた大西新蔵は当時の様子を次のように語る。

昭和四年のことである。私は三七歳である。この年私はテニスの手ほどきを受けた。先生にはこと欠かなかった。理化学科の小田茂雄教授、体育指導官の佐土原親光大尉、級友山崎貞直君、岩崎真澄教授、小林淳機関少佐、その他多数であった。……小学校、中学校とスポーツに全然無縁であった私は、小児的好奇心にあおられ、凡ゆるスポーツに憧憬していた。ローラーを曳いてコートを整備することも覚えた。昼休み時間に、佐土原大尉に円盤投げのターンの仕方を教わった。一三米から一六米と次第に距離を延ばし、一九米位迄投げられるようになった。小学生位の記録である。……バレーボールも仲間入りした。四七期の細谷資彦教官が世話

⁴⁷ 広島県体育協会編『広島スポーツ史』201-202頁。

⁴⁸ 赤尾勝「回想文」(機第三十四期級会『思い出の記：入校五十周年記念』編者刊、1972年所収)。

⁴⁹ 「江田島海軍兵学校運動場借用方依頼ノ件」(1927年8月12日)、学友会-15-38、京都大学文書館所蔵。同様の文書が1936年までほぼ毎年分残っている。後述するように海軍機関学校も京都帝国大学と関係が深かった。スポーツの世界における海軍と京都帝国大学の関係は、戦時中の両者の協力関係(大橋良介『京都学派と日本海軍：新史料「大島メモ」をめぐって』PHP新書、2001年)になんらかの作用を及ぼしたと考えられる。

役である。九人制であるが人数は限定せず、教官を東西両軍に分け、昼休み時間を楽しんだ。永野校長も仲間入りした⁵⁰。

大西は海軍兵学校42期生（1914年卒）で、ちょうどマーターが教鞭を執っていた時期に海軍兵学校にいた。その後、1920年12月から1年間、海軍砲術学校高等科に学んだ。後述するように、この時同校はスポーツを盛んに推進していた。スポーツと出会う機会は豊富にあったが、大西のようにそれを生かせない人びともいた。

1932年から1935年まで英語教師をつとめたブロック（Cecil Bullock）は、著書のなかで、海軍兵学校の体育についてとくに一章をさいて説明している⁵¹。ブロックによれば、海軍兵学校でもっとも重視されているのは剣道と柔道、そして漕艇と水泳である。スポーツは、ラグビー、サッカー、バスケットボール、野球、テニスなどが2年生以上の生徒によっておこなわれる⁵²。ただ生徒は課業に忙しく、スポーツを楽しむのは春秋の約1か月程度に限られる。彼らの流儀は、技術的な面にこだわらず、自由にゲームを楽しむことで、敢闘精神に溢れていた。ブロックは、海軍兵学校の体育は世界一猛烈であり、「全身を極度に鍛錬し、団体精神、勇気、忍耐力を養成することを目的とするのである。つまり、弱者を除外し、最も強く、最も優れた肉体を備へた若者を養成するのが、その目的である」と評する⁵³。

ちょうどこの頃、皇族の朝香宮正彦王（海兵62期）が海軍兵学校に在籍していた。同期の野村盛弘は、「殿下は、日本の皇族として最初に講道館初段の免状をもらった人で、運動神経はよく発達しておられ、特に野球、ラグビーはお好きでもあり、またお上手でもあった。野球では名遊撃手として我々クラスの中心的存在で、折角の日曜日などでも真っ先にグラウンドに出て、教官チームや他学年との試合を計画、挑戦され

⁵⁰ 大西新蔵『海軍生活放談：日記と共に六十五年』原書房、1979年、342-343頁。

⁵¹ セシル・ブロック著、飯野紀元訳『英人の見た海軍兵学校』内外書房、1943年（原著はCecil Bullock, *Etajima, The Dartmouth of Japan*, S. Low, Marston, 1942）。

⁵² 1933年12月の生徒隊規定からは「剣道、柔道、相撲、銃剣術、小銃、短艇、水泳、体技、ア式蹴球、ラ式蹴球、籠球、野球、庭球」がおこなわれていたことがわかる（有終会編『続・海軍兵学校沿革』256頁）。

⁵³ ブロックは帰国にあたって「特に生徒に蹴球其の他体育に関し努力貢献したる功績甚大なり」と評価され、賞与500円を支給されたが、これは外国人教師としては異例の措置であった（有終会編『続・海軍兵学校沿革』214頁）。

たものである」と、皇族が率先してスポーツを実践していた様子を書き残している⁵⁴。

サッカーについては、東京府立第五中学校 OB の伊藤敦夫（海兵 63 期）の証言を引いておこう。

兵学校の蹴球は十一月から四月までがシーズンでその間は二週間に三回位の割合で体技（蹴球・籠球・ラグビー・排球）の訓練があります。靴もユニホームもあり、姿だけは立派なものです。私なんかは単身ドリブル五十米許りシュートして一点取るなんてことが時々ある位だと言つたら何れ位の蹴球だか想像がつくでせう。でもシーズンの終りには試合が行はれます。分隊から一チームを出して試合するのですから内容は充実したものでドリブルとキックの競争の様なものですが、それでも仲々熱烈いや猛烈な肉弾戦を展開します。それは猛烈なもので五中の人が之位猛烈にやつたらと時々思ひます。私が一学年の時に八中と広島附中の選手だった人と三人で九点入れて勝ったのが兵学校に於ける記録ださうです⁵⁵。

海軍兵学校では設立後まもない時期にスポーツが取り入れられ、最初は娯楽として、そして 1921 年以降は授業の一環として実践されてきた。しかし、海軍兵学校といえば、まずは棒倒しであり、ついで相撲、体操、漕艇、水泳が想起された。これらの運動こそが海軍兵学校を代表したのであり、海軍兵学校の男性性を象徴したのである。スポーツは次要の地位しか与えられなかったが、海軍兵学校の男性性に適合する形で実践されていた。技術やルールにこだわらず、敢闘精神を前面に押し出し、棒倒しや相撲と同じような形で取り組むことによってはじめてスポーツは価値あるものとなったのである。

2. 海軍機関学校

1874 年に海軍兵学寮分校が横須賀に置かれたのが海軍機関学校のはじまりである。この学校は 1887 年にいちど廃止され、1893 年に再開した。海軍機関学校でいつからスポーツがおこなわれるようになったのかははっきりしない。ただ 1903 年に横須賀海

⁵⁴ 海兵 62 期私史刊行委員会編『無二の航跡』海軍兵学校第 62 期会、1987 年、421 頁。

⁵⁵ 伊藤敦夫「所感」（東京府立第五中学校紫友会蹴球部編『誕生十年：五中蹴球部』編者刊、1935 年所収）。

軍下士卒集会所に遊戯場を開設しようとしたとき、海軍機関術練習所（のちの海軍工機学校）前の1500坪の空地に「自転車レース場」や「テニス、フットボール等を為す場所」をつくる予定だったことから考えて、再開当初からスポーツがおこなわれていた可能性が高い⁵⁶。1908年刊行の『海軍機関学校生活』には次のような一節がある。

学校の生活は、一言すれば運動と勉強とのみである。授業は朝八時に始まり午後四時に終り、夕食後は更に温習が始まる。かゝる次第で閑な時としては、別科後と食後の一時間か半時間内外の短時間に過ぎぬ。その間に於ても、勉強するとか、運動（弓、野球、庭球）するとか、展覧室に雑誌、新聞其他の参考書を読むとか、或は入浴、用便等を為すのである。又朝食と夕食の後には柔道と剣術の道場が開放せらるゝので、此の方へ行く人も可なり多い⁵⁷。

自由時間のスポーツとは別に、生徒全員が参加する「総員運動」が月2回おこなわれていた。1907年に海軍機関学校に入学した大江覚次郎によれば、「総員運動」は次のようなものであった。

これには棒倒しとフットボールがあり、名は総員運動とは云われているが、実は前述の一例横隊焼入れ式鉄拳制裁に対する下級生の息抜きのようなもので、上級生中余りにも権力の乱用目に余るものに対するある種のふくしゅうで、時には同級生も余り積極的に防御に援助の力を与えなかった。なかでも棒倒しの方は棒という目的物があるので目に余る乱暴はできがたいが、蹴球の方は反対で、蹴られるまりの方は運動場の片隅に只一個転がっており、生徒達はただ打ち合いの集団……⁵⁸。

海軍兵学校とまったく同じ光景である。1917年ころの様子を記録した『白浜生活』にも同様の記述がある。

総員運動（其一）フットボール 毎月二回の総員運動、一は棒倒し他はフットボール、又時として綱引、野仕合も行はれる。東西に分れた両軍は今や入り乱れて奮戦して居る。鞠の高く天に飛ぶは極めて稀で多くは鞠を中心にして周囲に蝶の如

⁵⁶ 『東京朝日新聞』1903年1月23日。

⁵⁷ 某「別科の感想」（海軍機関学校編『海軍機関学校生活』一二三堂、1908年所収）。

⁵⁸ 大江覚次郎「生徒生活の回想」（海軍機関学校海軍兵学校舞鶴分校同窓会世話人編『生活とその精神：海軍機関学校・海軍兵学校舞鶴分校』編者刊、1970年所収）。

き鉄拳の交換である。敵も殴る、味方も殴る、鼻血も出る、目から火が出ることもある。殴つて蹴つて走り廻つて、汗の源泉が全く涸れた頃にはどうやら勝負も決するのである⁵⁹。

松永三郎（海機 29 期、1920 年卒）も「我々の時までは野暮な訓練ばかりで近代的スポーツの庭球、野球、蹴球、籠球、バレー等やらされ」ず、ただ「昼食後の休憩時間にバスケットボールを当てがわれて、何にもルールなく唯蹴散らし、球はそつちのけにして投げ合い遊ぶことだけが許されていた」と述べる⁶⁰。サッカーとはいっても、遊戯よりは格闘技に近いもので、およそスポーツという言葉から想像されるようなものではなかった。サッカーは男らしいやり方で実践されていたのであり、だからこそ棒倒しとならぶ高い位置づけを与えられ、他の遊戯とは区別されていたのだろう。

海軍兵学校と同じく、海軍機関学校でも 1921 年から訓育科目として「体技」が導入された⁶¹。まずサッカーについて見てみよう。大日本蹴球協会の井染道夫は海軍のサッカーを紹介する記事で「一昨年横須賀鎮守府は公報に、一般的且つ簡単に行はるゝは蹴球であると宣伝した。蹴球でも特にア式を採用する旨の揭示も出たのである。愈々実施は昨年からであつて……」と述べる。もちろんこのたび「導入」されたのは、スポーツとしてのサッカーであった。海軍機関学校でサッカー推進の中心となったのは、「蹴球を唯一の趣味」とする教官、柳原博光大尉（海機 20 期）であった。海軍機関学校は数千円の費用を投じ、サッカー場を整備し、ボールや靴を揃え、井染ら民間人のコーチから指導を受けた。中学時代に選手だった連中もいて、1922 年には鎌倉師範や東京帝国大学に対して勝利を収めたばかりでなく、先生役だった東京蹴球団をも撃破した⁶²。山下実によれば「〔野球と違って〕頑張り力が物を言うサッカーの方は、特に雨天

⁵⁹ 海軍機関学校『白浜生活』松岡写真館、1917 年。

⁶⁰ 松永三郎「海軍生活の憶い出」（海軍機関学校第二十九期級会編『海機二十九期級会特別会報』第二十九期級会幹事、1963 年所収）。実際には野球などもおこなわれており、松永の記憶はやや混乱しているようである。

⁶¹ 瓜生総男「生徒時代の思出」（海軍機関学校第三十二期結成五十周年記念行事委員会編『懐古録：白浜より五十年』編者刊、1970 年所収）。1918 年 8 月制定の海軍機関学校生徒科教育綱領で「別科」に含まれていた体操や武道は「訓育」に組み込まれた（海軍省編『海軍制度沿革』巻 12、原書房、1972 年、172-174 頁）。

⁶² 井染道夫「海軍の蹴球」『アスレックス』1 巻 2 号、1922 年 5 月、『東京朝日新聞』神奈川 2 版、1922 年 5 月 27 日。

の試合では当時一流に属する東京蹴球団を破る殊勲を樹てたこともある」と、天候も体力一本槍の海軍機関学校に味方したようである⁶³。

野球の中心となったのが、愛知一中で選手として活躍した経験を持つ水野英一大尉であった。野球部は毎朝 20 分、昼食後 30 分、放課後 50 分の練習をおこない、校内の理髪職人までもが野球に熱中した。同校練習科には「野球のやうな西洋の遊技をしては不可^{いけな}い」という将校もいたが、野球熱を抑えることはできなかった⁶⁴。対外試合の最初の記録は、1921 年 12 月に第一高等学校の学生を招いておこなった試合である⁶⁵。結果は 1 対 18、一高の東武雄投手のまえに大敗した。1922 年 4 月には柳原の引率で東京に出向き、柳原の母校である学習院と対戦し惜敗した。もっとも今回の敗因は「試合慣れして居ない紅顔の生徒選手達は敵の女子応援団に圧倒されて十分な実力発揮出来ず」とされたのだが⁶⁶。柳原がいかにスポーツの発展に尽力したかは、同僚の沢達（海機 22 期）が証言している。

私は柳原さんとは、白浜の機関学校で一緒に教官をやっていました。機関学校は、昔からテニスは正課でしたが、その外にスポーツを入れ、野球のユニホームを作らせたのは柳原さんですよ。私は、体操指導官をしていたんですが、体操の用具を一向に整備してくれない。そこで山下巍八郎さんが生徒課長でしたが、柳原さんに「正課である体操の器具を買ってくれないのはどういうわけですか」と云ったんです。そしたら柳原さんが「わかった」と云って直ぐに当時の予算をパッとさいて、体操の用具を買ってくれました⁶⁷。

33 期的小林儀作は当時の思い出として、「二号生徒以降は野球部の選手に選ばれ毎日猛訓練、夏休暇も五日早く帰校し早稲田大学の太田コーチによる目の眩む様な猛練習、

⁶³ 山下実「懐旧雑感」（機第三十四期級会『思い出の記』所収）。

⁶⁴ 一記者「海軍機関学校の野球熱」『野球界』12 卷 13 号、1922 年 10 月。

⁶⁵ 『東京日日新聞』神奈川版、1921 年 12 月 19 日。

⁶⁶ 『東京朝日新聞』1922 年 4 月 16 日、目黒孝清「海軍の思い出」（海軍機関学校第三十二期結成五十周年記念行事委員会編『懐古録』所収）。柳原は明治 37 年度から明治 39 年度まで学習院の野球部に在籍し、レフトやサードを守った（当時の名は大原義質）。エースは三島弥彦、日本人ではじめてオリンピックに出場した人物である。『学習院野球部百年史』（同書刊行会、1995 年、64-92 頁）には柳原の「明治という時代の野球部」という文章が収められている。

⁶⁷ 「座談会記事」（海軍機関学校海軍兵学校舞鶴分校同窓会世話人編『生活とその精神』所収）。

一高との定期試合にて一高スピリットの片鱗に触れたこと、野球指導官原〔重政〕教官に大変お世話になった事」を挙げている⁶⁸。太田というのはおそらく記憶違いで、愛知一中出身で早稲田野球部主将の高松静男がコーチをした⁶⁹。高松は「飛田穂州^{ママ}氏の猛訓練を受けた選手であるだけにそのコーチ振りは今思出しても激しいものであった⁷⁰」。一高や飛田に代表されるいわゆる武士道的な野球は海軍機関学校の生徒には受け入れやすいものだった。1922年の秋には一高、学習院、商船学校と試合する予定で、将来的には陸軍士官学校や海軍兵学校との対戦を考えていた⁷¹。

ラグビーも野球やサッカーと時を同じくしてはじまった。1922年12月に海軍機関学校教官となった山中朋二郎（海機21期）によれば、それまでサッカーが盛んだったが、「ラグビーの方が闘志を養うのによい」という河村脩監事（海機24期）の提案でラグビーをはじめることになった。教官には経験者がいなかったので、慶応大学の選手を招き、ラグビーの基本や試合振りを見せてもらった⁷²。しかしその後ラグビーは続かなかった。先述のように1923年12月に香山蕃が海軍兵学校を訪れた際、海軍機関学校の生徒もラグビーの指導を受けた。その後海軍兵学校の英語教師ランダルが海軍機関学校にもチームを作って練習しようと持ちかけた。ランダルはイギリス陸軍の騎兵大尉として第一次世界大戦に参加した経験を持つ人物である。海軍機関学校側は慶応にコーチを受けたとき、ラグビーをしていなかったが、さいわい野球部の岸本健雄が京都一中でラグビーをやった経験があるとのことで、彼を中心にチームが編成された。試合は引分けに終わった。この試合を見学した武富温興（海機36期）は「鉄の団結によるチームプレーと、三〇名の烈しい闘志の激突、レフェリーの笛に絶対服従の厳しいルールによる男らしいスポーツに、すっかり魅せられ、血を湧かせ」、のちにラグ

⁶⁸ 小林儀作「海軍生活の思い出」（海軍機関学校第三十三期級会『海軍生活の思い出』編者刊、1971年所収）。

⁶⁹ 則武市雄「白浜生活の思出」（海軍機関学校第三十三期級会『海軍生活の思い出』所収）、鯉原栄一郎「夢に見る海軍」（海軍機関学校第三十二期結成五十周年記念行事委員会編『懐古録』所収）。

⁷⁰ 山内春雄「泳ぎと白浜生活」（海軍機関学校第三十三期級会『海軍生活の思い出』所収）。

⁷¹ 一記者「海軍機関学校の野球熱」。

⁷² 山中朋二郎「海軍機関学校の体育」（海軍機関学校・海軍兵学校舞鶴分校同窓会『生活とその精神』所収）。

ビー部員として活躍することになる⁷³。

ラグビーが本格化するのには海軍機関学校が1925年に舞鶴へ移転して後のことである。山中朋二郎は「ラグビーを何とか強いものにしたいと思って夏休暇にも生徒の有志を早く帰校させて練習させたり、ラグビー訓育時間を多く取ったりし」た。同年11月には同志社大学の選手を招待して交歓試合をおこなった。さらにその年の冬休暇には河村監事、秋重〔実恵〕監事（海機28期）と、ラグビー部員23名を連れて京都一中の柔道場で合宿を実施し、「三日間、穴だらけの障子から吹き込む寒風を、貸蒲団屋のセンバイブトンで凌ぎながら、京大のOBチーム、同志社の商科部、京都第一商業、最後には京大のAチームと試合をやった⁷⁴」。

1924年5月のこと、第三高等学校ラグビー部主将西島捨丸は舞鶴海軍防備隊に招かれてラグビーを指導した。それが縁で三高ラグビー部は同年の夏合宿を舞鶴で実施した。1929年春、こんどは京大のラグビー部が舞鶴で合宿をおこなった。当時の京大ラグビー部は「三年連続全国制覇を果たした時代で、紺のユニホームに白いライオンのマークをつけて颯爽としており、京大の宇野・馬場・進藤・岩前・西野・山本の各氏を神様のように憧れた」と海軍機関学校の元生徒は語る。同年冬には教官の君島武彦大尉（海機32期）が単身で京大ラグビー部の合宿に参加して指導法を学び、学校に戻るやいなやユニフォームや靴を改善し、猛練習をおこなった。京大は3年続けて舞鶴で合宿をおこない、海軍機関学校も京大で合宿をした。1930年秋からは三高と、春は舞鶴、秋は京都で定期戦をおこなうようになり、1941年5月まで続いた⁷⁵。

1930年代、ラグビーは海軍機関学校のなかで特別の地位を占めた。

学術に並行して課せられるものは、訓練である。勿論日常生活の全てが之に属することは明らかであるが、特に体育上のものとして左の様な広範囲の武技体技が

⁷³ 富永章「江田島での想い出」（海軍機関学校第三十三期級会『海軍生活の思い出』所収）、土井章寛「追憶と随想」（機第三十四期級会『思い出の記』所収）、武富温興「ラグビーとの縁」（二洋会『海軍同期生回想録』編者刊、1974年所収）、堀敬二・松岡三良「海軍機関学校のラグビー百聞」『五十六期々会々報』44号、2000年12月10日。

⁷⁴ 山中朋二郎「海軍機関学校の体育」、原田力「連ぎようの花に向いて」（昭三会『海軍回顧録』編者刊、1970年所収）。

⁷⁵ 松岡三良「昭和初期の京大ラグビー部と海軍機関学校」『五十六期々会々報』9号、1982年3月20日、堀敬二・松岡三良「海軍機関学校のラグビー百聞」。

実施されて居る。即ち柔剣道、相撲、水泳、体操（陸上競技をも含む）陸戦、短艇、ラグビー、スキー等で外に有志訓練として野球、ア式蹴球、庭球、弓術、馬術等があり、之れに素養ある者は暇を利用して練習する事が許される。……四月下旬、或いは五月下旬の対三高のラグビー戦は本校のベストメンバーにより本校練習場に於て行なはれるが、毎年本校の勝となつて居る⁷⁶。

ラグビーが生徒全員に課せられていたのに対して、野球やサッカーは有志の課外活動と位置づけられていた。海軍機関学校と目と鼻の先にある海兵団でも各種スポーツがおこなわれていたが、ラグビーはしていなかった。かつて柳原はサッカーを士官だけに限定したが⁷⁷、1930年代のラグビーも士官に限定されていた。棒倒しが海軍兵学校の男性性を象徴したように、ラグビーは海軍機関学校の男性性を象徴する存在となった。1933年10月末に天皇が海軍機関学校を訪れた際、ラグビーの試合を天覧に供したことはそのことをなによりも示している。ラグビーは彼らのエリート意識と密接に結びついていた。そしてラグビーをとおして京大や三高と交流したことは、さらに彼らのエリート意識を強めたであろう。ここに、イギリスにおけるパブリックスクール、スポーツ、軍隊というトライアングルと類似した構造を認めることができよう。

実際、海軍機関学校の生徒たちは、自らをパブリックスクールの学生に重ね合わせていた。榎本隆一郎（海機24期）は海軍三校の訓育の特徴として「生活及び訓練の様式が英国のパブリック・スクールの流れを汲んでいる」と述べ、その原因として「英国海軍少佐ダグラス氏は、有名なウインチエスター・パブリックスクールの出身で少年時代の経験をその儘日本海軍の生徒に持ち込まれた」ことを挙げた⁷⁸。額久直（海機34期）は榎本教官から『トム・ブラウンの学校生活』を勧められ、読後に「全編に漲るものは英国の紳士道である。日本に適用して毫も差支へはない。日本にこそ適用す

⁷⁶ 田村良三「NEC 便り」『学友会誌』41号、姫路中学校、1933年。

⁷⁷ 井染道夫「海軍の蹴球」。井染はこうした考え方に違和感を表明している。

⁷⁸ 榎本隆一郎「舞鶴時代の思出」（機第三十四期級会『思い出の記』所収）。これは事実と反するが、むしろそのように彼らが考えていたことが重要である。榎本は1925年10月に欧米出張を命じられ、海軍機関学校から離れた。榎本は出張先のイギリスでイートン校を訪れ、フットボールの訓練を見学し、強い印象を受けた（榎本隆一郎『回想八十年：石油を追って歩んだ人生記録』著者刊、1975年、122-123頁）。

べきである」と感じた⁷⁹。いうまでもなく『トム・ブラウンの学校生活』はパブリックスクールのバイブル的書物である。自らをトム・ブラウンに重ねあわせた彼らにとって、海軍兵学校の生徒は「暇さえあれば、教科書にばかりかちりつく、席次争いの点取り虫」であった⁸⁰。そして自分たちこそ海軍兵学寮の伝統を引き継いだと自負していた。海軍機関学校にキリスト教信者が多かったのも偶然ではない。榎本もまたキリスト教信者であった⁸¹。

3. 艦隊・工廠・海兵団

海軍兵学校、海軍機関学校でスポーツを楽しんだ士官候補生たちは、その後の海軍生活のなかでスポーツを楽しむ機会があったのだろうか。海軍機関学校 32 期生の鰐原栄一郎は大の野球好きであった。在校中はもちろんのこと、1923年に卒業して後も、様々な場面で野球を楽しんだことが、彼の回想録からわかる。鰐原は機関少尉時代の巡洋艦春日や海軍機関学校、機関長として乗艦した駆逐艦樫、駆逐艦樫、分隊長をつとめた横須賀海兵団、総務部校務主任をつとめた第三海軍燃料廠で野球チームに参加した⁸²。すべての部署に野球チームがあったわけではないが、学校を卒業しても野球をする機会が豊富にあったことは確かである。

1924年、戦艦長門は連合艦隊の大会で柔剣道、短艇、体技競技に総合優勝して「プリンスカップ」を授与された。鰐原も野球に出場してこの勝利に貢献した⁸³。このプリンスカップとは1922年に皇太子が自身の所属する第一艦隊の准士官以上の健康増進と体育向上のために下賜した優勝盃である⁸⁴。『アサヒスポーツ』1巻16号には1923年の優勝艦陸奥の艦長と優勝盃の写真が掲載されている。1925年は前年末から4月末にかけて、各地に在泊中の余暇に継続的に挙行され、戦艦日向が優勝している⁸⁵。

⁷⁹ 額久直「懐旧断片」（機第三十四期級会『思い出の記』所収）。

⁸⁰ 岡田兵一郎「白浜の思い出」（海軍機関学校第三十三期級会『海軍生活の思い出』所収）。

⁸¹ 海軍機関学校とキリスト教の関係については堤健男『クリスチャン海軍生徒』著者刊、1987年を参照。

⁸² 鰐原栄一郎「夢に見る海軍」。

⁸³ 鰐原栄一郎「夢に見る海軍」。

⁸⁴ JACAR: C08050568600（1-9画像目）。

⁸⁵ 『アサヒスポーツ』3巻11号、1925年6月。1926年以降の状況は確認できない。

1925年6月、海軍機関学校34期生は練習艦艦手で練習航海をおこなった。江田島から青島、大連を経て、佐世保、舞鶴、ウラジオストック、大湊、横須賀を回るコースであった。山上実がウラジオストックの思い出を次のように語る。

〔ソ連の〕新政府はスポーツを奨励したのかサッカーのクラブチームが沢山あってその一つと交歓試合を行なうこととなり、急遽候補生チームを編成して対戦したが、勝っていた試合をゴールキーパーの小生のミスで一点を許し引分けにした残念な思い出がある⁸⁶。

その後に出かけた遠洋航海の行き先はオーストラリアだった。シドニー、アデレード、メルボルンの各地で現地のチームと野球の試合がおこなわれた。

私は投手をやったが、航海中暇を見付け風の強い狭い後甲板でキャッチボールしか出来ない練習不足で、善戦空しく敗れた。相手が外人で脚が長いから膝のあたりが弱いだらうと低目に投げたが、掬い打ちされて弱った。考えて見ると彼等はクリケットの素養があるから、掬い打ちはうまい筈だと後で気が付いた。野球場では入場料を取っているようだったので、彼等はプロ野球チームではなかったかと一寸不愉快な気もした⁸⁷。

艦船、海兵团など海軍の艦団部隊で公務遂行上必要な物品は艦営需品と呼ばれ、その品目は海軍大臣が定めた定額表によって規定されていた。1921年に軍需局長は各鎮守府参謀に次のような指示を出した。

今般野球、庭球、蹴球要具ヲ艦営需品定額表ニ定数設定相成候処、同要具中野球ハ陸上部隊及艦隊戦隊司令部ノミニ、庭球ハ陸上部隊及金剛級以上ノ軍艦、其ノ他ハ艦隊戦隊司令部ノミニ設定セラレ候ニ就テハ、野球ハ予備艦全部、庭球ハ金剛級以下ノ予備艦ニ於テハ使用ノ途ナキ形ニ有之候処、右ハ各部協定使用セシメラルル趣旨ニ有之候条、可然御取計相成度⁸⁸。

⁸⁶ 山上実「懐旧雑感」。練習艦隊艦手『練習艦隊艦手巡航記念 大正14年度』凸版印刷、1926年にはウラジオストックでのサッカー試合の写真が掲載されている。また同書から、ウラジオストックの試合が1925年8月23日、アデレードの試合が1926年1月18日、メルボルンの試合が1月23日、シドニーの試合が2月6日であったことが確認できる。

⁸⁷ 土井章寛「追憶と随想」。

⁸⁸ 「運動要具ノ件」『海軍公報（部内限）』468号、1921年9月8日。当時の軍需局長は山口鋭少将。山口は海兵17期で、秋山真之と同期であった。

スポーツは公務遂行上必要な活動と認められ、その用具の購入は軍需部によってなされていたわけである。これに関連して、軍艦が建造された際、建造を請け負った造船所からスポーツ用具を含む娯楽用具一式が寄贈されていたことを指摘しておこう。たとえば、1927年3月に竣工した駆逐艦水無月は、竣工に先立ち、同艦建造にあたった浦賀船渠株式会社より、娯楽品一式を寄贈された。その品目は庭球要具、相撲褌、蹴球ボール、蓄音機、碁、将棋、理髪道具などであった⁸⁹。1929年4月、重巡洋艦羽黒は就役を前にして、同艦建造にあたった三菱造船株式会社長崎造船所より、娯楽品の寄贈を受けた。准士官以上向けには囲碁、将棋、蓄音機、アイスクリーム製造機、兵員用には囲碁、将棋、蓄音機、理髪道具、バレーボール用具などがあった⁹⁰。これらの物品は届出のうえ備品として登録された。

次に工廠や海兵団の状況を見てみよう。海軍の工廠のなかでもっとも早くにスポーツをはじめたのは呉海軍工廠である。『呉野球史』によれば、1899年に東大出身の造船大技士山田佐久が、職工に体質虚弱の者が多いのを目にし、職工の体質改善策として野球を導入した⁹¹。1920年には海兵団にも野球部が設置され、呉海軍工廠には多いときで30の野球チームがあった。実力もなかなかのもので、1922年に造船部チームは全国実業野球大会に出場している⁹²。

しかし、呉海軍工廠のスポーツといえは、なんといってもバレーボールだった⁹³。1922年に呉海軍工廠砲煩部の製図工河野実一が結成した壬子クラブは日本で最初の実業団バレーボールチームであった。1925年、第2回明治神宮競技大会山陽第二区予選に出場した壬子クラブは見事優勝した。本大会では1回戦に不戦勝し、2回戦で東京のコメット倶楽部に敗れた。1927年の第4回明治神宮体育大会には呉水雷クラブが出

⁸⁹ JACAR: C04015881000 (1-5 画像目)。

⁹⁰ JACAR: C04021829100 (1-3 画像目)。このほか1927年10月に竣工した伊号第二潜水艦 (JACAR: C04015882400 (1-7 画像目))、同年12月に竣工した伊号第二潜水艦 (JACAR: C04021828300 (1-6 画像目))、1928年12月に就役した駆逐艦白雪 (JACAR: C04021828400 (1-5 画像目)) も娯楽用具一式を寄贈されている。

⁹¹ 中谷白楊『呉野球史』第1巻、著者刊、1926年、8頁。ただし山田は1899年にはイギリスにいたはずで、この記述には誤りがある。

⁹² 広島県体育協会編『広島スポーツ史』548頁。

⁹³ 呉海軍工廠のバレーボールについては、呉バレーボール協会編『創立80周年記念誌』編者刊、2008年に詳しい。

場し、準優勝した。1932年に全日本排球選手権に出場した呉水雷クラブは、常勝神戸高商を下し、ついに全国制覇を果たした。チームの平均年齢は21歳、その多くは見習工の素人から鍛えあげられた選手だった。豊島明男の指導により、昼休みと就業後、工廠内の空地で猛練習したという⁹⁴。さらに翌年には全呉工廠チームを結成して、第7回明治神宮体育大会に出場、決勝でまたもや神戸高商を下して優勝した。以後、1942年に第13回明治神宮国民錬成大会で同大会3度目の優勝を果たすまで、呉海軍工廠の全盛時代が続いた。

呉鎮守府では海兵団でもバレーボールが盛んだった。社会主義者伊藤伝は1926年12月1日に呉海兵団に入団、その後5か月間を呉で過ごした。この間の伊藤の日記は、バレーボールに8回、バスケットボールに4回言及する。最初の記述は1927年1月7日のもので、「体技、バスケットボールの仕あいをみせてもらった」とある。翌々日にもまたバスケットボールの練習を見学し、1月14日にバスケットボールをした。一方、バレーボールは1月13日にはじめておこない、1月29日、2月8日、4月18日に試合をしたことが記される⁹⁵。とくに1月はバスケットボールとバレーボールに7回も言及する。体技としてはほかに柔道と相撲に言及するが、その数は少ない。

1922年6月に横須賀鎮守府を訪れた運動記者倶楽部の記者によれば、同地で一番優勢なスポーツは野球とテニスであった。工廠内の各工場では昼休みに狭い空き地で野球がおこなわれていた。記者団は海兵団と防備隊のピックアップチームと試合をし、その実力を「万一軍縮で首になつたら隊で鳴らした連中が更に本場で練習を積みプロフエショナルのチームでも作つたら」と評価した⁹⁶。1923年春の半島野球大会で海兵団は決勝まで進んでいる⁹⁷。1927年に春日俊吉は「横須賀野球界雑信」という文章のなかで海兵団のプレーぶりを次のように描いた。

三日の準決勝に、アマチュアと海兵団のやつた試合だけは、ア軍は例によつてドラドラと、不熱心に試合をするけれど、兵隊さんの方は上官達が、ズラリとベンチに控へてゐるので、物凄いはかりのキン張味を示して、私なぞにもちよつと面

⁹⁴ 広島県体育協会編『広島スポーツ史』380頁。

⁹⁵ 伊藤伝著、山本茂編『海軍水兵反戦日記』三一書房、1978年、92-94、96、98-99、105、109頁。

⁹⁶ 『東京朝日新聞』1922年6月26日。

⁹⁷ 『東京日日新聞』横浜・横須賀版、1923年5月23日。

白かつた。海兵団は、よく練習も積んでもゐるし、キビキビした土地では一番気持のいいチームである。あれで投手がもう少し良かつたら、アマチュアなぞに決して負けては居ないだらう。捕手の木村はお角力さん然とした居丈夫で、強肩豪打、ちよつと得難いプレーアで遊撃の中村もなかなかうまい。呉の海兵団と試合をしても、ずーつと勝ちつづけてゐるさうである。なんと云つても試合に熱のあるのが一番いい。⁹⁸

海兵団は民間人から見て軍人にふさわしい戦いぶりをしていた。言葉を換えて言えば、水兵たちは民間人のスポーツマンに軍隊的な男らしさを示したのである。とはいえ、海兵団でおこなわれていたスポーツと海軍兵学校や海軍機関学校でおこなわれていたスポーツには大きな違いがあった。1927年に海兵団を修業した機関兵は野球を次のように描く⁹⁹。

見て居てとても痛快、血湧き肉躍る競技は此の野球だ、投手の手から白糸が電の様に飛び出したかと思はれる様な「スピードボール」何糞—「カーン」思ひ切りかつ飛ばした「フライボール」「よしつ此のボール^{ママ}已が貰つた」ひた走りに走り乍ら見事受取つた外野手の腕の冴え、『アウト—』天を突くかと思はれる様に振り上げられた『アンパイヤー』の握り拳。とても痛快—痛快！

海兵団では野球は鍛練としてではなく、娯楽としておこなわれていた。海兵団でおこなわれていたスポーツはパレーボール、バスケットボールがもっとも多く、野球がそれに次ぐ。サッカーはさらに少なく、ラグビーは皆無である¹⁰⁰。士官と下士官兵の間には、スポーツの種類や意義に関して明確な区別があった。

ふたたび工廠に話を戻そう。1923年夏、横須賀鎮守府の海軍工廠工友会野球大会には33チームがエントリーし、海軍工廠長藤原英三郎により始球式がおこなわれた¹⁰¹。ちょうどこの頃、海軍工廠は軍縮の影響を受け、第二次の職工淘汰を実施して1000名

⁹⁸ 春日俊吉「横須賀野球界雑信」『野球界』17巻11号、1927年6月。

⁹⁹ 『昭和二年度志願兵四等機関兵教程・三等機関兵特別教育修業記念』横須賀海兵団、1927年。

¹⁰⁰ 1923年から1943年までの海兵団の修業記念写真帖約30冊を通覧した結果である。香山蕃は1924年の著書で、各鎮守府の海兵団でもラグビーがおこなわれはじめたと記したが（香山蕃『ラグビー』改造社、1924年、44頁）、海兵団のラグビーは定着しなかった。

¹⁰¹ 『東京朝日新聞』横浜・横須賀版、1923年7月13日。

を解雇することになった。解雇の基準は体格で、6月6日から体格検査がおこなわれた¹⁰²。野球の選手たちはおそらく解雇を免れたであろう。

同年9月の大震災で横須賀鎮守府は大きな被害を受けた。2年後、宇垣一成陸相はこの時の状況については竹内東一郎から次のような話を聞いた。横須賀工廠と浦賀造船所で火災が発生したが、横須賀では火を消しとめ、浦賀では主要部分を焼失した。横須賀では「職員と職工間に温情ありて職員の命に従ひ踏止まりて消火に従事した」のに対し、浦賀では「平常より職員と職工間には単なる雇傭関係のみにて温情の存する薄かりし為、天地顛倒の感ありし一刹那に彼等職工は職員などとは無交渉に身を以て逃れて一家の急に赴き真面目に消防に従事したるもの少なりし結果」である、と。宇垣はこの説明を鵜呑みにしてはいないが、「吾人の大に顧慮を要すべき一面の真理は含有して居る」と考えた¹⁰³。海軍工廠の職工解雇は1920年代を通じて大きな問題であり、工友会と工廠当局との対立も増していった。そんななか、野球は労働者の不満をそらす安全弁の役割を期待されたのではないだろうか¹⁰⁴。

海軍当局が職工の福利厚生に配慮していたことは、慰安費の支給からもうかがえる。1923年11月13日、工廠等の附属費に「慰安」が追加された¹⁰⁵。1925年5月21日の官房第1796号で、慰安費が別途支給されることになり、その額は施設の規模によって決められ、500人以下の施設では1人1円20銭、15000人以上の施設では1人80銭となっていた。慰安は原則として年2回実施し、その日の賃金は支給しないと規定されていた¹⁰⁶。以上の措置は海軍大臣財部彪の名でおこなわれている。財部はスポーツに理解のある人物で、横須賀鎮守府司令長官時代（1922年7月-1923年5月）、同鎮守府では海軍運動場が建設され、大規模な連合競技会がなん度も開催された。そのうちの一つ、

¹⁰²『時事新報』1923年6月7日。

¹⁰³宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、みすず書房、1968年、481頁。1921年夏に神戸で大規模な労働争議が発生、宇垣は第10師団の派遣要請にしぶしぶ応じた。爾来、労使問題には大きな関心を持っていた。

¹⁰⁴陸軍や海軍の工廠でも数多くの労働争議が発生していた。宇垣にとって切実だったのは、1919年10月に大阪砲兵工廠で起きた労働争議であろう。その意味で、宇垣第10師団長のもとでスポーツ推進の旗振り役をしていた歩兵第39連隊の市川洋造大尉（後述）の次の任地が陸軍造兵廠大阪工廠（大阪砲兵工廠の後身）であったことは示唆的である。

¹⁰⁵「慰安ニ関スル件」『海軍公報』3317号、1923年11月13日。

¹⁰⁶「職工慰安ニ関スル件」『海軍公報』3760号、1925年5月21日。

1923年3月10日に開かれた連合マラソン競走には財部自身も参加し、宇佐川知義参謀長とスタートに並ぶ写真が『アサヒスポーツ』に掲載されている¹⁰⁷。また、財部は息子たちにヨットをさせ、「オリンピック目指して頑張れ」と激励していた。その甲斐あって、次男の^{みのる}実^みは1936年のベルリン・オリンピックのヨット競技に主将として出場し、1940年の東亜競技大会では兄弟そろって日本代表に選ばれている¹⁰⁸。

1927年10月の官房第3841号で、下士官兵に対しても慰安費が支給されることとなった。官房第3843号によれば、慰安費は艦船内か陸上でおこなう運動、娯楽などを対象とし、1人50銭以内と規定されている¹⁰⁹。また慰安に関して、下士官兵と職工の間に差が生じないように配慮が求められた¹¹⁰。

1931年5月の官房第1483号で慰安費は体育普及費という名目に変わり、200人以下の施設で1人65銭、1万人以上の施設で1人40銭に削減され、1932年度の総額は1929年度の半額以下になった。体育普及費は1937年まで支給されたことが確認できるが、この間支給対象者が2倍近く増え、体育普及費の総額も1929年度の8割近くまで回復した。以下の資料は海軍当局が慰安に配慮した理由を物語っている。

官房第一四八三号体育普及ニ関スル件設定以来、作業庁当事者ノ熱心ナル指導ニ依リ、各地共従業員ノ体育運動ニ対スル興味勃興シ来レリ。殊ニ若年職工間ニ於ケル武技流行ノ如キハ、思想善導上注目スベキ現象ナリト認ム。故ニ此ノ機会ニ於テ、体育運動ニ関スル施設ノ完成ヲ急ギ、適当ニ之ヲ鼓舞奨励スルコトハ、従業員ノ心境ヲ明朗ニシ、勇往敢為ノ精神ヲ養フ上ニ於テ、極メテ有効ナリ。而シテ運動精神ノ普及ヲ図ルニハ、器具器械等ノ設備ト共ニ、競技会等ノ開催ニ依リ一般ノ興味ヲ刺戟スルノ必要アリ。之カ為、従業員講習及巡回講演ニ要スル経費中約三千三百円ヲ節約シ、之ヲ体育費ノ増額ニ振向クルコトトシ、左ノ標準ニ依リ各庁ノ振当額ヲ定メタリ¹¹¹。

¹⁰⁷『アサヒスポーツ』1巻2号、1923年4月。『アサヒスポーツ』は3月9日とするが、『財部彪日記』（国会図書館憲政資料室所蔵）によれば3月10日（土曜日）で、財部は55分（トップの記録は42分）でゴールした。なお、宇佐川は1912年から1917年まで東宮武官をつとめた。

¹⁰⁸『東京朝日新聞』1936年6月11日。

¹⁰⁹「下士官兵慰安ニ関スル件」『海軍公報』246号、1927年10月26日。

¹¹⁰JACAR: C04016894400（5画像目）。

¹¹¹JACAR: C05022407300（6画像目）。

ここでは明確に体育運動の効果が「思想善導」の観点から計られているばかりでなく、これまで思想善導のためにおこなってきた講習や講演よりも有効な手段とさえ認識されている¹¹²。下士官兵や職工のスポーツは海軍士官のそれとはずいぶん異なる意図をもっておこなわれていた。だからこそ戦時下でも、工廠の職工に対してスポーツを奨励しつづけたのである（この点は陸軍の工廠でも同様であった¹¹³）。

4. 海軍のスポーツ観

1920年12月に軍隊教育規則が定められ、体操と武技に加えて新たに「体技」が加わった。その内容は次のとおりである¹¹⁴。

- ・体技ハ健全ナル娯楽ヲ兼ネテ体力ヲ増進シ動作ヲ敏活ニシ元氣ヲ清新ナラシムルモノトス
- ・体技ハ相撲、駈足、登山、綱引、野球、庭球、蹴球、弓術、氷滑、雪滑等トス
- ・体技ハ日曜日、祭日、祝日、公暇日其ノ他適當ノ時期ヲ利用シテ之ヲ実施スルヲ例トス

この規定により、野球などのスポーツが軍隊教育の一部として明確に示された。さらに同規則は各基本長（軍艦、駆逐隊、潜水隊、掃海隊、海兵団、防備隊、航空隊の長）に体育主任を指名して体育の統一進歩を図ること、体育補助官を指名して体育主任を補佐することを求めている。ここで注意しておきたいのは、同規則がスポーツの鍛錬的側面だけでなく娯乐的側面をも評価している点である。

体技の導入を受けて、横須賀の海軍砲術学校（海軍の体育研究機関を兼ね体育専修を有した）でもスポーツが盛んになる。1921年1月22日、同校は野球、蹴球、庭球の第1回体技試合を開いた。蹴球についてはとくに東京高等師範学校体操科の教員と

¹¹² 陸軍についていえば、1932年は反軍策動が2437件と過去最高を記録している。1928年までは400件内外だったが、1929年以降急増した。その主たる原因は日本共産党による反軍反戦闘争にあった（大谷敬二郎『昭和憲兵史』みすず書房、1966年、第1章）。

¹¹³ 朝日新聞中央調査会編『地方娯楽調査資料』編者刊、1941年、123頁、日本厚生協会編『第一回日本厚生大会報告書』編者刊、1939年、118頁。

¹¹⁴ 海軍省編『海軍制度沿革』巻12、120頁。「体技」の導入は海兵団のほう若干早く、1920年10月制定の海兵団練習部教育綱領にその規定が見える（海軍省編『海軍制度沿革』巻12、391頁）。

学生を招待し、その指導を受けた¹¹⁵。翌月の新聞は横須賀のスポーツ熱を次のように伝えている。

大正九年度に於ける海軍学制の改正は激しい時代順応を意味して居る。夫れは最近まで殆んど等閑に附せられて居た運動競技を海軍各学校で実習せしむる事となつた事である。中にも横須賀の海軍砲術学校、水雷学校及機関学校等に於ては既に蹴球、野球、庭球等の運動を大に奨励しつつあるが、砲術学校では目下各其道の先輩校からコーチヤーを招いて大に技を練り、夫れ等の教範を作るべく研究中なりと¹¹⁶。

海軍砲術学校で中心となったのは2人の教官、鈴木嘉助少佐（海兵36期）と大西一等兵曹である。サッカーを士官候補生に限定した海軍機関学校と違って、海軍砲術学校では簡単な用具を用いて、できるだけ多くの学生・練習生（准士官以上を学生、下士を練習生と呼んだ）にサッカーを広める方針をとっていた。各艦隊に分乗した同校出身のフットボール好事家はすでに千人に達しようとしていた。大西一等兵曹などは航空隊や海軍水雷学校のコーチも兼任し、全海軍に普及させようとの意気込みであった¹¹⁷。

この記事にいう「教範」はのち『蹴球解説』として謄写版2000部が軍隊内の希望者に配布された。蹴球のほかテニスや野球の解説も作成され、1922年3月に各種解説を合本した『体育参考書』が海軍砲術学校から刊行された。その「緒言」は、列国の体育の現状と日本の体育の現状を概観しつつ、体育の刷新が急務であると述べる。日本の現状では、陸軍戸山学校を中心に体操教範を改正して競技を導入しようという取り組みがなされていること、陸軍当局が「此ノ際之ヲ刷新シ、益々奨励ノ道ヲ講シ、将来「オリンピック」ノ競技者ノ如キハ之ヲ軍隊ヨリ選出シ、真ニ国民中堅ノ代表者トシテ愧サラシメ、軍隊ハ実ニ国民一般ノ儀表トシテ^{ママ}卒先社会指導ノ任ニ当ラントスル抱負ヲ有」していることが紹介されている。海軍でも運動競技の気運が高まっているが、時間や場所が不足しており、「艦船等ニ於テハ、僅カニ五分間体操、武技、其ノ他ニヨ

¹¹⁵『東京日日新聞』横浜・横須賀版、1921年1月22日。

¹¹⁶『東京朝日新聞』1921年2月22日。

¹¹⁷井染道夫「海軍の蹴球」。

り形体ヲ繋クノ有様」である。最近横須賀鎮守府では運動場を設置し、「オリムピック」などの運動競技を実施して、奨励策を講じており、これをモデルとして海軍全体に運動競技の気運を促進することが今後の指針として示された。

『体育参考書』でもっとも高く評価されるのは蹴球である。その体育上の主な利点は

(一) 運動量大ニシテ短時間ニ充分其目的ヲ達スルコトヲ得

(二) 軍人的興味ニ富ム

(三) 陸上至ル所ニ運動場アリ、準備極メテ簡単ニシテ、実施亦容易ナリ。海軍用
野外体技トシテ最適当ナリ

の諸点である。また精神的鍛練としても、堅忍不拔の精神、勇往邁進の気象を涵養し、娯楽の間に協同精神、犠牲心を練磨できる点で、海軍体技として奨励に値するとする。さらに実施が簡単で、危険もなく、競技がきわめて整然としているという点で、ラ式蹴球（ラグビー）よりもア式蹴球（サッカー）を推奨する。サッカーについては、競技の説明だけでなく、練習方法や用具の手入れ、用具の値段、解説書の紹介までおこなう一方、ラグビーについては同書の末尾に呉海兵団蹴球部による「ラグビー式フットボールを見る人のために」を附すにとどまる。この小文はラグビーの見方を解説したもののだが、モルトケやウェリントンを引き合いに、ラグビーがいかに勇壮猛烈で、男らしい武士的精神に満ちた競技であるかを語っている点が興味深い。『体育参考書』は士官候補生だけでなく、広く海軍一般の教育を想定して作成されており、サッカーを優先したのは、軍人らしさよりも実施可能性を優先した結果であった。

海軍機関学校でスポーツを推進していた柳原博光教官は1922年5月にイギリス駐在武官を命じられる。1924年夏、柳原はイギリス軍のスポーツについて3つの報告をおこなう。6月13日付の柳第13号「英国海軍体技に関する件」は「海軍省体技課」(Department of the Director of Physical Training and Sports) とスポーツ統制委員会 (Sports Control Board) の紹介である¹¹⁸。スポーツ統制委員会は1920年に設立され、海軍のスポーツに関する事項を総括することを目的にし、士官兵の自由意志により維持されている。独自の基金を持つほか、酒保の利益、寄附などを財源とし、体技課と連携しつつも、独立して運営されている。委員会には海軍の種目別協会が加盟し、軍港

¹¹⁸ JACAR: C08051086600 (1-19 画像目)。

や国内外の艦隊に支部が置かれている。柳原は所見でイギリス海軍のスポーツを次のように評価している。

英国海軍ハ運動ニ関スル統一機関ヲ設ケ、紳士の規則ニヨリ体育訓育ヲ施シ、品性ノ陶冶、人格ノ修養ノ手段トシ、所謂彼等ノ云フ「スポーツマンシップ」ヲ養成シツ、アリ。其ノ「スポーツ」ノ組織ノ最モ特徴トスル処ハ、士官兵共、自発的即チ強制的ニアラズシテ「スポーツ」ヲ好ミ楽シム如クシ、相倚相助ケ、「スポーツ」ノ性質上、上級者モ下級者モ一致協同シ、相親ミ理解スル機会ヲ与フル如クシ、S.C.B.〔スポーツ統制委員会〕ハ士官兵ニヨリ所謂 Private ニ維持サレツ、アルコトナリ。

イギリス海軍の状況を踏まえたうえで、柳原は日本の海軍が採るべき方針について、「一つの主義理想」によって指導しなければ、「職業団の如き弊」に陥りやすくなるのであって、「「スポーツ」ノ自制協同及び他ト調和シテ働ク精神、不知不識ノ中ニ訓練規律ノ習慣性、命令ニ対シ快活ニ直チニ応ズル精神、耐久性、一致団結ノ気風ヲ与フル長所ヲ認識シテコレヲ奨励」せねばならず、そのためには体技の統一機関が是非とも必要であると主張した。柳原の報告を取り次いだ豊田副武英国大使館附武官も、柳原の「所見ニ全然同感ニシテ、帝国海軍ニ於テモ、今ヤ勃興セントシツ、アル運動体技熱ヲ善用シ、一層団結心ノ向上、忍耐力涵養ニ資スルヲ適当ト認ム。而シテ之カ為ニハ、教育局第一課ニ特ニ一員ヲ配シ、専心研究調査及統計交渉等ニ従事セシムルヲ必要ト認ム」と、現実的な提案をしている¹¹⁹。イギリスと違って日本ではスポーツは普及の途上にあり、海軍当局の奨励ないし強制を必要としていたが、ワシントン海軍軍縮条約以降、予算の大幅な削減を余儀なくされていたこともあってか、海軍は豊田の提言すら実行に移すことができなかった。

1924年8月、『海軍体操教範草案』が頒布された。本草案では、前草案（1917年）の内容が「基本体操」にまとめられ、あらたに「応用体操」と「体育競技」が追加された。応用運動には円盤投、槍投など陸上競技の成果が採り入れられた。競技の目的

¹¹⁹教育局第一課は1923年4月に教育本部が教育局に改組された際にできた部局で、教育の統一と一般教育に関する事項、教育図書に関する事項などを管掌する。当時の課長は百武源吾であった。百武はアメリカ駐在経験もあり、スポーツには理解があったと思われる。

は「快活進取ノ氣象ヲ振興シ、興味ノ裡ニ協同犠牲ノ精神ヲ涵養シ、品性ノ陶冶ニ資スルト共ニ、身体ヲ鍛鍊シテ動作ヲ機敏ナラシメ、以テ軍事諸般ノ業務ニ當リ其ノ効果ヲ發揚スル」ことに置かれた。草案に採用された競技は、平均破、追撃、球送、脚切、綱曳、投球、駢歩（疾走）競走、中継競争（リレーレース）、障碍物競走（ハードルレース）、突撃、排球（バレーボール）、籠球（バスケットボール）、蹴球（フットボール）で、蹴球はさらにア式蹴球とラ式蹴球に分けられている。排球は同時に多人数が従事でき、ほどよい全身運動で、微妙な協同動作を要する点、籠球は大なる全身運動で、巧緻性に富み、一瞬の判断、協同動作の敏速を要する点が評価された。戦闘性や男らしさが強調されるのは突撃、サッカー、ラグビーである。サッカーは「大ナル運動量ヲ有スル雄大ナル競技ニシテ、軍人的趣向ニ適シ、協同犠牲、奮闘、持久等ノ力ニヨリ団体的能力ヲ發揮セシムルノ特徴ヲ有」し、ラグビーは「勇壯活潑ナル男性的競技ニシテ、ア式蹴球ノ特点ヲ兼ネ、而モ絶対ノ規律ト徳義心トヲ有スル進歩的ナル運動」とされる。草案ではこのほか相撲、打球、庭球、野球、弓術などを推奨し、武技も「旺盛ナル氣力ト体力トヲ養ヒ、機敏性ヲ増進シ、且兵術ノ機微ヲ体得スルニ至便ニシテ、競技トシテ大ナル価値ヲ有ス」と評価する¹²⁰。海軍軍人としての男らしさを養成する手段として、体操、武技、体技は同等の価値を与えられており、武技が特権的な地位にあったわけではない。

草案は新しい体育の指針を示しはしたが、それをもとに指導するには記述が簡略に過ぎた。そこで草案を補足すべく海軍兵学校教官の武田盛治少佐が編纂したのが『運動競技提要』（1925年8月刊）である。冒頭には「摂政殿下令旨」と「秩父宮御言葉」が掲げられ、軍隊へのスポーツ導入に皇室の支持がいかに重要であったかを物語っている。同書は心身相関の観点から、体育は心育（＝智、情、意の修養）でもあり、「教育全般ノ基礎トシテ訓育上重要ナル使命ヲ有」すると説く。精神面を没却した運動はたんなる動物性の發揮に墮するのであり、運動精神を遵守し、フェアプレイ、すなわち「正義ニ基ク綺麗ナ試合、正々堂々ト行フ男ラシキ勝負」を心懸けることが重要となる。しかし、軍人は勝敗を度外視してよいのか。この点について、同書は、軍人は

¹²⁰「軍隊教育規則」は武技を遊泳術、銃剣術、剣道、柔道等とし、その教範として『遊泳術教範』（1924年7月）、『海軍銃剣術教範』（1917年6月）が制定されていた。

戦いに臨んでは如何なることがあっても勝たねばならず、心身の鍛練修養を目的とする平素の競技と区別されるべきであるとする。競技においては、卑怯の行為は武人の恥辱であり、卑劣な手段で勝つより潔く負けたほうが「ドレ丈ケ立派テアリ男ラシイカ知レナイ」。ならば運動は軍紀と対立しないのか。軍紀には直線的なものと曲線的なものがあり、教練は前者、運動競技は協同、犠牲、服従、忍耐、機敏、独断等の資質を涵養できるので後者に属する。両者が相俟ってはじめて軍隊教育の目的が達せられるとする。

同書が収録する競技は、陸上競技、ラグビー、サッカー、野球、ホッケー、籠球、庭球、排球、水上競技、クロスカントリー、競歩、登山、行軍と散歩、相撲、乗馬、弓術である。この順番は明らかに海軍にとっての重要度に対応している。ラグビーについては「壮快極マリナイ最モ男性的ナ運動テアル」とされ、肉弾相撃つ激しい競技にもかかわらず、自制を忘れず「ゼントルマンライク」に競技することが求められる点が評価される。海軍兵学校では武田教官の指導のもと全校生徒がラグビーをしていた¹²¹。この事実は同書におけるラグビーへの高い評価に対応している。サッカーの評価も高い。

本技ハ実ニ一主将ノ指揮ノ下ニ陣容堂々ト行ハレル一種ノ戦闘競技テ、多数戦士カ縦横ニ馳駆シ奮戦力闘スルノ状、其ノ局面変化ノ急激テ動作ノ壮烈ナル、真ニ雄大壮偉ナ男性的競技テアツテ、克ク青年ノ士気ヲ振作シ、遊惰ノ風ヲ去リ、剛健ノ気ヲ興スニ足ルモノカアル¹²²。

ラグビーが精神面で評価されたのに対して、サッカーは実際の戦闘での動きに近いという点で評価された。野球は全員が同時に活動しない点に問題があるが、周密な思慮、機敏な判断、勇断果決、協同といった資質を養うことができる¹²³。籠球は巧緻性、瞬間的判断、協同動作、敏捷性を養えるだけでなく、競技そのものが興味深く、初心者に

¹²¹ 土井章寛「追憶と随想」。香山蕃は1922年ころ、なん度か海軍砲術学校へラグビーのコーチへ行った。当時同校教官であった武田はラグビーに共鳴した（香山蕃『ラグビー・フットボール』372頁）。

¹²² 海軍兵学校編『運動競技提要』編者刊、1924年、102頁。

¹²³ 海軍兵学校編『運動競技提要』136頁。

も容易で、設備も簡単であることから、とくに艦上のスポーツにふさわしい¹²⁴。庭球は軍隊の一般団体運動としては不足の点があるが、設備も簡単で気軽に戸外運動に親しめ、家族的社交的で高尚優美な趣味多き運動である¹²⁵。同じく家庭的とされるのが卓球で、雨天や冬季におこなえるが、軍隊の公的「ゲーム」としては価値がない¹²⁶。排球は実施が容易で、誰でも参加でき、団体生活に必要な協同一致の精神を養える¹²⁷。こうした評価を見るならば、海兵団で入団後まもない時期にバレーボールやバスケットボールが実施されたことの意味がうかがえる。つまりそれらは協同性に欠ける新兵たちに集団生活への移行をスムーズにおこなわせるためのものだったのだ。

以上に見てきたように、海軍では体育主任を指名し、体育普及費や艦営需品を支給することで、組織的にスポーツを推進した。イギリスを模範とし、建軍後まもない時期から士官たちがスポーツに親しんできたこともあって、1920年にスポーツを本格的に導入するに際しても、大きな抵抗はなかった。スポーツは軍人の男性性に挑戦するどころか、武士道精神とスポーツマンシップは同一視されさえした。一方で士官と下士官兵・職工の間には厳格な区別があり、士官にはよりスポーツマンシップが要求されるスポーツが選ばれ、資金面でも優遇された。体操教範では数多くのスポーツが採用されたが、どのスポーツをどのように実施するかは現場の判断に委ねられた。海軍当局がスポーツの中身にそれほど干渉しなかったのは、陸軍戸山学校のような体育専門の研究機関を持たなかったためでもあるが、スポーツをそれほど異質なものと考えなかった結果でもある。事実、海軍は戦争の最末期までスポーツを奨励しつづけたのである。

第二章 陸軍とスポーツ

1. 体操とスポーツ

先述のとおり、明治政府は1870年に、陸軍はフランス式、海軍はイギリス式とする

¹²⁴ 海軍兵学校編『運動競技提要』267-268頁。

¹²⁵ 海軍兵学校編『運動競技提要』327-328頁。

¹²⁶ 海軍兵学校編『運動競技提要』393-394頁。

¹²⁷ 海軍兵学校編『運動競技提要』407-408頁。

ことを決定した。のち陸軍はドイツ式に転換するが、フランス軍にせよドイツ軍にせよ、スポーツの伝統がない点では同じであった。ドイツ陸軍が正式にスポーツを導入したのは1910年だったから、日本の陸軍がスポーツを採用しなかったのも不思議ではない¹²⁸。さらに当時の日本でスポーツの普及が進んでいなかったことを考えると、陸軍がスポーツを導入するにはよほど積極的な動機が必要だった。

では陸軍はなにによって軍人の体格・体力の養成を図ったかといえば、体操と剣術であった。1902年、陸軍一等軍医篠尾明斉は『偕行社記事』に寄せた文章において、イギリスとドイツを例に「国民体育ノ消長ハ国家ノ興亡ニ関シ、軍人体力ノ強弱ハ戦闘ノ勝敗ニ関ス」と体育の重要性を指摘し、体力増進の手段について「蓋シ適當ナル運動ニ如クモノナシ。弓術、射撃、球戯、乗馬、其他百般ノ運動法ハ一トシテ体力増進ノ効ナキニアラスト雖トモ、我陸軍ニ於テハ体操剣術ヲ以テ最モ有力ナル手段ナリトス。行ヒ易ク効多ケレハナリ」と論じている。篠尾は陸軍戸山学校の体操剣術科の学生・下士が在学中にどれほど体格を改善したか、具体的な数字を挙げてその効果を証明した。そして、体力が軍人の基礎であり、射撃の基礎であり、戦闘の基礎であるにもかかわらず、現行の教育法は射撃や教練に比して体育をあまりに軽視していると、体操、剣術の奨励を要望した¹²⁹。

同年の『偕行社記事』で後藤良男中尉も軍隊体育の重要性を論じている。後藤によれば、体育とは「有形的ニ身体ヲ強壮ナラシメ、健康ヲ保全シ、体力ヲ増進スルト共ニ、無形的ニハ勇敢活潑ノ氣ヲ養成シテ、忍耐及ヒ自信力ヲ発達セシムルモノ」である。

今日独逸国ノ隆盛ヲ致セル所以ハ、愛国家「シヤン〔Friedrich Ludwig Jahn〕」カ独軍ノ那翁ノ為ニ破ラレシヲ奮慨シテ、有名ナル体操家「チュルブラット〔Turnplatz〕」ノ原則ニ基キ、体操術ヲ発達セシメタルニ因ルコト歎シトセス。英国人ノ活潑ニシテ進取力ニ富ミ、且ツ其堅忍不拔ナルモ、彼国風トシテ国民ノ総テカ幼時ヨリ体育的遊戯ヲナスニ原因ス。

とやはりイギリスとドイツを例に挙げ、体育の盛衰が国運の消長に直結すると論じる。

¹²⁸ 望月幸男『軍服を着る市民たち：ドイツ軍国主義の社会史』有斐閣、1983年、89-90頁、Peter Tauber, *Vom Schützengraben auf den grünen Rasen*, pp. 138-140.

¹²⁹ 篠尾明斉「戦闘ト体力トノ関係ヲ論シ体操剣術ノ奨励ヲ望ム」『偕行社記事』293-294号、1902年7-8月。

かえりみて日本はどうか。日本人（兵士）の体格がいかに欧米人より劣っているかは、義和団事件の際に明らかとなった。日本の軍隊は慶応年間より体操を採り入れ、1874年にはフランスからデュクロ軍曹を招いて陸軍戸山学校で体操を教授させた。しかし普仏戦争後のフランス軍はもっぱら射撃を重視して体育を等閑視し、ために「仏国将校ハ極テ体育思想ニ乏シク之ヲ度外視スルノ感」があった。将校にしてそうであったから、下士は言うまでもない。こうして後藤は「我国体操教育ノ首導者トモ謂フヘキ彼ノ仏国ノ一下士」の資質に疑問を投げかける。しかしフランスは近年その過ちを悟り、1901年11月に「体育実施ニ関スル綿密ナル訓令」を發布し、体育を奨励している¹³⁰。日本もまたその過ちを悟り体育を奨励すべきであると後藤は主張した¹³¹。

イギリスの例がたびたび持ち出されるにも関わらず、なぜスポーツの導入を考えなかったのか。これまた1902年の『偕行社記事』の文章であるが、由比光衛少佐はイギリスの将校について次のように論じている。

英国将校ハ一般ニ能ク働ラキ、亦能ク遊フ。而シテ其遊働ノ限界頗フル正シク、僅少ノ時間ト雖トモ徒費スルコトヲ好マス……其遊技ノ重ナル者ハ打球、蹴球、競馬「バイセクル〔bicycle〕」ノ乗行、若クハ河海ノ操船等ニシテ、老壮ヲ問ハス遊技ニ勇ム。是レ蓋シ将校ノ特性ト云ハンヨリ、寧ロ国民一般ノ特性上自然ノ結果ナラン¹³²。

つまりスポーツはイギリスの国民性の発露であって、軍人必須の要件ではない。日本の陸軍はドイツ軍を範として体操を実施しており、国民的基礎をもたないスポーツを導入する必要性はなかった。もちろん、陸軍のなかにもスポーツに理解を示す人びとはいた。1905年に長岡外史少将は東邦協会で演説し、国民スポーツの必要性を説いた。

元来欧米に於ては文明の進むに従ひ益体力の修養に力を用ふるに、我国は全く之に反し文明の進むと共に益柔弱に傾きつゝあるは嘆ずべき事なり。……一般遊戲の如きも我国にては兎角、将棋の如き不活発なる事のみ行はるゝは感服せず。願はくはフートボール、テニス、ボートレースの如き体力養成に効ある遊戲を盛に

¹³⁰ *Règlement sur l'instruction de la gymnastique* (1902) を指すか。フランス軍はこの操典ではじめて遊戲・スポーツを採用した。

¹³¹ 後藤良男「軍隊体育ノ必要ヲ論ス」『偕行社記事』304号、1902年12月。

¹³² 陸軍歩兵少佐由比光衛「英国ノ兵營及将校集会所等ノ概況」『偕行社記事』290号、1902年5月。

したし、云々¹³³。

体力養成ではなく、娯楽としてスポーツを導入する試みも見られた。1911年のこと、第2旅団長田中義一少将の紹介で歩兵第3連隊を訪れた東京朝日新聞の記者は、司令部の裏手にテニスコートがあるのを見た。第3連隊は一時、兵の娯楽のためテニス用具を買いそろえたものの、「兵の娯楽としては六ヶ敷い」ので、用具はお蔵入りしてしまった。じつは田中自身、かつて第3連隊長（1907年5月-1909年1月）をつとめた際、兵営生活を家庭化すべく、娯楽場を設けるなど様々な改革を実施していた。当時はまだ民間社会でもスポーツの普及は進んでおらず、軍隊でスポーツを娯楽として取り上げることは実際問題として難しかった¹³⁴。

2. 陸軍幼年学校

そんななかで、陸軍幼年学校は数少ない例外だった¹³⁵。1891年、山内長人校長は将校学校監に対して、幼年学校に体育器械を備えつけることについての許可を求めた¹³⁶。山内が挙げたリストには「フートボール」「ロンテニス」「クリケット」「コロケー」「ベースボール」「自転車」などが含まれていた。山内は遊戯運動が体育上効果があるだけでなく、勉学の労を慰し、精神を壮ならしむという娯楽的な価値もあると指摘している。ただこの議論の前提にあるのは次のような考えであった。

当校生徒ノ儀ハ發育旺盛期ノ者ニシテ、授クル処ノ學術ハ尋常中学ト概ネ全一ナル普通学ヲ専ラトシ、軍事教育ハ其予備ヲ与フルニ止マリ、他ノ軍隊又ハ丁年以上ノ諸生徒ト異リ、身体ノ發育精神ノ養成ニ深ク注意セサルベカラサル……。

陸軍幼年学校の生徒はまだ完全な軍人とみなされていなかった。そのため当時の陸軍

¹³³『東京朝日新聞』1905年3月31日。

¹³⁴『東京朝日新聞』1911年8月5日、8月15日、田中義一伝記刊行会編『田中義一伝記』編者刊、1960年、374頁。

¹³⁵このほか1911年に清国駐屯軍で野球がおこなわれていたことが確認できる（朝日新聞社編『運動年鑑』1巻、編者刊、1916年、270-271頁）。

¹³⁶JACAR: C06081527500（5-8画像目）。1890年2月13日、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が幼年学校における現行の教育が「生徒ノ多数ニ過望ノ責ヲ負ハシムルノ嫌ナキ能ハス」との危惧から、教育の簡素化を命じたことが『偕行社記事』に紹介されている（「幼年学校生徒教育上ニ於ル独逸皇帝ノ勅令」『偕行社記事』39号、1890年6月20日）。遊戯の導入はこの記事と関係があるかもしれない。

からすれば必ずしも「男らしい」とは言えなかったスポーツに従事しても問題はなかった¹³⁷。言い換えれば、陸軍幼年学校は軍隊的な規範に縛られることが少なかったがゆえに、スポーツの導入が可能となったのである。

スポーツ導入初期の状況について、矢野^{はかる}機（1903年卒業）は次のように述べている。

体育の施設は今から考えると、貧弱で成人向けの器械体操場・障害物場の他、一般用には綱曳き用綱、フットボール、クリケット位で野球、テニス用具はなく、自転車も鉄輪のもの数台があったに過ぎない。また運動場（校庭）は雑草が混じる芝生であるが、本科と共用で今日考えるような競技は出来なかった。剣道、柔道は頗る盛んであったが、段制は設けられなかった¹³⁸。

矢野の証言によると、せっかく備えつけられた用具もどうやらあまり活用されなかったらしい。とはいえ大正初期になると、サッカー、野球、テニスがおこなわれていたことが確認できる。ある生徒の1914年5月8日の日記には次のような記述がある。

午後二時ヨリ野球（職員対生徒）僅カー点ノ差ニテ生徒ノ勝トナル。昔取ラレシ杵柄、宮川〔覚三郎〕生徒監ノ奮闘ハ目覚マシキモノナリキ、班長ノ戸山学校ニテ鍛ヘラレタル腕前ハ生徒ノ撰手ニ対シテ毫モ遜色無カリキ。

また別の生徒は1915年9月23日の日記に、野球の意義について次のように記す。

本校ニテ野球ヲ行フハ他ノ学校ノ如ク選手ヲ出シ試合ヲスルノ目的ニアラズ、凡テ体力養成ノ為ナレバ生徒一般一人モ出来ザル者無キ様ニスベシ、故ニ一週間ニ一回試合ヲ行ヒ練習スベシ¹³⁹。

宮川覚三郎（陸士17期）が陸軍幼年学校におけるスポーツ推進の中心人物であったことは、第18期（1917年卒業）の乗兼悦郎の次の文章からもわかる。

芝浦海岸の埋め立て地で行われた極東陸上競技大会の見学では、我々は初めて国際的な陸上競技を観て感嘆した。宮川生徒監は早速、競技種目の中の「九人制バレー

¹³⁷ 1896年に陸軍幼年学校条例が廃止され、陸軍中央幼年学校（東京）と陸軍地方幼年学校（東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本）が設置される。『仙台陸軍地方幼年学校一覧』（1914年）には、「戸外遊技」として「綱引、徒競走、テニス、ベースボール、フットボール、打球」が挙げられており、スポーツは地方の幼年学校でも採り入れられていたことがわかる。

¹³⁸ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』（再版、編者刊、2010年、14頁）。

¹³⁹ 東幼史編集委員会編『わが武寮：東京陸軍幼年学校史』東幼会、1982年、282頁。

ボール」を取り入れ、午後の運動時間に競技をして楽しんだものである¹⁴⁰。

これは1917年に東京で開かれた極東選手権競技大会にまつわる思い出である。1か月前に陸軍幼年学校予科2年に編入したばかりの淳宮、すなわちのちに「スポーツの宮様」として知られるようになる秩父宮もこの大会を参観していた。バレーボールはまだ日本に紹介されて数年しか経っておらず、目新しい競技であったが、極東選手権競技大会直後に陸軍戸山学校でおこなわれた陸軍幼年学校の運動会にはバレーボールやバスケットボールが採用され、秩父宮も参加した¹⁴¹。しかし、新しいスポーツはその後に継承されることなく、一時的なブームに終わったようである。

秩父宮と同じ19期の生徒は、「一切のいわゆる「スポーツ」を禁ぜられていた当時のわれわれの世界に大変革をもたらしたのは、殿下の御入校であった。「テニス」や「ベースボール」や「ピンポン」等が、この時から公然と許されるようになった」と当時の変化を語っている¹⁴²。実際にはそれまでもスポーツはおこなわれていたのであり、やや誇張の感があるが、秩父宮入学を機にスポーツがいっそう盛んになったのは間違いなからう。

1920年8月に教育制度改革が実施され、陸軍中央幼年学校予科（元の東京陸軍地方幼年学校）が東京陸軍幼年学校に改められた。当時の難題は呼吸器疾患の漸増（1918-1919年にはスペイン風邪が猛威をふるった）と、民本主義、社会主義の風潮であり、1921年前後から校長会議でその対策が検討された。保育面の対策としては、日朝点呼を廃止し、酒保を開設し、私物の下着を認め、郊外散歩の引率を廃し、和服で外出を許可し、各種スポーツを取り入れ、校内映画会を催した。志望者減少の対策として、服装を兵隊スタイルから「冬黒夏白のアウトポケット折襟型」に改め、運動会を公開した。社会風潮対策としては、1921年頃より従来切り抜きだけだった新聞を全面掲示とし、時局に関する講演を開く一方、生徒の思想的動揺を抑えるための指導をおこなっ

¹⁴⁰ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』79頁。極東選手権競技大会で採用されていたのは16人制バレーボールであった。「九人制」というのは陸軍幼年学校の独自ルールか、さもなくば乗兼の記憶ちがいであろう。

¹⁴¹ 『雍仁親王実紀』吉川弘文館、1972年、181-182頁、『わが武寮』347頁。

¹⁴² 東幼外史編集委員編『東幼外史』東幼会、1968年、63頁。

た¹⁴³。こうした一連の改革のなかでスポーツが本格的に導入された。第23期（1922年卒業）の吉田元久によれば、

満洲の独立守備歩兵大隊長から〔1920年8月に〕着任された伊藤〔真鋒〕校長は、当時の生徒の衛生状態から、保育を重視、生徒の起居を伸び伸びとさせるよう指導された。庭球コートが増え、スパイクを穿いて陸上競技を練習し、市ヶ谷台上にラケットの球打つ音が響き、円盤や砲丸が転がったのもこの時期である¹⁴⁴。

第25期（1924年卒業）はスポーツ全盛時代で、田中義男はその思い出をくわしく記している。

将校生徒の運動体育といえば、剣道、柔道、鉄棒など武張ったものにほぼ限られていた。しかし〔1920年8月に〕戸山に移ってから学校の方針は、いやしくも将校たるものは、運動競技の選手になる必要はないが、何でも一通りは心得ておくべきであるという趣旨で、従来随意運動時間だけ実施されていた野球、庭球のほか、槍投げ、円盤投げ、砲丸投げ、バスケットボールにホッケーと、各種の運動具を備え、正規の体操時間にも実施された。また制式の運動靴でなく軽快なスパイクを穿いて、短距離やハードルを競い、幅跳びや高跳び（軍隊式の正面を向いて、両足を揃え両手を前に出す堅苦しい方でなく、一般競技用のスマートな跳び方）など、走ったり跳んだり好きな運動を自由にしてレコードを競った。游泳も持久力を錬磨する観海流の平泳ぎではあったが、競技ともなれば豪快な抜き手などに代わって、当時最新流行のクロールが愛好された。これらの状況は、体育専門の戸山学校を除けば、恐らく陸軍の最先端に行くものであったろう。運動会では全校生徒によるアスレチックダンスが地元の人達にも見物された。ダンスといっても、各種競技の型を組み合わせた規律正しいマスゲームで別に驚くには当たらないが、軍の上層部にはダンスという名称だけで相当なショックを与えたいらしい。その後我々が卒業も近づいた頃、渡辺寿教育総監部本部長が初度巡視に来られて、「幼年学校の鉄棒が赤錆になっているとは剛健の精神が欠如している証拠」と、大変叱られた。大正末期のやや軍人離れたとも見られた自由なのびのびした教育

¹⁴³ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』103-104頁。

¹⁴⁴ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』108頁。

は、我々の時代が最高潮で、その後は次第に逆戻りしたようである¹⁴⁵。

次の第27期（1926年卒業）の竹下正彦の文章は、スポーツ全盛時代の終焉を感じさせるものである。

運動は随分盛んであった。正課としては柔道、剣道、体操、水泳等で、体操では鉄棒、箱跳びも盛んだった。随意課目ではテニス、野球、サッカー、ラグビーや陸上競技の槍投げ、円盤投げ、短距離、中距離競走など広く浅くだったけれども何でもやれたし、皆暗くなるまでやっていた。竹田宮〔恒徳王〕はテニス、バスケットボールなどに熱心だった。西郷従龍君は身体が小さいのに100メートルの選手で、戸山学校などで習ってきて、スパイクなど履いて本格的なスタイルで走っていた。……またシーズンになると学年対抗、室対抗、生徒舎対抗などで競技会が始終行われた。これは幼年学校生活の楽しい思い出だが、これらのスポーツが我々が後に予科、本科と進むに従って、折からの戦時教育の要請もあって柔・剣道の武技に限定されていった。〔陸軍士官学校〕予科在校中、当時本科の生徒隊長だった山岡重厚大佐が、予科の校庭でフットボールが使われているのを見て、物も言わずにそのボールを切り裂いて行ったことは一つの語り草であった¹⁴⁶。

山岡大佐の行為はスポーツに対する明白な敵意のあらわれである。竹田宮も予科のとき「テニスなんぞは軟弱だ」といって、ラケットのガットを破ってしまう物凄い上官もいた」と述べているが¹⁴⁷、この上官は山岡ではなかろうか。ともかくこの時期を境に、スポーツに関する言及はほとんど見られなくなる。スポーツは細々と続けられたかもしれないが、それは学校生活を回顧する時に思い浮かぶ主要な出来事ではなくなっていた。

3. 歩兵第39連隊

「運動連隊」と言われた姫路の歩兵第39連隊でスポーツ推進の中心となったのが市川洋造中尉（陸士24期）であった。市川がスポーツを導入しようとした1920年とい

¹⁴⁵ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』126-127頁。

¹⁴⁶ 東幼第46期生会・東幼第48期生会編『東幼外史』150頁。

¹⁴⁷ 竹田恒徳『菊と星と五輪：皇族からスポーツ大使へ』ベースボール・マガジン社、1977年、60頁。

えば、「ラケットを持つて営門を潜つてさへ過激思想と叫び注意人物視された時代」であり、「兵士にラケットを握らせバットを振り廻さしめる事を公に」するには「軍人の頭の改造」を必要とした。市川はまず相撲を奨励して運動鼓吹の意志を示し、その影に隠れて野球を奨励した。野球チームが結成されたのは1920年5月のことである。連隊長であった松井石根大佐（陸士9期）は熱心に野球を奨励し、日曜日ごとに営内グラウンドに姫路倶楽部を招いて練習に励んだ。同年8月29日、第39連隊は神戸二中と対戦し、2-3で惜敗した。10月24日には神戸へ初の遠征をおこない、ダイヤモンド倶楽部（慶応OBを中心に結成された社会人チーム）に2-7で敗れた。この日のメンバーの出身校は神戸高商4名、関西学院高等部2名、神戸商業2名、東大、京大、神戸一中が各1名で、いずれも中学校以上の学歴を持つ志願兵であった。このうちチームの大黒柱的存在だったのが神戸高商出身の中村正祐である。中村は1917年の極東選手権競技大会で砲丸投、バレーボールに参加、1921年の同大会では砲丸投に優勝している。また、キャッチャーの岡田、ライトの四本は関西学院が1917年の夏の甲子園で準優勝した際のメンバーであった。1922年3月24日の軍旗祭にはスター倶楽部（早稲田OBを中心に結成された社会人チーム）を城南練兵場に迎えた。師団司令部附の高崎喜惣少将の始球式でゲームがはじまり、第39連隊は5対12で敗れた。当日は約2万の観衆が詰めかけ、軍隊チームを応援した¹⁴⁸。連隊チームの実力はなかなかのもので、1923年には姫路中学と2度対戦し、18-6、11-0で勝っている。姫路中学はこの年の夏の甲子園兵庫県予選の決勝で甲陽中学に3-4で敗れたが、甲陽中学が全国優勝を成し遂げたことから考えて、姫路中学の実力、そしてそれを破った第39連隊の実力が知れよう。松井の後任、山本鶴一連隊長（陸士9期）はとりわけ熱心で、自ら連隊内の試合に出場するほどであった¹⁴⁹。

同じ姫路にあった騎兵第10連隊でも野球がおこなわれていた。その中心人物が賀陽

¹⁴⁸ 谷口生「軍隊野球の新記録」『野球界』12巻6号、1922年3月。

¹⁴⁹ 『東京朝日新聞』1920年10月23日、『大阪朝日新聞』1920年10月25日、市川洋造「軍隊の競技」『アスレックス』1巻2号、1922年5月、「野球部記事」『学友会誌』33号、姫路中学校、1925年7月、「運動界とところどころ」『アサヒスポーツ』3巻8号、1925年4月。山本はスポーツ界とも縁が深く、のち陸軍戸山学校長、大日本武徳会副会長、学徒体育振興会理事などをつとめた。

宮恒憲王（陸士 32 期）である。1920 年 5 月に陸軍士官学校を卒業した賀陽宮は、翌月に見習士官として同連隊に赴任した。賀陽宮は「運動、特に野球御愛好の思召から自ら隊内の士卒を以てチームを編成され、隊内に於ての試合は素より、機会のある毎に姫路中学に挑戦し、主将として、或る時は捕手の難関に、或る時は一塁手として、日暮るゝまで常に陣頭に起つて活躍され、時の御附武官西村〔辨〕少佐の御帰館を促す言葉をも斥けさせられるまでの御熱心さであつた¹⁵⁰⁾」。また姫路中学主催の姫路少年野球大会に台臨するなど、軍隊の内外で野球への熱意を披露した。賀陽宮は 1921 年 1 月に姫路を去るが、「殿下」の存在が野球に対する軍隊の寛容な態度を生み出したことは間違いなからう¹⁵¹⁾。

野球だけではない。歩兵第 39 連隊はほかにもさまざまなスポーツを実践していた。1923 年には営庭にトラックを新設し、3 月 25 日にトラック開きを兼ねて「スポーツ・デー」を実施した。短距離選手で大阪朝日新聞社運動部長の東口真平を招いてコーチをしてもらったほか、「神戸鉄道局や各中等学校の選手を招いて野球、蹴球、庭球等の試合をやり、営庭を一般に公開したので、観覧者殺到大変な賑はひであつた¹⁵²⁾」。翌年の陸軍記念日にもテニスと陸上競技の大会を開き、一般の青年団や小中学生も参加した。その趣旨は「三月十日が単に陸軍のみの記念日でなく国民の記念日である事を普及せしめるため」であり、「同連隊では今後も毎年此種の競技会を催す」予定であった。歩兵第 39 連隊ではこのほかサッカー、バスケットボール、ラグビーなどがおこなわれていた¹⁵³⁾。

市川は連隊でスポーツを組織するだけでなく、『偕行社記事』や民間のスポーツ雑誌に文章や写真を寄稿し、軍隊スポーツの実情を紹介し、その意義を力説した¹⁵⁴⁾。ここでは『アスレチックス』に掲載された「軍隊の競技」をもとに市川の主張を紹介したい。

イギリスに蹴球、アメリカに野球があるように、日本には各種の武術があり、国民

¹⁵⁰⁾「我国軍隊スポーツの黎明」。

¹⁵¹⁾ 賀陽宮は騎兵第 3 連隊時代（1926 年 -1928 年）にも、連隊の酒保に野球用具一式を寄贈し、時には野球の審判に当たるなどして、野球を推進した（騎兵第三連隊『賀陽宮殿下御在隊間の御盛徳』編者刊、1932 年、26-27、60-61 頁）。

¹⁵²⁾『アサヒスポーツ』1 巻 3 号、1923 年 4 月。

¹⁵³⁾『アサヒスポーツ』2 巻 8 号、1924 年 4 月、「我国軍隊スポーツの黎明」。

¹⁵⁴⁾ 市川洋造「時代適應策としての軍隊競技」『偕行社記事』566 号、1921 年 10 月、同「軍隊の競技」。

精神の発達に寄与してきた。しかし、これらはいずれも個人の訓練であり、孤立的で自己主義に陥りやすく、ために国民団体としての真価を発揮しえない。国民の共同能力が要求されるいまの時代、欧米の運動競技を輸入して、現代的な国民精神を磨き上げることが必要である。また、今後の国防は国民全体が担わねばならず、国民にはつねに組織的訓練と身体的発達が要求されるが、興味をもって従事できる運動競技は、その手段としてもっとも適切である。

日本で運動競技をおこない、国民精神を磨くには、国民精神＝武士道の継承者をもって任ずる軍人がまず率先して模範を示し、運動精神を武士道化しなければならない。そして、あらゆる方面で国民の先達となるべき軍隊は、体育の方面でも指導者となり、誤った方向に向いつつある日本の運動界を是正しなければならない。

スポーツが実際に軍隊にとって有用なことは、第一次世界大戦の経験によって示されている。英米軍の活躍は、平素より国民がスポーツで身体と精神を鍛錬していたからであり、戦後はフランス、ドイツでもスポーツが奨励されている。軍隊で最初におこなうスポーツとして野球は最適のものである。野球はもっとも一般的で、緻密な頭脳の働き、壮快な感覚を伴う競技であり、機敏性を備え、協同一致の精神を養成し、手榴弾投にも役立つ。

スポーツが軍隊の階級制度に抵触しないか、軍人の本分に悖りはしないかという疑問も当然おこるだろう。日本は国民皆兵主義であり、「品位を貶さざる範囲に於て高尚なる上下の和楽を求むるのは国軍成立上必要」なことである。厳しい階級制度をとるロシアとドイツの軍隊で、将校が兵卒や一般社会から隔離し、革命によって瓦解したのが反証である。将校と下士と一緒に野球や蹴球をおこなうことで上下の意思疎通、相互の融和を図ることができる。

また従来 of 軍隊生活は厳肅さを追求するあまり、愉快さに欠けていた。ために軍人は軍隊生活を嫌悪し、軍務に興味を持てなかった。スポーツにより現役軍人が軍隊生活を楽しめるようになるばかりか、予後備召集者も喜んで入営するようになる。軍の側もこれまで国民が軍務を喜んで果せるよう、研究改善に取り組み、軍隊の真相や当局者の意向を伝えようと気をつけてきた。スポーツは軍の宣伝にもっとも適当であり、かつ時勢にあった方法である、と。

歩兵第39連隊からはじまったスポーツは、第10師団全体に広がっていった。1921年には第10師団隷下の輜重兵第10大隊、野砲兵第10連隊、福知山の歩兵第20連隊で野球が採用され、第10師団チームが編成された。同年2月には師団司令部で委員を設け、軍隊で実施できる競技の種類、方法、手段の調査研究が命じられた¹⁵⁵。1921年以降、「陸軍当局に於ても野球庭球は筋肉の発達、触感の敏活、動作の軽捷ならしむるに適切であるとして全国各師団に之を認許する事となり、大阪、京都〔第16師団〕、広島〔第5師団〕、善通寺〔第11師団〕等の各師団は競つて之がチームを組織するに至」った¹⁵⁶。その結果、師団対抗戦や連隊対抗戦がおこなわれるようになった。

1921年7月24日、鳴尾球場で「我邦野球界に新記録を作るべき第四、第十兩師団の野球戦」がおこなわれた。「陸軍星章を胸に打ったユニフォームを今日晴れの戦場の物の具と鎧ふた兩軍の戦士が現はれると、お手のものゝ軍楽隊が勇ましいマーチを奏する」という具合で、観衆までもが森厳となり、「軍隊式」の情景をかもしだした。第4師団側は大阪第7旅団長天野邦太郎少将、第4師団司令部の松山良朔少将、歩兵第8連隊長山本清次が、第10師団側は歩兵第39連隊長山本鶴一が球場に駆けつけた。第10師団長宇垣一成は「都合に依り行けぬ、奮闘を祈る」との電報を打った。試合は権藤伝次中将の始球式ではじまり、森口投手の見事なピッチングで第10師団が4-1で勝利した¹⁵⁷。第2回戦は10月30日に神戸東遊園地でおこなわれ、7-6で第10師団がふたたび勝った¹⁵⁸。

第10師団のこうした取り組みは、当時の師団長宇垣一成（1921年3月-1922年5月）と深い関係がある。宇垣の軍隊観の根柢にあったのは、総力戦と「デモクラシー」であった。すなわち、今後の戦争は総力戦となるが、それには「国民と軍隊とは一体にして両分すべからず。二者は戦争目的遂行の爲一致協力」することが必要となる¹⁵⁹。またそもそも「軍隊は国民を基礎として成立す」るのであるから、「軍隊は国民の実生活と余

¹⁵⁵ 市川洋造「軍隊の競技」。

¹⁵⁶ 「我国軍隊スポーツの黎明」。

¹⁵⁷ 『大阪朝日新聞』1921年7月25日。

¹⁵⁸ 朝日新聞社編『運動年鑑』7巻、編者刊、1922年、169頁。

¹⁵⁹ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、266-267頁。

り隔絶して居ることは宜しくない¹⁶⁰」。しかし現実には、軍隊とデモクラシー化しつつあった社会の距離は広がる一方であった。大戦後、平和への希求が高まるなかで、「軍人呪詛の念は今や軍人軽侮の声となり、軍備の縮小論は今や軍備無用論と変じ、国民をして国防を軽視し軍の權威を失墜し尚武心や義勇奉公の念を消磨せしめつつある実況」となった¹⁶¹。これでは総力戦は戦えない。社会を軍隊化すると同時に、軍隊も社会化することが必要である。その鍵となるのがデモクラシーである。

宇垣によれば、ドイツ式に転換する以前の陸軍は「将校下士卒間が比較的「デモクラチック」」であったが、軍が対外向けに編制されるなかでこうした雰囲気が失われた。しかし桂内閣が倒れ、米騒動や普通選挙や労働問題などで軍隊が出兵を余儀なくされたことが示すように、現在の軍隊は対外的ばかりでなく対内的意味が増し、理や法でなく情や勢で軍を動かす必要がある。「此意義よりして将校下士卒間の関係が茲に「デモクラチック」的の傾向を聊か有するの必要」を宇垣は感じるにいたったのである¹⁶²。

将校と下士卒の関係改善のため、宇垣は将校に対しては常識を身につけ、「部下に対して理解あり同情あり且之を愛護し、統御統帥の理法に精通体得し、剛毅勇往の精神を以て必要の前には最後の一滴の血をも求むる¹⁶³」ことを要求する一方、下士卒に対してはその福利厚生に意を用いた。

軍隊内に於ける下士卒の慰安修養の施設は、一般の会社や工場の仕向けに比すれば、著しく劣りて居る。敢て彼等の機嫌を取り彼等の嗜好に迎合する必要はないけれども、此心身共に延び盛りの青年を二年近くも預り居ることなれば、此間に軍事以外に異日の役に立つ相当の修養も積めば、此歳月を愉快に送りて軍人たるの難有味を感じ得せしむるの必要もある。之れが軍隊を健全ならしめ国民の団結を鞏固ならしむる所以である。会社工場の取扱振りよりも義務兵に対するものが物質的には兎に角として精神的にも劣れりとの觀念を与ふることありてはならぬ。今日の軍隊では建物の方では相当の余裕は就て居るから、工夫を廻らせば精神的に之を遇するの道は相当に開け得ると信ずる。是非そう仕向けて行かねばなら

¹⁶⁰ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、300頁。

¹⁶¹ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、384頁。

¹⁶² 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、261頁。

¹⁶³ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、348頁。

ぬ！！¹⁶⁴

ただし宇垣は軍隊の全面的なデモクラシー化を企図していたわけではない。宇垣は「軍隊の国民化民衆化と云ふことは過度の超然主義の弊を矯むるの意義に於ては宜しいけれども、動もすれば国民に媚び民衆の意向に迎合するに至るの恐れあり。夫れは大なる間違ひである¹⁶⁵」、「近時国民の軍隊なる語が流行して軍人仲間にも之に共鳴して居るの士が多い。軍民接近の手段としては宜しいが、夫と同時に陛下の軍隊であることを忘れてはならぬ¹⁶⁶」と釘をさし、あくまで国体に抵触しないかぎりでの導入であった。

欧米の軍隊はデモクラシー的社会における軍隊のあるべき姿を示唆していた。それゆえ当時の欧米の軍隊がスポーツ熱に駆られていたことは、宇垣のスポーツ観に大きな影響を与えた。1925年に刊行された日本スポーツ協会編『最新スポーツ全書』に宇垣が寄せた序文は、彼のスポーツ観を知るうえでまたとない資料である¹⁶⁷。宇垣は「現今流行を見るに至れる競技」が有する「紳士の襟度」、すなわちスポーツマンシップに対して、「士林に志す輩の高邁なる倫理的観念に対し景仰を禁ずる能はざるものがある」と非常に高く評価している。もちろんスポーツの価値はそれだけではない。「国運の盛衰は国民精神の弛張に因し、国民精神の弛張は国民体育の健否に基」づく。いま列国は盛んに国民体育を奨励しているが、それはイギリスの「ウオーターローの戦捷は、イートン校庭に培養せられた」、アメリカの「欧洲大戦に於けるサン、ミエールの戦捷は米國フットボールの賜なり」という言葉に見えるように、軍事的な意図のもとになされている。とりわけドイツでは国民体育協会が1200万人もの会員を持ち、「病院を建てるより遙かに経済なり」と巨額の国費を体育奨励に投じている。一方、日本では「武士道漸く頹れ、国民の体質立衰へ、日將に尽きん」としており、国民体育の奨励は急務である。しかるにスポーツは目下のところ一部の青年学生に限られ、広く国民に普及していない。こうして宇垣は『最新スポーツ全書』が国民体育の奨励普及に大きな役割を果たすことを期待した。スポーツこそ「物資的に天恵に豊かならざる帝国が、

¹⁶⁴ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、465頁。

¹⁶⁵ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、428頁。

¹⁶⁶ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、442頁。

¹⁶⁷ 日本スポーツ協会編『最新スポーツ全書』文化研究会出版部、1925年。陸軍戸山学校教官の小野原誠一少佐と大井浩少佐が同書の校訂を担当している。

列強と角逐して国家永遠の興隆を期すべき最善の策」なのであった。

さらにスポーツは軍隊そのものにとっても役立つと宇垣は考えていた。

競技的遊戯は心身の爽快と其鍛錬及機敏と協同の美德の養成に効果頗る大である。

運動競技の形而下の効果は問を要せず。形而上に於ては敢為機敏堅忍持久の個人的精神練磨の外に、集団運動としての協同服従独断等の貴重なる心性の修養に価値あり。以上の諸点よりせば、適当に指導して行けば軍隊の遊技として十分に採用すべき価値を有す¹⁶⁸。

宇垣はスポーツに娯楽だけでなく鍛錬としての価値も見いだしていた。スポーツは国民、軍隊双方に有用なものであり、かつそれを通じて国民と軍隊の一体化を促進することができた。それゆえ宇垣は軍隊にふさわしい競技の調査研究を命じたのである。

ではなぜ野球だったのか。師団長時代の宇垣の念頭にあったのは間違いなく野球であり、第10師団で広く実践されていたのも野球であった。市川は野球に固有の鍛錬的価値を見いだしていたが、実際には当時野球以外の団体競技（サッカー、バスケットボールなど）はまだあまり普及しておらず、スポーツの経験に乏しい陸軍としては、野球がもっともやり易かったのだろう。

陸軍はスポーツの研究を蓄積していくにつれ、野球を重視しなくなる。それは野球という競技そのものの問題ではなく、日本の野球界の問題であったと思われる。宇垣はスポーツの「紳士の襟度」を評価し、スポーツを武士道の代替にしようと考えていた。もしそのスポーツに「紳士の襟度」が備わっていなければ、それを採用する必然性はなくなる。1925年に20年近く中断されていた早慶戦が復活したこともあり、野球の人気は高まる一方であった。しかし、その一方で、種々の良からぬ問題が生じた。たとえば第39連隊では1928年に次のような出来事があった。元慶応大学野球部の永井武雄が入営中に母危篤の偽電報を打たせ、三田稲門戦（早稲田と慶応のOB選手の対抗試合）に出場した。永井は神港商業出身で、慶応大学のエースとして活躍した選手である。この件で永井は軍法会議にかけられ、電信法違反、罰金六十円の判決が下された。東京六大学野球リーグ顧問の内海弘蔵は「今夏の都市対抗戦に東京クラブとして永井君を起用するために姫路連隊長あて懇願したが、種々せん議したが先例がない

¹⁶⁸ 宇垣一成『宇垣一成日記』1巻、364頁。

のでお気の毒だがと許可出来ないといふ非公式ではあるが丁重な断り状を寄せられた。……最近スポーツが軍隊にも入り又スポーツに関係ある幹部候補生など特別の便宜を与えられるやうになつた矢先この問題は兎に角困つたものだ。……今後はお互に慎まねばならぬと思ふ」とコメントしている¹⁶⁹。永井は1929年から1935年まで東京倶楽部の一員として都市対抗野球大会に参加、1936年に職業野球チーム、大東京軍の初代監督（公式戦前に解任）に就任するなど、退役後も活躍を続けた。日中戦争で応召され、手榴弾伍長の勇名を馳せるが、1938年4月19日に徐州で戦死、早慶野球部OBとして最初の犠牲者となった。永井は野球が軍隊に役立つことを身を以て示したのである。

4. 陸軍戸山学校

陸軍戸山学校は陸軍における体育研究の総本山で、はやくからスポーツに取り組んだ。なかでも重要な役割を果たしたのが教官の加藤真^{まさかず}一大尉（陸士18期）であった。加藤が通っていた愛知一中は、日比野寛校長のもとスポーツを盛んに奨励していた。1905年11月に陸軍士官学校を卒業した加藤は、1910年10月に陸軍戸山学校教官を命じられる。1914年9月28日、加藤は東宮御学問所御用掛に任命され、東宮、すなわちのちの昭和天皇の武課、体操の教育を担当することになった¹⁷⁰。加藤は1921年に東宮御学問所が廃止されたあとも、東宮職御用掛として皇太子の体育に関わった。その功績が認められ、1924年4月9日に勲五等瑞宝章を授与される¹⁷¹。宮内大臣牧野伸による叙勲上奏書には、叙勲の理由を、

武課及体操ノ御教課ヲ担任シ、教練、射撃、擊劍、基本体操、応用体操、各種競技、水泳等ノ御教授申上ケテ 殿下御身体ノ御鍛錬ニ努メ、御健康ノ御増進ニ致シタル功績尠カラス。……約十年間専念 殿下ノ御体育ニ関スル御用ヲ奉仕シ、内外ニ於ケル各種ノ体育的方法及施設ヲ研究シテ之ヲ実施スル等日夜努力シ、殿下現時ノ御英姿ヲ拝スルヲ得ルハ同人ノ功績亦与テ多大ナルモノアリ。

と説明している¹⁷²。加藤が皇太子に教えたのは、武課と体操に止まらず、「各種競技」

¹⁶⁹『東京朝日新聞』1928年9月21日。

¹⁷⁰JACAR: A10112985300（5-6 画像目）。

¹⁷¹『官報』1924年4月11日。

¹⁷²JACAR: A10112985300（3 画像目）。

も含まれていた。実際、皇太子は東宮御学問所でさまざまなスポーツを楽しんでいた。

軍事上の御知識も追々と御進歩あらせられ、教練や応用体操、基本体操、軍刀術、射撃等の武課をも日々缺かし給はず、殊に軍刀術を御練習の際は面や胴、小手などの御道具を御着けになり、それに畏れ多くも木綿の御袴を御穿きになつていと御熱心に御勇ましく御稽古を遊ばされる。その他乗馬、游泳、弓術、野球、ゴルフ、庭球、蹴鞠等の御運動をば時に出仕の公達や侍従達を御相手に遊ばされ、御心身の鍛練に努めさせらるゝので、尊体弥々御勇健に渡らせられ、筋骨頗る逞しく、御身長五尺四寸を超え、御体重も十五貫にも近く在らせらるゝ……¹⁷³。

加藤が東宮御学問所御用掛を命ぜられたとき、スポーツに関してどれほどの知識と経験を持っていたかはわからないが、皇太子自身はすでにスポーツに大きな関心を抱いていた。たとえば1912年5月10日の『読売新聞』は「殿下には近時野球競技が我邦学生界の一大勢力なることを認めさせられ、来る廿七日早稲田大学運動場へ行啓、親しく同大学野球部選手の競技を御覧遊ばさるゝやに洩れ承る」と伝えている。行啓は実現しなかったと思われるが、弟の淳宮は1913年2月14日にはじめて野球をしたという記録もあり、この時期に大正天皇の子どもたちがスポーツに関心を持っていたことは確かであろう¹⁷⁴。少なくとも、1920年には皇太子も加藤もスポーツに少なからぬ関心を抱き、それを実践するようになっていた。

1920年のアントワープ・オリンピックに際して、大日本体育協会は政府に資金援助を要請したが、「運動をやる者は凡て怠け者だ」という考えの中橋徳五郎文相を説得できず、寄附や借金によってこれをまかなおうとした。『時事新報』によると、こうした状況を見かねた皇室から内々に資金援助の申し出があったという。

茲に仄かに洩れ聞く処によれば、果然我国運動界に一大福音が伝へられる事となつた事は、微妙な進行と極秘な条件で運ばれて居るため其詳細を報ずる自由を得ないが、要するに此の国際的競技といひ、国民体育の向上といひ、実に重大なる

¹⁷³『東京朝日新聞』1919年5月3日。

¹⁷⁴『雍仁親王実紀』126頁。他の皇族もスポーツに興味を持ち、競技会に足を運んだ。1917年には淳宮と山階宮芳麿王が極東大会を、1918年2月には久邇宮邦久王ら6名の皇族が関東蹴球大会を観戦した。また1920年にフランスに留学した東久邇宮稔彦王(陸士20期)はアントワープ・オリンピックを観戦している。

事件なるに係らず、只だ一大臣の意地張りより政府の無関心となり、為めに禍根を永く我国に貽す事を懼れられ、畏くも皇室にては政府の方針を超越したる或る方法を以て運動向上を図らるゝ事となつたのである。之を聞いた体育協会の某理事は恐懼して語つた。「実は昨日承はつた許りで、其の内容は申上げる事は出来ぬが、要するに皇室の有難き思召に対して、私は昨夜思はず涙を流しました。吾々運動に関係する者は、皇室が政府の遣り方を超越してまで運動奨励を企図された事を忘れてはなりません。運動家は将来政府などに頓着なく、宏大な皇室の御援護の下に、愉快に無邪気に快技を楽しむ事が出来ませう¹⁷⁵。

この時点ではまだ皇室はスポーツへの支持を公然とすることができなかった。皇室がスポーツへの支持を明確にアピールしはじめるのは、1921年に皇太子がヨーロッパ歴訪から帰国して後のことである¹⁷⁶。皇太子をはじめとする皇室の支持は、軍隊でスポーツの導入推進を図る人びとにとっても大きな福音となった。

加藤は陸軍戸山学校にスポーツを導入した時の状況を次のように語る。菱刈隆少将が校長だった頃、加藤は「各種スポーツを軍隊体育に採り入れようと思い、都下大学で陸上競技の外、野球、蹴球、ラグビー、バレー等の得意な職員選手を招いて、その指導を受け盛んに練習に努めた。これは第一次世界大戦で英軍が最後の勝利を収めたのはイートン学校のラグビーのような勇壮の競技がいろいろおこなわれていた結果であると、伝えられていたからである」。課外の時間にやっていたスポーツが正規の時間にくいこむと、菱刈校長から「そんなものが軍隊錬成に役立つか」と叱りつけられることもあった。加藤があるとき大学運動部の主将や幹部を陸軍戸山学校の集会所に集めて打合せをしていたところ、新聞記者が入り込んでいて、「軍隊のスポーツ化」という記事としてスクープされた。教育総監部の永田鉄山中佐から呼び出しがあり、「これ

¹⁷⁵『時事新報』1920年6月10日。

¹⁷⁶坂上康博『権力装置としてのスポーツ』54-56頁。イギリスで陸軍士官学校を訪れた際、皇太子は同校の中隊対抗試合のために優勝カップを贈呈し、そのカップは天皇即位後に「日本天皇杯」と呼ばれるようになったという（児島襄『天皇』1巻、文藝春秋社、1974年、177頁）。これに関して、『読売新聞』1921年12月24日は、陸軍大学で半期検閲がおこなわれ、摂政宮殿下が本期の優勝中隊に贈与した銀杯が授与されたと記す。これが児玉のいう優勝カップだとすれば、このカップはスポーツの賞品ではない。また「本期の優勝中隊」とあることから贈与はイギリス訪問時ではなく、帰国後であった可能性が高い。

はお前が喋ったのか」と質問された。加藤は軍の精強を期するためであり、現在の軍隊体操は物足りなく、研究のうえ必要なものは取り入れるべきだと力説した。永田は海外経験もあり、見識も広く、スポーツにも相当通じていたので、「今後の方針を誤らないよう確っかりやれ」と激励した。加藤はこの経緯を校長に報告した。その後、校長は民間スポーツの実情を見るなどしてスポーツをよく理解するようになり、正規の時間に実施することを許可し、体操教範にも若干取り入れるに至ったという¹⁷⁷。

これはいつのことか。菱刈校長の任期は1920年2月から1923年8月、永田が教育総監部本部にいたのは1923年3月から翌年8月までだが、中佐に昇進したのは1923年8月である。とすれば、1923年8月しかありえない。しかし加藤は、この出来事の後に菱刈校長に「機会を求めて民間スポーツの事情をご覧に入れ」、やがて正規の時間での実施が許可されたと述べているから、菱刈が校長を離任した月の出来事とするのはおかしい。またここで言及される体操教範は1922年に頒布されたものと考えられるから、この出来事はそれ以前でなければならない。そもそも、1923年であれば、軍隊スポーツはそれほど珍しいものではなくなっていたはずである。

『陸軍戸山学校史』は「大正九年時の校長菱刈隆少将はスポーツの必要性を認められてスポーツの中の良い点を採り入れるよう体操科に研究を命ぜられた」と述べるが、おそらくこれが正しい¹⁷⁸。陸軍戸山学校は体操教範の改正に資すべく、1921年10月からアントワープ・オリンピック十種競技に出場した野口源三郎を招聘し、陸上競技の実際と理論について指導を受けていた¹⁷⁹。しかし、そうすると今度は永田の肩書きが問題となる。永田は1921年6月にスイス大使館附武官を命ぜられ、1923年に帰国する。渡欧以前の永田は、臨時軍事調査委員をつとめ、階級は少佐であった。臨時軍事調査委員は1915年秋に第一次世界大戦の調査研究のために設置され、永田はその中心メンバーの一人であった。永田が執筆したとされる『国家総動員に関する意見』（1920年5

¹⁷⁷ 加藤真一「ホッケーの想い出（要約）」（鶴沢尚信『陸軍戸山学校略史』著者刊、1969年所収）。永田自身、テニスやスキー、スケートなどを楽しんだ（永田鉄山刊行会編『秘録永田鉄山』芙蓉書房、1972年、320頁、森靖夫『永田鉄山：平和維持は軍人の最大責務なり』ミネルヴァ書房、2011年、55頁）。

¹⁷⁸ 鶴沢尚信『陸軍戸山学校略史』67頁。

¹⁷⁹ 『東京朝日新聞』1921年12月15日。

月)は陸軍の総力戦構想をはじめて体系的に示したものであった¹⁸⁰。そんな永田であれば、第一次世界大戦の経験を踏まえ、新しい時代に即応した軍を建設しようとして、陸軍戸山学校へスポーツの導入をはかった加藤の意図をよく理解できたに違いない。しかし陸軍戸山学校を管轄するのは教育総監部であり、臨時軍事調査委員である永田に陸軍戸山学校を指導する資格はない。

日本 YMCA の体育副主事ライアン (Winfield Scott Ryan) が YMCA 本部に提出した 1921 年 8 月末付けの年次報告によると、「軍隊のスポーツ化」は、遅くとも 1921 年の夏にははじまっていた。

一般に日本の陸海軍は極めて保守的で影響を及ぼすのが難しいと考えられている。しかしながら、陸軍は士官訓練学校(戸山学校)で体育ダンスの活用をはじめた。バスケットボールは陸海軍の学校でおこなわれており、将校たちがその指導を求めて協会〔YMCA〕にやってくる。陸軍将校は毎年われわれの仕事を見学にきて、新任将校に設備の整った体育部門を見る機会を与えている¹⁸¹。

この時点で陸海軍とも YMCA の指導を受け、バスケットボールを実施していたことは注目される。同じころ日本 YMCA は軍隊慰問部を設置し、シベリアに駐屯する兵士たちに対してバスケットボールなどの指導をおこなっていた(図1)。

陸軍戸山学校は民間のスポーツ界の影響を受けると同時に、民間のスポーツ界に対する働きかけもおこなった。なかでもホッケーは象徴的な事例といえる。1920 年前後のこと、加藤はイギリスの本でホッケーの存在を知り、ホッケーをしている大学を探したが見つからなかった。1921 年 9 月ころ、たまたま日比谷公園を通ったとき、加藤はホッケーらしい競技をしているのを目撃した。慶応のチームだということで、翌日ホッケー部主将に指導を頼み、こうして陸軍戸山学校にホッケーが導入された¹⁸²。1922

¹⁸⁰ 黒沢文貴『大戦間期の日本陸軍』みすず書房、2000 年、77 頁。

¹⁸¹ Man F. Hui [許民輝], "Training of Leaders for Physical Education," master thesis, International Young Men's Christian Association College, 1924, p. 104. ここで言及される体育ダンス(gymnastic dance)は、陸軍幼年学校で触れたアスレチックダンスと同じものである。陸軍幼年学校の生徒にダンスを教えたのは、加藤真一であった(東幼第 46 期生会・東幼第 48 期生会編『東幼外史』166 頁)。

¹⁸² 加藤真一「ホッケーの想い出」。大日本体育協会編『大日本体育協会史』下、編者刊、1937 年、1102 頁によれば、陸軍戸山学校で慶応の現役と OB の模範試合がおこなわれたのは 1922 年 1

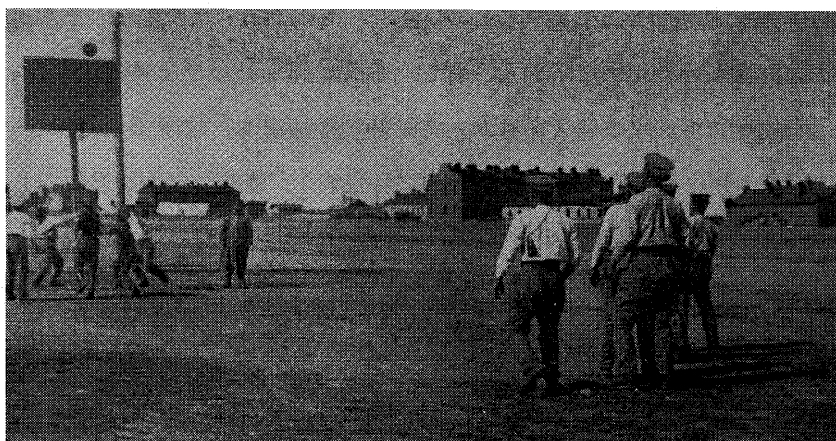


図1：日本基督教青年会同盟軍隊慰問部発行の絵葉書より。「慰問部の哈府倶楽部に於ける兵士のバスケットボール」とのキャプションが附されている。

年3月に慶応と対戦した陸軍戸山学校チームのメンバーには、岡千賀松中佐、加藤真一大尉、小野原誠一大尉、神宮司操大尉、野地嘉平大尉、遠山憲大尉、外園進中尉、峰繁曹長らがいた¹⁸³。中佐と曹長が肩を並べ合ってプレイするというのは、スポーツならではの光景であった。

1923年4月に陸軍戸山学校将校集会所で大日本ホッケー協会の創立委員会が開催され、加藤大尉が会長代理に就任した。同年11月18日に協会が正式に発足、慶応、明治、早稲田、陸軍戸山学校の選手が紅白に分れて試合をおこなった。陸軍戸山学校からは外園、峰、神宮司、遠山、加藤が出場した。同年5月、ホッケー協会は陸軍戸山学校校長白石通則少将を会長に迎えた。現役の軍人が民間のスポーツ組織のトップに就任するのはきわめて異例であった。

陸軍戸山学校は組織面だけでなく競技面でもホッケー界をリードしていた。1924年に限っていえば、陸軍戸山学校で開かれた第2回全日本ホッケー選手権に優勝し、通算17勝1敗1分という驚異的な数字を残している。さらに驚くのは5月、11月の試合の頻度で、月4回、平日にも試合をしていることである。また1923年の年末には関西遠征を試み、関西のチームを圧倒している。この遠征を新聞は次のように報じた。

軍隊体育の名家たる陸軍戸山学校ではスポーツの粋を集めて戦闘教練の資にしよ

月14日のことである。

¹⁸³ 大日本体育協会編『大日本体育協会史』下、1102頁。

うと頻に考究中であつたが、一昨年慶応から移植したホッケーも同校の正課に入れ猛烈な日課練習にメッキリ上達して、此間の選手権大会にも指導者の慶応をアツト言はせた。腕前にスツカリ自信をつけ、年末年始の休暇を利用し、二十八日の夜行で関西地方に遠征を企てることになった。……固い＼／と思つてゐた軍隊が恟うして民衆と接触して行くことはよろこばしい傾向だ。……キャプテン加藤少佐は『ホッケーが持久力を養ひ、混戦にあたつて自己の前に展開された変化多い局面を直に明敏な頭脳をもつて判断し、隣接の戦友を助け、味方を善導し、不撓不屈の努力で闘ふやうなところは現在の軍隊教育と密接な関係をもつてゐる。是非この競技を全国の軍隊に普及さしたいと思つてゐる』といつてゐる¹⁸⁴。

加藤は軍隊だけでなく、女子への普及をも企て、東京女子体操音楽学校の生徒を陸軍戸山学校に招いて指導した¹⁸⁵。こうしてホッケーは、軍民双方が影響を及ぼしあいつつ、この時期に急速に普及した。たとえば陸軍戸山学校教官野地嘉平は1924年に台湾にホッケーを伝え、ホッケーは台北高等学校、台北クラブ、台湾銀行や、台南、高雄の諸学校に広まった。また広島では、1922年ころ、慶応大学で活躍した多山栄次郎が戻ってきて、山陽中学、広島県女、海兵団、第5師団などにホッケーを紹介した。1924年頃には、広島クラブ、山陽中学、広島高工、広島陸軍幼年学校、歩兵第11連隊、広島県女などでホッケーがおこなわれていた。「大正十四年新春」付の序文を持つ『ホッケー競技法』によれば、陸軍では歩兵第14連隊（小倉）、同38連隊（伏見）、同21連隊（浜田）、同58連隊（高田）、同25連隊（札幌）、海軍では海軍機関学校や海軍砲術学校などでホッケー団体が組織されていた¹⁸⁶。

皇族もスティックを手に執った。秩父宮は1923年12月からなんとかホッケーの練習をしていた。1924年2月24日のコーチは加藤真一であった。3月10日に陸軍戸山学校でおこなわれたホッケー大会には皇太子が台覧した。財部彪海軍大臣が陸軍戸山

¹⁸⁴『東京朝日新聞』1923年12月15日。

¹⁸⁵上野徳太郎「陸軍戸山学校見聞記（上）：七十余年の軍隊体育の本山」『新体育』43巻10号、1973年10月。

¹⁸⁶塩原庫二「ホッケー競技に就て」（台湾日日新報社『台湾日日新報一萬号及創立三十週年記念講演集』台湾日日新報社、1929年所収）、広島体育協会編『広島スポーツ史』330-331頁、山本良三・榊原清一『ホッケー競技法』明誠館、1925年、119-120頁。

学校に到着したとき、皇太子はまだ試合の観戦中であった。試合後に同校で開かれた宴席には、財部のほか、奥保鞏、上原勇作の両元帥、宇垣一成陸軍大臣、山下源太郎海軍軍令部長らが同席した。3月30日には赤坂御用地広芝で皇室対陸軍戸山学校のホッケー試合がおこなわれ、皇太子がセンターフォワードをつとめ、秩父宮や賀陽宮も参加した。1929年12月27日付で陸軍戸山学校附となった元皇族の久邇邦久侯爵はもともとテニスを愛好したが、同校でさまざまなスポーツを試みた結果、ホッケーにもっとも興味を持ち、ホッケー倶楽部の一員となった。久邇は1930年5月の極東大会でオープン競技に採用されたホッケーの総裁をつとめ、同年9月には大日本ホッケー協会総裁に推戴された。また久邇は東京音楽体操学校や日本女子体育専門学校にもホッケーの指導に行った¹⁸⁷。1920年代後半に陸軍のスポーツ熱が冷めていくなかで、陸軍戸山学校のホッケーは民間スポーツ界との交流を続けた唯一の例外となった。

5. 陸軍士官学校

陸軍士官学校でも1920年が転換点となった。同年10月、秩父宮が陸軍士官学校に入学した。鈴木孝雄校長は秩父宮在学の間スポーツの時間を増やし、生徒たちは午後の自由時間にラグビー、サッカー、野球、バスケットボールなどを楽しんだ。野球は従来「欧米伝来の中途半端なスポーツで身体のバランスのとれた発育には適さないとして、推奨スポーツにはいっていなかったが、秩父宮が興味をもっているとわかると、すぐにとりいれることになり、しばしば校庭で区隊対抗の試合が行われたりもした。秩父宮はサードで四番を打った¹⁸⁸」。秩父宮自身は、当時胸部にラッセルが残り激動を禁じられていたこともあって、「あまりスポーツの方はできなかった」と回顧している。そんな秩父宮にとって陸軍士官学校時代のもっとも愉快的スポーツの思い出は卒業試験直後の野球試合であった。重圧から解放され、「真に心の晴ればれたところでカーンとバットを振ったのだから、この上もなく楽しかった」わけである¹⁸⁹。

¹⁸⁷ 渡辺金造・武島嘉三郎編『侯爵久邇邦久伝』飯田七三郎、1937年、173-174、235-238頁、『雍仁親王実紀』282、287、289頁、広堅太郎『日本ホッケー七十五年』広研印刷、1978年、44頁、『財部彪日記』1924年3月10日。

¹⁸⁸ 保阪正康『秩父宮：昭和天皇弟宮の生涯』中公文庫、2000年、155-156頁。

¹⁸⁹ 秩父宮「私とスポーツ」（秩父宮雍仁親王著、井上久・蘭田稔・松平恒忠・山口峯生編『皇族

1919年春から1921年7月まで陸軍士官学校に在籍した山崎正男は、「拳を握って節度をつけてやっていた」ドイツ式の体操が、「手のひらを開いたままで、なめらかにやる」スウェーデン式の体操に変わったこと、各種運動競技が入り込み、テニス、野球、ホッケー、砲丸投、円盤投、ハードルなどをやりはじめたこと、大運動会をやって東京名物にしようとしたことなどを、デモクラシー思想の影響として挙げている¹⁹⁰。

陸軍士官学校で野球チームができたのは、教官の内山雄二郎中尉（陸士26期）が上官に働きかけた結果である。野球部員は毎日日課が終ると、隊伍整然と水野ヶ原まで駆け足をし、規律正しい練習をした。部の費用は内山のポケットマネーでまかなわれていた。それゆえ1923年8月に内山が野砲兵第1連隊に移ると、同連隊で野球が盛んになったが、陸軍士官学校本科のほうは野球熱が下火になった。この頃同校の予科では一高投手として活躍した蘆田公平が教官をしており、野球をコーチしていた。蘆田は1930年まで陸軍士官学校で教鞭を執り、「スポーツ教官」として名を博していた¹⁹¹。

秩父宮は「スポーツを心から愛」し、自分でスポーツをすることも、スポーツを見ることが好きで、二十種くらいのスポーツに手を出した。「私がスポーツを、真に楽しいもの、愉快なものとして、あるいは山を、あるいは水を、はたまた雪や氷をもとめて出かけるようになったのは、成年を過ぎてから、大正十一年以後のことである。いろいろのスポーツをしたが、なんといっても、山のスポーツ、登山とスキーとに、まず指を屈する。次は水のスポーツ、スカルにヨット」と述べている¹⁹²。大正11年(1922)、秩父宮は7月に陸軍士官学校を卒業し、歩兵第3連隊の見習将校となった。高松宮、鹿子木貞信、横有恒らと赤倉へ最初のスキー旅行に行ったのが1922年末、そしてはじめて北アルプスに登ったのが1923年夏である。イギリス滞在中の1926年8月には宮内省の猛反対を押してマッターホルン登頂をやったのけた。さわやかなイメージでマスコミにもてはやされた秩父宮は、皇室にとっても、陸軍にとっても重要な存在であった。軍人であり、スポーツマンである秩父宮は、皇室や軍隊のイメージを高めるのに大きく寄与した。

に生まれて：秩父宮随筆集』渡辺出版、2000年所収）。

¹⁹⁰ 山崎正男編『陸軍士官学校』財団法人偕行社、1969年、40頁。

¹⁹¹ 森元泰「軍隊と野球」『野球界』14巻6号、1924年3月、『東京朝日新聞』1930年3月13日。

¹⁹² 秩父宮「私とスポーツ」。

この時期、秩父宮の御附武官をつとめていたのは本間雅晴であった。イギリスの事情に詳しく英語の上手い本間が御附武官に選ばれたのは、秩父宮が再渡英する際の随行者としての役割を果たすためでもあったが、あるいはスポーツの理解者という面も考慮に入れられていたのかもしれない。結局、秩父宮の再渡英は実現しなかったが、秩父宮と本間は「人と人との暖かい心のふれ合い」を経験し¹⁹³、2人の交流は本間が逮捕・処刑されるまで続いた。

6. 陸軍スポーツの広がり

1920年以降、スポーツは陸軍の各方面に急速に広がった。東京の連隊ではラグビーも盛んだったが、日本各地の連隊でおこなわれたのは、なんといっても野球だった。その例をいくつか挙げてみよう。

久留米の歩兵第56連隊では1923年の時点で「四五年前」に野球チームが組織されていたというから、歩兵第39連隊より早い可能性がある。ただしこれは「全部の理解によつて出来た」ものではなかった。漢口へ派遣されていた将校が現地で野球に親しみ、彼らが戻ると連隊チームも活気づいた。その後、早稲田の名投手谷口五郎を迎えると、第56連隊は常勝チームに変身した。第56連隊は地元の学校のほか、元明治大学のエース渡邊大陸率いる歩兵第24連隊や歩兵第48連隊など軍隊チームとも試合をした¹⁹⁴。

谷口にやや遅れて、早稲田の永野重次郎が弘前の歩兵第31連隊に入営した。永野によれば、同連隊では連隊長、大隊長、中隊長、その他の士官もみな運動を理解し、ユニフォームや道具を揃え、野球が盛んにおこなわれていた¹⁹⁵。永野が在営した一年間に地元の弘前高校をはじめ、東京帝大や日本歯科医専の遠征軍、青森の歩兵第5連隊などと試合をした。主将をつとめた永野は、重い銃を背負って行軍してきた兵士たちを営庭に引っ張り出してノックをしたことについて、「選手の眼には自分は恐らく悪鬼の如くに映じたに違ひありません」と自虐的に振り返り、長嶺俊之助連隊長と、連隊運

¹⁹³ 鈴木昌鑑監修、芦沢紀之編集『秩父宮雍仁親王』秩父宮を偲ぶ会、1970年、397頁。

¹⁹⁴ 谷口五郎「久留米歩兵第五六チーム」『野球界』13巻10号、1923年8月増大号、同「除隊後の経験」『野球界』15巻4号、1925年3月。渡邊には「在営一年間の土産話」（『野球界』15巻3号、1925年2月）という文章がある。

¹⁹⁵ 永野重次郎「弘前の連隊から」『野球界』15巻4号、1925年3月。

動部長羽生大尉に謝意を述べている¹⁹⁶。永野の視野には入っていないが、当時、菱刈隆中将が第8師団（弘前）の師団長であったことも、連隊長以下の野球に対する態度と関係があらう。

朝鮮羅南の歩兵第76連隊のある陸軍少尉は「軍隊に行けば好きな野球テニスが出来ない等と云ふ思想は過去思想です。野球、フットボール、テニス、槍擲、砲丸、円盤其他トラックフイールト何でも出来ます。軍隊も進みつゝありますから国民の対軍隊観も停止して居ては不合理です」と断言する。同連隊は師団長、連隊長の理解を得てチームを組織し、対外試合を重ねていた¹⁹⁷。当時の第19師団長は竹上常三郎、かつて俘虜情報局長官としてサッカー好きのドイツ人俘虜の対応に当たった経験がある¹⁹⁸。連隊長藤田鴻輔は1920年に「英国ニ於ケル一般軍事教育ノ状況ヲ調査」のため半年間欧洲に出張したことがある¹⁹⁹。また陸軍戸山学校教官で『国家及国民ノ体育指導』の著者である岡千賀松が、1922年8月に羅南の歩兵第73連隊長となり、1923年8月からは朝鮮軍参謀として朝鮮に居た²⁰⁰。さらに1924年8月24日付で朝鮮軍司令官となった鈴木莊六は、第4師団と第10師団の野球戦がおこなわれた時の、第4師団長であった。朝鮮駐在の軍当局にはスポーツに理解のある人物が少なからず居たのだ。

1925年12月に大阪の歩兵第8連隊に入営した前芝確三は、当時の兵営生活について、野間宏の『真空地帯』のそれと比べて、はるかに自由だった、のんびりしていたと証言する。連隊長は香月清司大佐（陸士14期）、フランス駐在経験もあり、「当時としては非常に開明的な軍人だった」。香月は野球やラグビーのチームをつくり、プロの宝塚運動協会やセミプロの大毎などとも対戦し、宝塚運動協会には勝利を収めた。第8連隊のエースは桐原真二、慶応野球部の主将をつとめ、遊撃手として活躍した人物である。

¹⁹⁶ 永野重次郎「在営一年間の弘前球界を回顧して」『野球界』16巻6号、1926年3月。

¹⁹⁷ 陸軍少尉 KS 生「軍隊とスポーツ特に野球とに就いて」『野球界』14巻11号、1924年8月。

¹⁹⁸ 名古屋俘虜収容所所長林田一郎中佐は、ドイツ人がフットボール、ファウストボール、テニスなどを盛んにおこなうのを目にし、「彼等ハ能ク遊ヒ能ク鍛錬スル国民」であって、彼らの体格が偉大で筋骨が逞しいのはもっともだと報告している（「俘虜より得たる教育資料」『偕行社記事』502号附録、1916年5月）。ドイツ人俘虜のスポーツ活動については山田理恵『俘虜生活とスポーツ：第一次大戦下の日本におけるドイツ俘虜の場合』不昧堂出版、1998年を参照。

¹⁹⁹ JACAR: C03011634500（6画像目）。

²⁰⁰ 『官報』1922年8月16日、1923年8月7日、岡千賀松『国家及国民ノ体育指導』陸軍戸山学校将校集会所、1922年9月。

連隊には桐原のように、中学や大学で野球をやっていた連中がいた。前芝はその理由について、「その頃徴兵検査は非常に厳密で、よほどからだのいいのでないと甲種にならない。ことにインテリ兵士は、からだのいいものばかりだった。……だから兵隊になるのにはスポーツマンが多かった」と説明する²⁰¹。先述のとおり、第8連隊が所属する第4師団では1921年以来、スポーツが盛んにおこなわれ、なかでも第8連隊では濱口英雄大尉が中心となってスポーツを推進していた²⁰²。

第8連隊の陸軍中尉 M・K 生（加茂政雄）は、1925 年 1 月 10 日入営の初年兵 60 名に対してスポーツに関するアンケートを実施した²⁰³。軍隊スポーツの推進者であった加茂は、日本におけるスポーツの「真の進歩、発達、普及の状態」を知るために、「我国男性の凡ゆる階級を網羅する」壮丁に注目した。質問は全部で 10 問、100 点満点で採点をした（表 1）。「此の容易な問題、簡単な答解」にもかかわらず、最高点は 64 点、平均点は 20.3 点しかなかった。当時、陸軍戸山学校が推進していたホッケーは「日本にそんな競技を行つて居る所があるのかと反問されそうな程」正答率が低かった。なかには「ホッケー」と「法華」とを取り違え、「ホッケーは宗教である」と回答した者

表 1：スポーツ知識テストの問題と平均点

番号	質問	平均点
1	陸上競技、水上競技（狭い意味に於ける）の主なる種目を問ふ	2.4
2	トラック競技フィールド競技の種目を挙げよ	0.9
3-1	野球チーム一組の定員を問ふ	4.5
3-2	ホッケーとはどんな競技か	0.07
4	テニスのシングルス試合、ダブル試合とは如何なものか	1.9
5	ラ式蹴球とア式蹴球の競技で最も大きな相違を記せ	0.4
6	バスケット・ボール、ヴァレー・ボール競技を簡単に説明せよ	0.7
7	スキーとスケートとの区別を簡単に述べよ	3.4
8	昨年来聘した四大選手とは何の選手か其の人名をも記せ	0.9
9	次の人々は何の選手か。熊谷一彌、織田幹雄、谷三三五、高石勝男、金栗四三、小野三千麿、森秀雄、人見絹代	3.1
10-1	スパイク・シューズとスパルタは何に使用するか	1.1
10-2	庭球とテニスとの差異	6.4

²⁰¹ 前芝確三・奈良本辰也『体験的昭和史』雄渾社、1968 年、2-6 頁。

²⁰² 「我国軍隊スポーツの黎明」『アサヒスポーツ』3 巻 8 号、1925 年 4 月。

²⁰³ 陸軍中尉 M・K 生「壮丁の試問によつて得た我国スポーツ普及の真相」『アサヒスポーツ』3 巻 4-5 号、1925 年 2-3 月。加茂は翌年にも同様の調査をおこない、成績はやや向上した（加茂政雄「壮丁の試問に依つて得た我がスポーツ普及進歩の真相（上）」『アサヒスポーツ』4 巻 12 号、1926 年 6 月）。

もいた。ラグビーとサッカーの違いはほとんど知られておらず、バスケットボールやバレーボールがいかなるものかを理解する人もほとんどいなかった。もっとも正答率の高かった問10の2でさえ、加茂は0点が20人もいたことに「何んと云ふ無関心、無趣味、ボンヤリな人間の集りであらうことよ」と嘆いている。というのも同連隊には2つのテニスコートがあり、入営してから十数日の間、彼らは毎日テニスを見ていたはずだからである。また円盤投や槍投も見ていたはずであったが、陸上競技の種目を問う問題の正答率もきわめて低かった。加茂が「失望の淵に沈んだ」のもうなずける。1923年に極東大会が開催され、スポーツに対する関心が高かったはずの大阪ですらこの状況であった。

加茂が指摘するように、メディアに溢れるスポーツ情報と、農村出身者の多い軍隊におけるスポーツの実情には大きな落差があった。一方、加茂が提示する居住地、学歴、職業別の統計は、スポーツが都市部の、学歴の高い、ホワイトカラーに浸透し、なかでも中学出身者がスポーツに対して多くの知識を持っていたことを示している。1920年に17.7万人だった中学生の数は1930年までに34.6万人にまで増加した。高等学校、師範学校、大学、専門学校の学生数も大幅に増加した。中等・高等教育の普及率はまだまだ低かったとはいえ、その実数は劇的に増えていたのである。そして彼らが軍隊スポーツの核というべき存在になったのだ。

加茂は前任地の深山重砲兵連隊で1923年12月から1年間、関西テニス界ダブルスの王者だった吉田嘉寿男の教育を担当した。吉田のパートナー小林了二も一年志願兵として同じ時期に歩兵連隊に入隊した。加茂は志願兵のなかに吉田の名を見つけたとき、光栄、誇りを感じるとともに、責任の重大を自覚した。加茂は吉田に練習の機会を与えることに苦心したがなかなかできず、精神的に援助するほかなかった²⁰⁴。1925年春、兵役を終えてわずか3か月にして、2人は日本庭球大会で優勝した。そのとき加

²⁰⁴ 1918年に大阪の連隊に入営した佐伯達夫、1930年に歩兵第41連隊に入営した浜崎真二のようにスポーツ選手が優遇された事例はほかにもいくつか確認できる。浜崎の入営は軍の宣伝にも利用された（佐伯達夫『佐伯達夫自伝』ベースボール・マガジン社、1980年、73-75頁、浜崎真二『球界彦左自伝』恒文社、1978年、127-135頁）。1931年に近衛歩兵第2連隊に入営した高石勝男は、中耳炎のため、入営時間わずか3時間で即日除隊となったが、これも軍の配慮があったと思われる（「高石君の入営」『運動界』12巻4号、1931年4月）。

茂は「兵隊さん式にぐんぐんやるのが痛快だ」「兵隊に行つてから却つて巧くなつた様にも思はれる」「軍隊でテニスばかりして居たのだらう」「鍛へられた軍人精神の賜か」といったファンの言葉を耳にした。一般に1年もしくは2年の軍隊生活は運動選手に致命的打撃を与えると考えられ、選手自身もそう信じているが、軍隊生活が選手生活の墓場となるかどうかは本人の「気の持ち様、心の置き所、精神の如何」にある。体力は衰えるはずがない。気力、精神は一段と増しているはずである。しかも軍隊精神とスポーツマン・スピリットとは内容に少しの相違もなく全然同一である。運動家は精神、体力においていっそう増進した状態で再びスポーツ界に足を踏み入れることができるのであり、吉田・小林の活躍はそれを証明する、と加茂は主張する²⁰⁵。

加茂は1925年夏に軍籍を離れたが、なお軍隊とスポーツ界の関係向上を意図して「あらたに入営したるスポーツマン諸君に」という文章を発表した。現在兵卒の娯楽、趣味の向上を図るとともに、気力、体力、向上心を養成するため、ほとんどの軍隊で野球、テニス、バスケットボールをやらせている。その指導にあたるのは青年将校だが、彼らはスポーツにじゅうぶん通じておらず、スポーツマンに大きな期待を寄せている。新入兵の名前が連隊に通知されると、中隊の初年兵係教官が連隊本部に押しかけ、選手の争奪戦を演じるほどである²⁰⁶。スポーツマンは精神面身体面ともに最上の軍人となりうる。身体の丈夫さという点では、農民や労働者によりよいものがあるが、彼らの身体は合理的に発達しておらず矯正体操が必要である。加茂は某中尉の言葉を借りて、軍隊のためにもスポーツの徹底的普及を図るべきであり、それはスポーツの全国的普及を実現する最善の方法でもあると述べる²⁰⁷。

歩兵第8連隊にはもう1人重要な人物がいた。加藤真一少佐である。加藤は1924年3月15日に歩兵第8連隊附に配置換えとなり、その1週間後にヨーロッパ出張を命じ

²⁰⁵ K中尉「軍隊生活と運動選手：吉田、小林両君の急速な復活：運動精神は最初にして最後」『アサヒスポーツ』3巻8号、1925年4月。

²⁰⁶ 「陸軍野球の大恩人」「凡そ運動をやつてゐるものでこの名を知らぬ者はあるまい」と言われた近衛歩兵第1連隊の寺内毅雄（寺内正毅首相の息子）も自分の連隊に大学出身の選手を集めていた（森元泰「軍隊と野球」『野球界』14巻6号、1924年5月、AS生「近歩一運動部より」『野球界』15巻8号、1925年6月）。寺内は1929年8月1日付で東京帝国大学の配属将校となるが、同月17日に病死した。

²⁰⁷ 加茂大尉「あらたに入営したるスポーツマン諸君に」『アサヒスポーツ』4巻1号、1926年1月。

られる。帰国がいつかは定かではないが、パリ・オリンピックが終って程遠くない時期と思われる²⁰⁸。前芝とおなじ時に入営した浦野靖生によれば、加藤少佐は「軍隊の因習的世評のイメージチェンジをする為連隊内でスポーツ大会を施行した」。それによって「一般社会より隔絶視された軍隊も、非常にモダンで進歩的だと内外共に好評」を博した。一方で浦野は、軍隊の民衆化には強い警戒がなされ、入営時にはキリスト教徒、労働組合員、農民組合家庭、社会運動家などについてチェックがなされたことを挙げ、「当時の軍隊を一言で評すれば、外部は柔にして遠慮勝で、内に皇軍本来の筋金を入れ様とした、^{マフ}矛盾した二面を包蔵して居った」と書き留めている²⁰⁹。この問題は産業都市大阪を抱える第8連隊ではとりわけ深刻であり、『歩兵第八連隊史』が米騒動で群衆から投石にあったことや、当時の軍隊が「水平社問題」と日本共産党の対軍攻勢にあってきたことに言及するものためであろう²¹⁰。

加藤は1925年5月1日付で同連隊大隊長、同年7月20日付で同連隊附となり、同年10月6日に陸軍戸山学校附となった。しかし翌年8月6日には歩兵第37連隊附として大阪に戻ってくる。この第37連隊もスポーツに熱心であった（第8連隊と第37連隊の敷地は隣接していた）。1922年に着任した連隊長、厚東篤太郎が1915年から1922年まで秩父宮の御附武官をつとめた人物であったことも関係しているかもしれない²¹¹。『アサヒスポーツ』2巻6号（1924年3月）には3枚の写真に「大阪の歩兵第三十七連隊では、鉄弾、槍、円盤、バスケット・ボール及びバレー・ボール等を備へて正規の学術科以外に毎日兵員の運動教練を行つてゐる、写真（左図）はバスケット・ボールの練習、（右上）は鉄弾投射、（右下）は槍投」というキャプションが附されている。またその次の号には、1924年3月8日に歩兵第37連隊と歩兵第8連隊の対抗バスケットボール試合の写真が掲載されている。

加茂も指摘するように、スポーツの奨励の程度は部隊によってかなりの差異があり、

²⁰⁸ 加藤は「大会より得たる感想」という文章を大阪毎日新聞社編『オリムピックみやげ』2輯、編者刊、1924年に寄せている。加藤の肩書きは「オリムピック陸軍視察員、陸軍少佐」であり、オリムピックの視察が主要な任務であったと思われる。

²⁰⁹ 浦野靖生「思い出のかずかず」（中野公策編『大阪と八連隊：大阪師団抄史』編者刊、1985年所収）。

²¹⁰ 歩兵第八連隊史編纂委員会編『歩兵第八連隊史』編者刊、1983年、162-172頁。

²¹¹ 厚東の任期は1923年8月までであった。

スポーツがまったく見られない部隊もあったであろうし、スポーツの盛んな部隊でも、実際に従事する者はほんの一部に過ぎない場合もあったであろう。しかし、一方で第37連隊のように全員にスポーツをやらせていた連隊もあったのであり、それこそ今後の軍隊のあるべき姿だと軍隊スポーツに関心を持つ人びとは考えていた。

今では、大抵の連隊には、野球チームがある。今の学生で、巧い下手はさて置いて野球に興味を持たぬ学生は一人もあるまい。軍隊へゆけば野球が出来る、好きな運動が出来ると云ふので、一般に軍隊へゆくことを好むやうになつた。之れがために今迄のやうに、軍隊へゆくことを好まぬと云ふ悪い風習はなくなつて来た。

野球技に依つて、軍隊の民衆の接触が出来たのである。喜ぶ可き現象である。

この記事は1924年の『野球界』に掲載されたものであるが、ここで描かれた光景は翌々年にはほとんど目にすることができなくなる。軍隊とスポーツ界の蜜月時代は1921年から1925年と短いものだった。

7. 『偕行社記事』のスポーツ論争

3年にわたるイギリス駐在(1918-1921)の後、陸軍大学校で教鞭を執っていた本間雅晴大尉は、1922年10月号の『偕行社記事』に「軍隊が国民の「スポーツ」を指導するの提唱」と題する小文を発表した²¹²。本間は、ヨーロッパで大戦の経験を踏まえてスポーツが奨励されていること、日本でもまたスポーツが盛んになり、軍隊でもスポーツがおこなわれていること、軍当局もそれを是認する傾向にあることを確認したうえで、「「スポーツ」は国民の体育を発達せしむるのみならず、軍隊的精神を涵養し、国民性の欠陥を補備修養し尚武心の維持を援助する頗る有意義なものである」と評価した。具体的にいえば、スポーツは協同動作(犠牲心、責任観念)、服従、持久心、名誉心、警戒心を養成することができ、個人的な日本の競技・武技を補うことができる。また、スポーツマンシップは軍人精神に近く、軍隊教育にも役に立つ。イギリスが大戦で立派な軍人振りを見せたのはスポーツによる平時の訓練の賜物であるし、フランスは大戦後に兵役短縮の解決策としてスポーツを利用し、常備兵額を制限されたドイツもス

²¹² 本間雅晴「軍隊が国民の「スポーツ」を指導するの提唱」『偕行社記事』578号、1922年10月。本間は同年8月に少佐に昇進しているから、記事を書いたのはその前のことになる。

スポーツにより国防の欠陥を補おうとしている。わが国では軍縮の問題があり、また国民の厭戦感情から兵式訓練や軍事予備教育を正面切って実施しにくい。そこで、将来の国民戦、長期戦をも見すえ、軍隊が体育本位ではない精神鍛錬を重んじるスポーツを国民に指導して行く必要がある、と本間は主張したのである。

本間の文章が発表されると、砲兵大尉榎本小右衛門がこれに激しく噛みついた²¹³。榎本はまず、農村ではスポーツの「ス」の字も、野球の「野」の字も聞かぬと述べて、スポーツが勃興しているという本間の前提を否定した。そして本間がスポーツの精神的効果を列挙したのを、薬屋の効能書のようなだとして、西洋人に利くからといって研究もせずに日本人に強いるのは危険だとする。日本には国民性に適した剣道、柔道、相撲などがあり、本間が主張するスポーツの諸効能、たとえば「真剣的の節制協同一致」は「剣道柔道の一手販売」であり、「持久心の養成」は「我剣柔道の主要科目」であって、剣道、柔道で十分養成できるとする。さらに、スポーツの勃興を時代思潮とする本間に対して、イギリスにはフットボール、ドイツには決闘、アメリカには野球という具合に、国民性を生かすことこそ世界的思潮であり、剣道柔道を捨ててスポーツを輸入するとは国家を破滅に導き国家の品格を貶める「自卑自屈奴隸的態度」である、と強い口調で攻撃した。

本間はただちに榎本の批判に反駁した²¹⁴。たしかに榎本の議論は矛盾、撞着、誤解に満ちていた。本間がとくに問題としたのは、本間が剣道柔道を全廃してスポーツに代えようとしているとの前提のもとに榎本が議論を組立てていた点である。またスポーツの勃興についての認識にも異を唱える。じつは榎本も「軍隊によりては野球の試合や庭球等をばつ／＼娛樂半分にして居る事は確だ、而して新聞紙が文明の軍隊は斯くあるべしなどと云うて油を注いで居る事も亦確だ」とスポーツの存在をある程度は認めてはいたが、例外的な現象として片付けてしまっていた。本間は各地を旅行して見聞した高等小学校以上の生徒・学生の様子、新聞の運動記事、スポーツ専門の月刊誌の誕生などの事実から、それが全国的な潮流であることを示した。さらに軍の方面でも、

²¹³ 榎本小右衛門「『本間大尉の「軍隊が国民の「スポーツ」を指導するの提唱」を駁し剣道柔道の奨励を提唱す』『偕行社記事』580号、1922年12月。

²¹⁴ 本間雅晴「『スポーツ』論に就て榎本大尉に答ふ」『偕行社記事』582号、1923年2月。

山梨半造陸軍大臣が雑誌『戦友』に「近時青年の運動競技隆盛となり体育を練りつつあるは好い傾向である」と記していること²¹⁵、『体操教範草案』附録「競技」の「球戦」とは、サッカーとラグビーを折衷したものにはかならないこと、陸軍士官学校や陸軍幼年学校では盛んにスポーツをしていることを挙げた。また、11月に開催された全日本陸上競技大会に皇太子が台覧し、体育と精神修養の手段としてスポーツを奨励したこと、皇太子をはじめ皇室がスポーツに興味を持ち、自ら実践していること、そしていささか自慢げに自身が3人の殿下と庭球をする機会を持ったことを挙げた。そのうえで「フットボール」なり「ホッケー」なりの競技法は、疎開戦法に於ける紛戦に酷似した状態を現出する、従て近代戦法に於ける兵卒の独断力を涵養するには恰好のものであるまいか」として、スポーツが第一次世界大戦で変化した戦術に対応すると主張した。ただ、本間はすべてのスポーツを肯定しているわけではなく、技術に熟練を要せず、多人数が同時におこなえるフットボール、バスケットボール、ホッケーを評価し、野球と庭球は兵卒の競技としては、どちらかといえば反対の立場であった。

本間と榎本はともに陸士19期で、離島の出身（本間は佐渡島、榎本は種子島）という共通点を持っていた。しかし本間が陸軍のエリートコースをひた走る、イギリス帰りのハイカラ青年であったのに対して、榎本の経歴はぱっとしないものだった。榎本はこの年8月に対馬要塞から下関重砲兵連隊に移り、1925年に下関中学校に配属される。1929年に故郷へ戻り、1936年から10年間、西之表町長をつとめた²¹⁶。僻地で軍隊生活の大半を過ごした榎本がスポーツの勃興を否定したのも無理はない。2人はまったく異なる世界に生き、まったく異なる世界観を抱いていた。ここでは本間の「軍国論」（1925年）と榎本の「肉弾主義の基調」（1932年）を比較することで、両者の違いを確認したい²¹⁷。本間は、「世界時代思潮の一たる平和思想」こそ、当時の軍縮、反軍備、

²¹⁵ 山梨半造は本間の義兄にあたる。山梨は1921年10月に陸軍大臣になるまで、『戦友』（在郷軍人会の機関誌）の編集部長をつとめた。ただし、本間の言うような記事を見つけることはできなかった。

²¹⁶ なお榎本は1912年に陸軍戸山学校体操科を修業しており、体育に強い関心を持っていたと思われる。

²¹⁷ 本間雅晴「軍国論」『偕行社記事』613号、1925年10月、榎本小右衛門「肉弾主義の基調」『偕行社記事』693号、1932年6月。榎本の文章は満洲事変後のものであるが、スポーツ論争での議論を踏まえると、彼の考えは満洲事変前後でほとんど変化がないと見てよい。

反陸軍の風潮の根柢にあると見る。国際的平和思想には、社会主義的国際平和思想と帝国主義の反動としての平和思想があるが、前者は大戦で大きな打撃を受けており、後者が当面の問題となっている。平和会議、国際連盟、ワシントン会議などは有名無実で、欧米列強は帝国主義的侵略を巧妙な形で続けている。資源がなく人口増加に悩まされる日本の唯一の活路は海外発展しかない。そのためにも軍備を充実させることが緊要である。軍備とは「国民の人口、体格、尚武心、軍事知識及軍事訓練の総合によつて判定せられ」るべきものである。アメリカでは護国軍の増加、軍事教育、全国動員デー、イギリスでは地方軍の拡張、少年団、運動の奨励、大学や中等学校の O、T、C (Officers Training Corps) などでその充実を図っている、と。このように本間が英米を手本としたのに対し、榎本は今日は都会主義、すなわち商工業の専制時代であるとして、商工業主義、資本主義、金銭万能主義のイギリスやアメリカも、科学的社会主義のソ連もすべて農民の敵とみなす。日本はすべからく兵農一致に帰すべきで、これこそ「我国本であり皇道であり王道である」。そんな榎本にとって歩兵こそ軍の核心であった。

〔歩兵は〕最後の場合は一切の機械及兵器を信頼する事なく、赤裸で敵陣に飛込み格闘戦を行ふが故に主兵たり得るのだ。……飛道具は卑怯で御座るが故に一切の兵器より解放せられて敵と格闘を行ふ時のみ真の歩兵であり軍の主兵だ。

榎本は砲兵科出身で、軍事技術にもおそらく無知ではなかったが、彼にとって軍人的な男性性は肉弾主義、すなわち格闘戦における歩兵によって示された。「最後の場合」にいたれば、ルールやスポーツマンシップはほとんど意味を持たない。榎本にとって、「格闘的精神の養成」こそ国軍練成の基礎であり、「突撃格闘術の教育」こそ軍隊教育の基礎であった。とはいえ、榎本にとっても、大戦で示された英米軍の優位は自明のものであった。本間はそれを他国にも適用すべき普遍的な経験ととらえたのであり、榎本はそれを英米に特殊な経験ととらえた。本間がめざしたのは近代的な男性性であり、榎本のそれは日本的な男性性であった。2人の対立は2つの男性性のせめぎ合いでもあった。スポーツ論争はたんにスポーツを採用するかどうかという技術的な問題ではなかった。だからこそ大きな反響を呼び、『偕行社記事』でもまれに見る論戦が展開されたのである。

本間に続いて、黒川邦輔少尉（陸士 32 期）が榎本に反駁した²¹⁸。黒川がとりわけ問題にしたのは、榎本がスポーツを不可とする理由は「時代思潮に乗れる」というだけのことで、スポーツの内容について立ち入った検討がなされていない点である。黒川は「時代思潮」についても榎本の詭弁を指摘し、スポーツの勃興が必然であると論じた。また、まもなく極東「オリンピック」が大阪で開かれること、昨年春に文部省主催の第一回運動体育展覧会が開かれたことなど、スポーツ勃興の実例を挙げた。

編集者の説明によればこれ以外にも多数の論説が寄稿されたとのことだが、ちょうど極東大会開催中の『偕行社記事』に掲載された北原一視少佐（陸士 17 期）の論文をもって打ち切りとなった。北原は当時歩兵第 47 連隊に居たが、1917 年から 1922 年まで陸軍士官学校の教官をしていた。この時期、陸軍士官学校でスポーツが勃興していたことは先述の通りである。北原は、スポーツを採用すべきかどうか、体操教範が競技を認めているかどうかについては決着がついたとし、別の角度から論争に参加した²¹⁹。北原によれば、軍隊でもスポーツを採用するというなら驚かないが、軍隊がスポーツを指導するという高邁な理想を掲げたことに驚いたとし、榎本もこの点に反発したのではないかと推測する。つまり榎本は本間の議論が「頗る「ハイカラ」な新しい提唱である「スポーツ」万能論である」ととらえて反発したのであり、軍隊がスポーツを採用するかどうかの問題ではなかったというわけである。

とはいえ、「ハイカラ的に何でも彼でも片仮名交りに、又は横文字交りに西洋人や西洋の物事を担ぎ廻はさんでも好いと思ふ」という榎本の態度からは、スポーツばかりか西洋そのものに対する反発を感じざるを得ない。本間はそれを見て取ったからこそ、いかなる時世でも国家が要求する国粹保存主義は排外主義と同一ではないとして、「西洋のものであるといふ唯一つの理由を以て「スポーツ」を排斥せらるるといふのでは、失礼ながら議論にはならぬ」と述べたのである。スポーツを外来物であるがゆえに排

²¹⁸ 黒川邦輔「榎本大尉の「スポーツ」に対する反駁論を読み所感を述ぶ」『偕行社記事』583 号、1923 年 3 月。黒川は 1920 年に陸軍士官学校を卒業した。ちょうど秩父宮と入れ替わりであり、在学時にスポーツは経験しなかったと思われる。黒川は当時歩兵第 46 連隊に所属し、1926 年に陸軍士官学校本科生徒隊附、1930 年に陸軍大学校を卒業、東京大学経済学部に進学、関東軍の参謀として活躍することになる。

²¹⁹ 北原一視「再三議論せられたる「スポーツ」論を読み感あり」『偕行社記事』585 号、1923 年 5 月。

斥するという榎本のような主張は、太平洋戦争がはじまるとふたたび声高に叫ばれることになる。それはさておき、北原自身は、理想は高く実行は堅実にという原則を掲げ、本間の理想は軍隊の現状からして実現は困難であり、せいぜいスポーツを取り入れるのが関の山だとみる。

国民教育が完備して立派な体格と立派な精神を持つて壮丁が入営する。軍隊は主として之に軍事教育を施せばよい。随つて「スポーツ」の如きは国民教育に於て大に盛んになり、軍隊に波及し、軍事訓練と相待つて益々其美を済すに至る。

つまり、スポーツは国民教育の領分であり、軍隊は軍事教育を主とすべきであるとの立場である。それを彼は剣術第一、スポーツ第二と簡潔に表現した。スポーツの利点は利用すべきだが、「酒は呑むべし、呑まるべからず」である。旧慣の墨守もいけないが、やみくもに理想に突き進むのも考えものである。むしろ剣術、柔道、スポーツを目下の状況に適合するように、いかに巧みに調和して実行していくかを研究すべきである。これが北原の結論であり、同時にそれは、北原の議論を取り上げ、論争を打ち切りとした編集部の結論でもあった。

じつはこの論争の間、『偕行社記事』の編集部長をつとめていたのが、教育総監部本部長宇垣一成であった。編集部幹事には菱刈隆もいた。そして陸軍戸山学校長が白石通則に代わると、こんどは白石が編集部に加わった²²⁰。先述したとおり、彼らはいずれもスポーツ推進派であり、多少の留保をつけながらもスポーツを是認する形で議論を収束させたのである。ついでに言えば、この時期の陸軍上層部にはスポーツ推進派が影響力を握っていた。陸軍大臣、同次官、教育総監、同本部長の一覧を見ていただきたい（表2）。グレーに塗っているのがスポーツと縁の深い人びとである。たとえば、教育総監をつとめた秋山は1923年3月に予備役に編入され、1924年4月に故郷松山の私立北予中学校校長に就任する。中学校長としての秋山は軍事教練には消極的であったが、スポーツは盛んに奨励し、「近時における運動競技は、ますます発達向上し、単に体育のみならず、徳育、知育をも兼ね備えるようになっている。特に、競技をもって国際的の親密を増加し、各国民の品位を代表するようになってきた」というような

²²⁰ 白石は1916年1月から11月まで、福岡俘虜収容所長としてドイツ人俘虜の状況を目にしていた。

表2：陸軍大臣、同次官、教育総監、同本部長の一覧表

	陸軍大臣	陸軍次官	教育総監	教育総監部本部長
1919	田中義一	山梨半造	一戸兵衛	菊池慎之助
1920			大谷喜久蔵	尾野実信
1921	山梨半造	尾野実信	秋山好古	児島惣次郎
1922		児島惣次郎		宇垣一成
1923		白川義則	大庭二郎	津野一輔
	田中義一	宇垣一成		
1924	宇垣一成	津野一輔		渡辺寿

講話を生徒にしていた²²¹。また津野一輔はスポーツ全盛時代の陸軍士官学校長(1921年8月-1923年10月)であった。田中については先述したが、首相在任中の1928年4月に東京六大学リーグに総理大臣杯を寄贈し、始球式にまで参加したという事実を付け加えておこう²²²。これ以外の人びとも、スポーツとの明確な繋がりを確認できないというだけで、軍隊スポーツを正面から否定したとは思えない²²³。

8. 陸軍のスポーツ観

陸軍戸山学校では1920年頃から体操教範の改正に取り組んでいた。陸軍はすでに

²²¹ 片山雅仁『秋より高き：晩年の秋山好古と周辺のとびと』アトラス出版、2008年、64-68頁。

²²² 細川隆元『田中義一』時事通信社、1958年、175-178頁にその舞台裏を記す。同書によれば、田中は意識的にスポーツを推進したというより、よくわからぬままにそれを許容したようである。

²²³ たとえば、大庭二郎は1908年8月から1912年9月まで陸軍戸山学校校長をつとめている。陸軍最初の体育留学生林保吉がヨーロッパに派遣されたのも、加藤真一や大井浩が同校教官に採用されたのも、彼の任期内のことであった。大谷喜久蔵も陸軍戸山学校校長を経験している。のち学習院院長、明治神宮官司となる一戸兵衛は、軍服で始球式をする姿が『運動界』7巻12号、1926年12月の表紙に掲載されている。陸軍幼年学校で触れた渡辺寿はあるいは例外に入るかもしれない。

1916年2月頒布の『体操教範草案』で「競技」を採用したが、それは「大反対を押し切つて」のことであった²²⁴。同草案は、陸軍が明治末年にスウェーデンに派遣した林保吉中尉と林二輔大佐の帰朝報告をもとに編纂され、当時脚光を浴びていたスウェーデン体操を取り入れた。競技は附録のなかに収められたが、競技の目的や注意点を列挙するのみで、具体的な事例は示されていない。

陸軍戸山学校は1917年に「本校ノ運動中ヨリ兵卒ニ適スルモノヲ輯録シ以テ競技実施上ノ参考タラシム」べく、『競技参考書』という小冊子を刊行し、競技の実例を示した²²⁵。同書は「簡易ナル競技」と「競技」から構成され、前者には「平均運動ニ属スルモノ」「腹ノ運動ニ属スルモノ」「行進運動ニ属スルモノ」「横腹ノ運動ニ属スルモノ」「跳躍運動ニ属スルモノ」「雑」の項目に合計36種の競技が、後者には「綱曳」「早駈競走」「駈歩競走」「中継競走」「器械及障碍物通過競走」「棒奪競争」「球入競争」「騎馬戦」が挙げられている。球入競争はその内容から見て、「球戦」の原型と思われる。

正式な『体操教範』は1918年6月に刊行された。スウェーデン体操はやや理論にすぎ、興味に欠ける点があることから、ドイツ式の長所も採り入れた。競技の項目では、『競技参考書』のなかから15種を選んで具体的なやり方を示した。

ほどなくして新教範は「軍隊教育ノ実況ニ鑑ミ、且二年在営制実施ノ将来ヲ顧慮シ、各隊ノ意見ト欧洲戦ノ経験トヲ参酌」し、再度改正されることとなった²²⁶。今回は競技スポーツの成果を積極的に採り入れることになり、1921年10月に野口源三郎が招聘されたことは先述の通りである。1922年3月に刊行された海軍砲術学校『体育参考書』は、陸軍の体操教範作成の状況について「附録タリシ競技ヲ断然教範ノ正課ニ移シ、以テ層趣味性ヲ附与シ（陸軍省ノ英断ニヨル）、競技ノ長所ヲ利用シ、軍事諸般ノ目的ニ適応セシメ、其能率ヲ増進センコトヲ図レリ（該教範ハ不日発布ノ筈ナリ）」と記す²²⁷。ところが同年6月に頒布された『体操教範草案』では、競技は依然附録として扱われている。「陸軍省ノ英断」にもかかわらず（当時の陸相は山梨半造）、競技の正式採用に対して反対があったことをうかがわせる。競技に関する変更はさほど多くはな

²²⁴ 吉田章信『体育全書』都村有為堂出版部、1930年、201頁。

²²⁵ 陸軍戸山学校編『競技参考書』陸軍戸山学校将校集会所、1917年6月。

²²⁶ JACAR: C02030958400（第5画像目）。

²²⁷ 海軍砲術学校編『体育参考書』8頁。

い。第12条に謳う「敵手ノ優勝ニ対シ之ヲ認識スルノ雅量アラシムルコト肝要ナリ」という文句は明らかにスポーツマンシップを意識したものである。「跳縄ニ依ル運動」の第140条、「駢歩」の第170条、新たに立てられた「早駢」と「投擲運動」は陸上競技の成果を取り入れたものと推察される。「重キ物体ノ投擲」として164頁に掲載される図は砲丸投そのものである。このほか、草案は「陣ノ交換」など10種の競技を例示するが、旧教範にない競技もいくつかある。その一つである「球戦」は、1チーム15人でおこなう球戯で、先述の球入競争に由来する、陸軍独自の競技である。さらに草案は、必要に応じて相撲や「打球」を選択してもよいと規定した。「打球」はホッケー、ポロが意図されていた。陸軍戸山学校は教範での採用を前提に、この時期ホッケーとポロの研究をはじめていた²²⁸。しかしながら、この時点ではスポーツの導入は部分的で限定されたものでしかなかった。陸軍はスポーツの価値についていまだ模索のなかにあった。

草案の刊行に前後して、岡千賀松『国家及国民ノ体育指導』や森伴蔵編『体育と体操の理論』（菱刈の序文によれば小野原誠一の講義をもとに編纂）など、陸軍戸山学校教官による著作が相次いで公刊された²²⁹。岡は日本の体育の欠点を克服するものとして「球ヲ以テスル協同的運動」を高く評価し、小野原も「現時各隊に於て蹴球、野球、庭球等の運動競技漸次流行し、其真価を發揮しつゝあるは吾人の賛同措かざる所なり」とスポーツを歓迎した。また、この間に『偕行社記事』でスポーツ論争が起きたことは先述のとおりである。陸軍戸山学校は1924年8月から隔月で『研究彙報』を刊行し、研究成果を定期的に公表しはじめる²³⁰。そこで扱われたスポーツには、バスケットボール、スキー、スケート、レスリング、陸上、水泳、乗馬、剣道、柔道、体操、ボクシング、相撲、銃剣術、射撃などじつに多様である。さらに、明治神宮大会、極東大会、オリンピックなど民間の競技会や、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ソ連、アメリカなど外国の軍隊スポーツも取り上げられている。このように、陸軍戸山学校はスポーツに対する幅広い関心のもとに、日本の軍隊にふさわしいスポーツを模索し

²²⁸ 内外教育資料調査会編『運動体育誌上展覧会』南光社、1922年、186、192頁。

²²⁹ 森伴蔵編『体育と体操の理論』陸軍戸山学校将校集会所、1923年11月。

²³⁰ 『研究彙報』は1927年11月より『体育と武道』と改題され、1937年まで発行された。

ていたのである。

1924年にはスポーツの導入はもはや既定路線であり、次なる問題はどのスポーツをどのようにして実践するのかということであった。『研究彙報』の創刊号に「我国軍ニハ如何ナル団体競技ヲ採用スヘキカ」と題する文章が載ったのは、まさに象徴的である。同じく象徴的なのは、同号の「教練ト競技ノ関係ニ就テ」という文章である。関東大震災の影響で一時棚上げされていた軍事教育問題がちょうどこの頃から再び動き出した。学校にどのような教練を導入するかによって、軍隊教育のあり方も変わらざるをえない。学校教練と軍隊教育、あるいは『研究彙報』3号の論文のタイトルを借りれば、「国民体育ト軍隊教育」は一体のものとして構想された。軍隊スポーツの本格的な検討はこのような文脈のもとではじまった。この時期、フランス軍の経験がしばしば参照されたのも、フランス軍がスポーツを採り入れつつも体操を主体としており、また長期志願兵制度を採用するイギリス軍やドイツ軍とちがって、フランス軍は日本の陸軍と同じく「短期徴兵制度」を採用していたからである²³¹。逆に、これまで軍隊スポーツのモデルとされてきたイギリスの経験は相対化されつつあった。たとえば陸軍戸山学校編「列強軍隊体育の趨勢」は、イギリス軍の兵卒の大多数は競技を見物するだけに終り選手養成の弊に陥っているとスポーツの負の側面を指摘している²³²。

陸軍戸山学校で軍隊スポーツ研究の中心を担っていたのが大井浩少佐（陸士19期）であった。大井は1911年に陸軍戸山学校教官になり、1年ほどの連隊勤務と3年にわたるヨーロッパ出張を除いて、一貫して陸軍戸山学校で教官をつとめるという異色の経歴の持ち主であった。大井はヨーロッパ出張以来、軍隊体育に関係する文章を積極的に公表していた（陸軍戸山学校の名で出された文章も実際には彼の手になるものが多いと考えられる）。大井は「欧米体育の状況と日本の体育」という文章で、「私の考へでは軍隊体育の任務は完全なる戦闘兵を作る為に特に気力と体力上の要求を充足するのであらうと思ひます……随て体育と申しまして軍隊のは特種体育でありまして其用途は戦争であります」と述べ、「教練は教練、体操は体操で明確に境界を設け体操

²³¹「大戦ノ経験ニ基ク仏国戦闘兵ノ体力的訓練要旨」『研究彙報』3-5号、1924年12月-1925年4月、「一九二一年仏蘭西国民体育方案」『研究彙報』4-10号、1925年4月-1926年2月、「仏国ノ体育」『研究彙報』6号、1925年6月、「仏国歩兵体育訓練ノ一斑」『研究彙報』8号、1925年10月など。

²³²陸軍戸山学校「列強軍隊体育の趨勢」『偕行社記事』609号附録、1925年6月。

は決して教練に類した運動を行ふべきでないと主張する人」は軍隊体育を消極的に解釈していると批判した。また大戦後に欧米の軍隊がスポーツを奨励していることについて、「此等競技的訓練法を軍隊に於て如何なる程度に於て実施すべきかは皆夫々国軍の状況に依りて異なるものにして、吾人は我国軍教育の実況に照し最も有効なる心身の訓練法を確立せざる可らず」と述べている。つまり、軍隊には軍隊独自の体育があるべきで、民間のスポーツをそのまま採り入れる必要はなく、また日本の軍隊には日本の軍隊独自の体育があるべきで、欧米の軍隊体育をそのまま採り入れる必要はないのである²³³。

大井の指導のもと、陸軍戸山学校教官都丸隣信^{ちかのぶ}大尉は、1925年1月に入営した近衛歩兵第1連隊第6中隊を対象に、初年兵第1期の教育実験をおこなった²³⁴。都丸は簡易籠球（センターボールとキャプテンボール）、球入れ（ハンドボール）、ドッジボール、キックボールなどを実施し、最終的に簡易籠球と球入れを軍隊用の団体競技として推奨した。今回の実験に関して近衛歩兵第1連隊長林桂大佐は、「兵卒カ入営早々スポーツマン的ノ型ニ入りテ我陸軍在来ノ規律節制アル外形ヲ整フルノ機会ヲ失フコトナキヤニ関シテハ最初ヨリ注意ヲ倍蕒セシメタルカ」とスポーツの導入が軍の規律に悪影響を及ぼすことを懸念していた。林にとってスポーツマンと軍人は相容れないものだったが、「結果ハ頗ル良好ニシテ却テ快活ナル気分ノ内ニ節度最モ正シキ兵卒ヲ得」ることができた。連隊長の懸念は中隊の初年兵掛笹井二郎少尉も共有しており、「競技に対し遊戯視せしめず。競技上を森厳ならしむること」を将来的な意見として挙げている。軍隊教育の現場では、スポーツの娯楽的価値は認められなかったのである。

大井は1925年12月に発表した「散兵の「運動」教育法私見」で、これまでの成果を踏まえ、軍隊体育教育のモデルを提示した²³⁵。附表「歩兵隊体育教育年度計画案ノ一例」では、第一期（1月10日 - 4月12日）の第6週目に「協同心ト機敏ノ動作ヲ養成スル為ニ団体競技運動ヲ始ム」と記され、センターボールとフットボールが挙げられている。さらに第8週にバスケットボールが挙げられている。都丸の実験では、第2

²³³ 大井浩「欧米体育の状況と日本の体育」『偕行社記事』602号、1924年11月。

²³⁴ 都丸隣信「教育法改善に資する為め体操の活用に拠る歩兵初年兵第一期教育方案」『偕行社記事』611号附録、1925年8月。

²³⁵ 大井浩「散兵の「運動」教育法私見」『偕行社記事』615号、1925年12月。

週からはほぼ毎週スポーツが実施されたが、大井は種目、回数とも大幅に削減した案を提示した。大井は都丸ほどスポーツに大きな価値を認めなかったのである。

1926年2月に陸軍戸山学校の名で発表された「軍隊に於て採用すべき団体競技」は、同校における軍隊スポーツ研究の最終答案といえるものである²³⁶。その冒頭の一節「団体競技の特色」には、陸軍戸山学校のスポーツ観が明瞭簡潔に示されている。

将来戦に備ふる為、軍隊体育特に戦闘兵の特別身体訓練の緊要なるは論を俟たず。就中団体競技は紛戦場裡に於て、兵卒に要求すべき有形無形上の諸特性を体得するの特色あり。即ち協同犠牲の觀念を助長し、企図心を振作し、剛健果斷の氣象を涵養すると共に、競技者をして不斷全般の戦況を觀察し、自ら機会を作り機会を求め、瞬間的判断により能動的に活動し、以て臨機応変輕捷機敏に動作せしむると同時に、堅忍持久、自己の意図の如く身体を活動し、以て絶大の精神力と至大の運動能力とを修得し、最後の一秒迄全能力を傾注するの良習を体得せしむるにあり。

このように団体競技が軍隊体育にきわめて有用であるとして、では具体的にどの競技がもっとも軍隊にふさわしいとされたのか。兵卒教育のため実施する団体競技に対して軍隊が要求するのは以下のようなことであった。

1. 一般兵卒心身の諸能力に適合し易く、而も所期の目的を達するに適し興味十分なるもの
2. 用具及設備堅牢簡易にして経費比較的少きもの
3. 技術の修得容易にして之が教育に便なるもの
4. 競技の為人員場所の伸縮性を有し、要すれば多人数同時に行ひ得るもの
5. 競技規則繁簡の取捨自由なるもの

これらの条件をクリアしたのが籠球（バスケットボール）、簡易籠球（センターボール）、投球戦（ハンドボール）であった。籠球は設備に若干の経費がかかるものの、「入り易く練習に便にして兵卒の嗜好に適」している。投球戦は技術の習得が易しく、規則も簡単で、指導しやすいことから、短時間の教育でも効果を挙げられる。対して、サッカー、

²³⁶ 陸軍戸山学校「軍隊に於て採用すべき団体競技」『偕行社記事』617号、1926年2月。同名の文章は『研究彙報』10号にも掲載されている（未見）。

ラグビー、ホッケーなどは、競技としては優良であるが、前述の条件を十分満たすことができない。そのうえ目下の入営壮丁の素質、軍の教育課程、指導にあたる下級幹部の技能に鑑みると、現時点での採用は難しい。以上の理由により、籠球と投球戦、さらにそれらを簡易にした「簡易籠球」と「小投球戦」が推奨されることになった²³⁷。

このうちバスケットボールはすでに1921年にはYMCAの指導で陸軍でもおこなわれており、『研究彙報』2号（1924年10月）にも「バスケットボール指導ノ要領」が掲載されるなど、早くから注目されていた。一方、投球戦は都丸の実験の際に「球入れ」として採用され、『研究彙報』7号（1925年8月）で「投球戦」として紹介されたものの、サッカーやホッケーに比べて陸軍での実施経験は多くない。しかもハンドボールという競技自体、1922年に大谷武一がはじめて日本に紹介したもので、学校教材に取り入れられたものの、スポーツとしては発展しなかった（日本ハンドボール協会の設立は1938年だった）。のち体操教範に採用された際、ハンドボールは「勇猛果敢ノ氣力ヲ養成スルニ適ス」と説明されたが、当時の日本では児童や女子に適したスポーツと見なされていた²³⁸。この点はバスケットボールも同じである。陸軍はなぜあまり男らしくないスポーツを選択したのだろうか。理由は二つ考えられる。一つには陸軍戸山学校の教官たちが純粋に技術的な見地から現行の陸軍体育の欠落を補うものを選択したからであり、いま一つには軍隊スポーツが主として下士官兵を対象にしていたからである（もし将校が対象に含まれたならホッケーが入ったはずである）。またドイツ軍がハンドボールを奨励していたこともいくらか考慮されたかもしれない²³⁹。

「軍隊に於て採用すべき団体競技」によって、体操教範にどのスポーツを採用するかという問題は解決した。「体操教範改正理由書」によれば、このたびの改正は「近時ニ於ケル壮丁ノ素質向上等ニ鑑ミ克ク戦闘法ノ改変ニ順応セシムル」ことを目的になされた。軍隊体操はとくに機敏と持久力を養成することが明示され、精神的訓練が強調

²³⁷ それぞれの競技に対する陸軍戸山学校の評価については、宮尾正彦「日本陸軍の団体スポーツ採用のねらいについて」が簡潔にまとめている。

²³⁸ 大谷武一、安川伊三編『チームゲームス』目黒書店、1925年、199頁。大谷が紹介したのは11人制だが、投球戦は9人制でコートも小さく、オフサイドのような複雑な規則がなかった。

²³⁹ 陸軍戸山学校「列強軍隊体育の趨勢」、都丸隣信「教育法改善に資する為め体操の活用に拠る歩兵初年兵第一期教育方案」。

された。戦場に直接必要な運動を増やす一方、効果の顕著でないものを削除した。その結果、附録にはあらたに游泳が追加され、遊技が削除されて団体競技に改められた。遊技が削除されたのは、そのために「規律的ニ厳格ナル指導ヲ要スル団隊競技ノ指導ヲ誤ルノ虞」があったからである²⁴⁰。団体競技採用の理由は以下のように記される。

戦闘方式ノ改変ト従来ノ経験ニ徴スルニ企図心、独断専行、協同連繫、敢為、犠牲等ノ諸特性並瞬間的判断ニ伴フ軽捷機敏ナル活動力ハ戦闘兵ニ必須ノ要件ナリ。而シテ団体競技ハ能ク以上ノ諸要素ヲ養成スル為有効ナル手段ナルヲ以テ新ニ之ヲ採用セリ。而シテ其種類ハ国軍ノ現況ニ適応シ最モ有効ナルモノノミヲ採択セリ²⁴¹。

この結果、団体競技として採用されたのが籠球、投球戦、球戦であった。陸軍戸山学校が推奨した籠球、投球戦に加えて、旧教範にあった球戦が採用されたことになる²⁴²。

10年近くの試行錯誤の結果、陸軍はイギリス軍のサッカーも、アメリカ軍の野球も採用せず、独自の団体競技を編み出した。陸軍が独自の競技を採用したことで、1920年代前半にみられた民間スポーツ界との交流はその後見られなくなる。陸軍はなぜこのような道を選択したのか。これは陸軍が民間スポーツ界の現状を憂慮していたことと関係する。陸軍戸山学校研究部による「学校教練と競技との関係」という文章は、スポーツは「我國民に最も缺けて居る處の団体的精神を養成」できるが、現在の日本、とくに学校におけるスポーツは「一種の観覧物」となり「体育の範圍を脱して職業屋の養成」となっていると指摘する²⁴³。これは「学校当事者の競技の指導監督が宜しく無い為であつて、競技其物の罪では決してない」。イギリスにも同様の傾向があり、それゆえイギリス軍将校必携は、スポーツが「最も厳正且周到なる指導監督」を伴わない

²⁴⁰JACAR: C01001104500 (10 画像目)。

²⁴¹JACAR: C01001137100 (22 画像目)。

²⁴²1927年8月の段階で球戦は「捕球戦」と記されている(JACAR: C01001104500 (17 画像目))。ただし、体操教範の附録に採用されたからといって、実際に陸軍の教育現場で実施されるとは限らない。この点は今後の検証に待たねばならない。1934年の陸軍幼年学校の運動会のプログラムに「投球戦」が挙げられているのが、筆者の探しえた数少ない事例の一つである(東幼史編集委員会編『わが武察』226頁)。

²⁴³陸軍戸山学校研究部「学校教練と競技との関係に就きて」(斯道学会編『運動競技と訓育』中文館書店、1926年所収)。

場合には害が多く、またその効果は体操とは異なるものであり、競技を体操に代えることはできないと喝破している。スポーツには固有の価値があるが、適切に指導監督しなければその効果は発揮されないのである、と。「指導監督」とは、言うまでもなく、軍隊の利害からなされるものである。ここに、軍隊が民間スポーツ界に干渉していく契機を見いだすことができよう。ただ1920年代の陸軍には民間スポーツ界に干渉する積極的な意図も、またそれを遂行できる力もなかった²⁴⁴。であればこそ、陸軍は野球の影響力の大きさゆえに、その採用には慎重にならざるをえなかったのだ。野球を採用すれば、それにとまって種々の悪影響が軍隊に及ぶ可能性があったからである。弊害の多い野球を拒否することで、スポーツ導入に対する陸軍内部の抵抗を抑えることも考慮されたであろう。それは消極的ではあったが、当時の陸軍がなしうる精一杯の「指導監督」であったことは間違いない。

第三章 軍隊スポーツの背景

1. デモクラシーと男性性

1922年、佐藤鋼次郎は『軍隊と社会問題』を著し、国民の軍隊化と軍隊の国民化を唱えた²⁴⁵。佐藤は陸軍士官学校を卒業し、日清、日露、第一次世界大戦に従軍、1916年に陸軍中將に昇進し予備役に編入された。その後、軍事評論家となり、『国民的戦争と国家総動員』（1918年）、『日米若し戦はば』（1920年）など軍隊の改革や総力戦の問題について旺盛な言論活動を展開していた。佐藤は次のように論じる。そもそも世界大戦で英米が成功を収めたのは、国民に体格、尚武精神、軍事知識、規律と礼儀が備わり、軍隊と一般社会が隔絶していないために、民から兵への移行がスムーズにおこなわれ、大量の動員を実施できたからである。これに対して日本には総動員を可能ならしめる要素が一つとして備わっていない。最大の問題は軍隊と社会の隔離である。兵営は欧米の直輸入で農民の生活とかけ離れており、恒常的な監視と画一主義は兵営を監獄の

²⁴⁴たとえば初期の明治神宮大会への関わり方も、民間スポーツ界が軍の積極的な関与を求めたのに対して、軍は消極的な態度に終始した。それが民間スポーツ界を「指導監督」するまたとなない機会であったにもかかわらず、である。この点は別の機会に論じたい。

²⁴⁵佐藤鋼次郎『軍隊と社会問題』成武堂、1923年。

ごとくにしている。国民は軍隊を理解しようとせず、軍事知識は欠乏し、国防にも無関心である。一方、将校は社会に浸透しつつあったデモクラシーに無理解で、民間人を「地方人」と呼んで軽蔑し、社会が堕落していると感じている。そうした将校が兵卒に強圧的な命令をしても、兵卒は面従腹背し、表面的には軍紀が守られているように見えるが、実際には将兵間の溝は深まるばかりである。軍隊が国民を軍隊化させるのは難しいが、まず軍隊を社会化して国民と軍隊を接近させねばならない、と。

佐藤の言葉を借りれば「目下の急務は軍隊にデモクラシーを徹底させ、上下の精神的結束を鞏固にし、上を敬い下を恵む、一致の和偕をうべき」ことにある。そうして監獄のような軍隊を「自治的生活を営む有機体的の軍隊」とすることで、国民の軍隊に対する理解が得られる。このように論じる佐藤が古来の「武張った遊戯」や「欧米人の如く勇壮なる各種のスポーツ」を奨励すべきであると主張しているのは、象徴的である。佐藤はこれまで紹介してきたようなスポーツを推進する立場の人物ではない。その佐藤が当時の軍隊が直面した問題の解決策の一つとしてスポーツを想起したという事実は、スポーツの導入が軍隊体育の問題にとどまるものではないことを明瞭に示している。

そもそも当時の人びとはどのような軍隊を望んでいたのか。次に挙げるのは、第一艦隊の戦艦日向を見学した長崎女子師範学校の生徒の感想である²⁴⁶。

水兵さんを羨む一方、私の目に強く映じた事は、^{きう}仕して艦内に種々士官と兵卒との差別が甚しい事だらう……同じ船に乗つて運命を共にすべきブラザー同志がなぜにこう迄差別的取扱が有るのかとひそかに悲しみました。水兵さんがあのむさ苦しい所にハンモックを釣つて生活をなさるのに就いては同情の念を寄せると共に、士官の方にどうぞ今少し彼人々に同じ大した差別のない所迄待遇してあげて下さい……とは私の願ひたい心の中の叫びです……真の軍人生活の意義はそこに正しい区別があつて初めて合理的なのかも知れません？然し私の考へでは船底には同じ等しい運命の手が平等に与へられてゐるのに……^{▽▽}平等の神の恵の下に生きてゐるのに私は変りはないものと思ひました。(H子)

軍規風規のやかましいので上官の命令は絶体的……^{▽▽}羊の様に柔順にそして正しく凡

²⁴⁶『東洋日の出新聞』1924年6月23日。

てを命令一下に働いてゐる水兵さんを顔を真赤にしてがみ／＼しかりつけてゐる方を見た時、可愛想で／＼見てゐる事が出来ませんでした。其場面が未だに目に残り今でも忘れられぬ様で海軍と言ふものは、おそろしいそしてこはいと感じました、が斯の如くにきたはれてこそ初めて一人前の軍人になるのだと思ひました。(T子)

厳格な規律が支配する専制的な組織、これこそ当時の人びとの軍隊に対する典型的イメージであつた。それに対して、当時の人びとが理想としたのは、よりデモクラティクな、当時の言葉を使えば、より「民衆化」した関係によって成り立つ軍隊であつた。『東洋日の出新聞』は女子学生の筆を通してその理想を提示し、軍当局の認識を改めさせようとしたのである(戦時下であればこのような文章を載せることはできなかっただろう)。

1920年8月、『神戸又新日報』は新たに舞鶴鎮守府司令長官に就任した佐藤鉄太郎中将を「快闊で平民的な新任佐藤司令長官」と紹介した²⁴⁷。「民衆化」した軍隊は「平民的」な将校・士官によって統率されねばならない。それは軍神として祀られた乃木希典や東郷平八郎が体现する男性性とは大いに異なるものであつた²⁴⁸。デモクラシーは民衆にとって望ましい軍隊、あるいは将校のイメージを大きく変えたのである。

同様のことは将校と兵士の間だけでなく、軍隊と社会の間にも当てはまる。1919年8月19日夜、島根県那賀郡浜田町で起きた米騒動の際、抜刀乗馬の将校が率いる着剣した一個中隊を前に、群衆のひとりが次のように言った。「お前ら親兄弟が食えんでこうしているのに、発砲したり銃剣で突きさしたりするつもりか。軍隊は親兄弟を撃つものでなく、外敵を撃つものではないのか。われわれは敵ではなく親兄弟だ。われわれに発砲したり突きさしたりしてはいかんぞ」。この言葉を聞いて、軍隊には動揺と躊躇の色が見られたという²⁴⁹。この言葉に軍隊に対する民衆の敵意を見ることは容易である。しかしここでは男性性という視点から解釈を試みたい。軍隊とは、まずもって、頼りがいのある、自分を守ってくれる存在でなければならない。それこそが軍隊に求められた男らしさである。いくら強くても、敵の軍隊は男らしさを象徴しえない。そ

²⁴⁷『神戸又新日報』1920年8月27日。

²⁴⁸乃木は学習院院長時代(1907年-1912年)、野球部の活動に厳しい制限を加えていた。「野球と其害毒」にも乃木の談話が登場する(『東京朝日新聞』1911年9月15日)。

²⁴⁹黒羽清隆『軍隊の語る日本の近代』下、そして、1982年、165頁。

う考えるならば、この民衆の言葉は軍隊の男性性を否定したものと見ることができる。大正末期に軍隊の人气がなくなったということは、軍隊が男性性を体現しえなくなったということである。とするならば、「民衆化」を図ることで軍隊は新しい時代の男性性を体現できる存在へ自らを変えようとしたのだと解釈されよう。

そしてスポーツこそ、軍隊が新しい時代の男性性に適応したことをアピールする格好の手段だった。海軍兵学校編『運動競技提要』は、対外的な対抗競技を「軍隊ト社会トノ交通テアリ、軍隊ノ廊壁ヲ去リ、国民ヲシテ自己ノ軍隊タル信倚ヲ与フル一因トナリ、又軍隊式ナ或雰囲気ヲ社会ニ向ツテ拡充スル一端トモナル」と評価する²⁵⁰。国民が自分の軍隊であると感じる、それこそまさに軍隊に求められた男性性である。

では、個々の軍人にはどのような男性性が期待されたのか。「我国軍隊運動の濫觴を作り出した運動連隊」である歩兵第39連隊を訪れた記者は、「清掃された立派なトラック」、春日を浴びる「南北二基のフット・ボール」、テニスコートや野球のダイヤモンドの跡を見て、「因習の殻を固く被つて鉄扉を鎖し、一般社会との乖離を教へられて居た昔の倂は露ほどの跡も見せない、衛兵の顔を見るにも物優しげな微笑が浮んで居る」と述べている²⁵¹。威厳のある軍人ではなく、「物優しげな微笑」をたたえた軍人こそ、新しい男性性を体現する存在であった。そしてそれはスポーツによって養成されるのである。

おりしも大正期はエリート的な「運動競技」が大衆的国民的な「スポーツ」に移行する過程にあった。1924年の明治神宮競技大会創設は大衆化、国民化の一つの到達点であった。スポーツ選手が国際的に活躍しはじめるのもこの頃からである。1920年アントワープ・オリンピックのテニスで、熊谷一彌がシングルスで、熊谷と柏尾誠一郎がダブルスで、それぞれ銀メダルを獲得した。1924年パリ・オリンピックでは内藤克俊がレスリングで銅メダル、1928年アムステルダム・オリンピックでは陸上の織田幹雄と水泳の鶴田義行が日本にはじめての金メダルをもたらした。日本で開かれた1917年と1923年の極東大会で日本は優勝し、1927年には上海で開かれた極東大会に優勝した。国際競技会での彼らの活躍は、平和の時代にあつて日本の国力を示す数少ない

²⁵⁰ 海軍兵学校編『運動競技提要』52-53頁。

²⁵¹ 「我国軍隊スポーツの黎明」。

機会となった。そしてこれらの大会でスポーツ選手は日本の代表として戦った。1927年度の横須賀海兵団の修業記念アルバムにはテニスについて次のような記述が見える²⁵²。

今日最国際的な遊戯の一つは庭球である。また老若男女の区別なく参加出来るので是程一般的なもの他にあるまい。我が国に本場の英国から庭球の輸入されたのは明治十一年頃であつたといふ。爾来我が国上下一般に普及せられて今日此の技に於てだけは堂々世界の檣舞台で我が選手が世界の大選手を向ふに廻して覇を争ひ得る迄に進歩して居る。此の技で養ひ得るものは敏捷軽快(運動神経の培養)、推測力、決断力、味方の協同動作等、体技本来の目的以外に沢山あるであらう。軟弱と見なされることの多いテニスだが、国際的な活躍は日本人に誇りをもたらし、男らしい、そして軍隊にふさわしいスポーツとなりえたのである。

佐藤がスポーツを取り上げたのは、身体面で軍民間を接続するためであった。そして精神面については、デモクラシーを徹底させることで軍民間の溝を埋めることができると論じた。将校の社会化の最大の障壁がデモクラシーだった。軍がデモクラシーに着目するようになったのは1919年5月頃からである。『偕行社記事』で将校のデモクラシーに対する無理解を指摘したのは、ほかならぬ佐藤鋼次郎であった。すでにその前月末の師団長会議で田中義一陸相は将校の常識増進の必要性和対上官反抗の頻発に注意を向け、同じ席で一戸兵衛教育總監は「不良思想」を持つ壮丁の軍隊入営が不可避であることを指摘していた²⁵³。そして6月以降、『偕行社記事』は、諸種の政治・社会思想を将校に理解させ、理論的・科学的な国体論と軍紀論を将校に提示するための記事を掲載しはじめた。同年7月号には臨時軍事調査委員による「現代思潮一部(デモクラシー)の研究」が附録として刊行された²⁵⁴。ここで興味深いのは本間雅晴が思想と軍紀の問題を論じ、軍隊内務の緩和・簡略化と兵営生活における私的自由の領域の拡大を訴えていることである²⁵⁵。本間にとって思想・軍紀とスポーツは一連の問題であった。

²⁵² 『昭和二年度志願兵四等機関兵教程・三等機関兵特別教育修業記念』横須賀海兵団、1927年。

²⁵³ 遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』青木書店、1994年、241頁。

²⁵⁴ 浅野和生『大正デモクラシーと陸軍』関東学園大学、1994年、16-17頁。

²⁵⁵ 本間雅晴「思想の変遷に鑑みて軍紀と服従とを論ず」『偕行社記事』550号、1920年6月。

軍隊内務書改正が日程に上ったのは1919年4月のことで、陸軍省軍務局歩兵課が軍隊内務書改正審査委員編成表を提出したことにはじまる²⁵⁶。翌月、同課は「軍隊内務書改正審査委員長ニ与フル訓令案」を起案し、今回の改正の方向性を示した。訓令案は第一次世界大戦後の社会状況と国民思潮の変遷に対する軍隊内務の適応をととして、国民に軍隊を理解させ、進んで兵役に服させて、軍民一致の実績を挙げることを求めている。同年8月に完成した「改正草案」では、軍隊内務の諸規定が大幅に簡略化され、自覚的な軍隊内務の遂行と服従、人格の尊重が強調されていた。『軍隊内務書草案』は1920年9月に完成し、「従来の全国画一主義を廃して各地方特殊の民俗人情に応じてこれを適用する事自由ならしむる点」「兵卒の人格を認めた点」で従来と大きく異なっていた²⁵⁷。同草案は同月19日の各兵科団隊長及参謀長合同会議で内示され、意見が徴集された。この会議の席で田中義一陸相は思想対策の強化を強調した。その結果、精神教育の内容として「国体」が追記されることになった。かくして1921年3月に新しい軍隊内務書が公示された。思想対策の強化と引き替えにもたらされた形式的な「自由」のうえに、軍隊スポーツが花開いたのである。

スポーツの思想善導的な役割は、海軍機関学校の次の事例に顕著にあらわれている。海軍機関学校の三号生だった額久直は上級生からよく「貴様達は新聞なんか読むんぢやない！運動をやるんだ！！」と言われた。彼はそれを忠実に守り、運動に熱中した²⁵⁸。原田力（海機37期）が語るように、当時海軍機関学校の新聞閲覧室に備えられていた新聞雑誌には「革新的な記事が満載」で、「海軍士官の象徴であつた腰の短剣も鉛筆削りにもならないから、近く廃止される運命にあると皮肉つた記事が堂々と」掲載されるほどであった²⁵⁹。スポーツはこうした表向きの「社会化」を掘り崩す機能を果たしたのだ。とはいえ、思想善導的側面をあまり強調しすぎると、かえって実態から遠ざかってしまう。なぜなら思想善導の手段などいくらでもあるからである。当時の軍隊がこのようなリスクをあえて冒したのは、やはり現状に対して切迫した危機感を持っている

²⁵⁶ 以下、軍隊内務書改正については注記のない限り遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』246-266頁に拠る。

²⁵⁷ 『東京朝日新聞』1920年9月20日。

²⁵⁸ 額久直「懐旧断片」。

²⁵⁹ 原田力「連ぎょうの花に向いて」。

たからである。軍隊へのスポーツ導入とは、一義的には、男性性喪失の危機感を抱いた軍隊が、新たな時代の男性性を体現しつつあったスポーツを取り入れ、男性性の回復を企図する行為であったと見なすべきである。

同様の危機感は皇族も抱いていた。第一次世界大戦後、世界では君主制が次々と崩壊していった。社会主義思想の拡大は、天皇の権威、すなわち天皇の男らしさを掘り崩していった。カリスマ性を発揮した明治天皇とちがって、病弱だった大正天皇はその存在感を示すことができなかった。言い換えれば、天皇制は男らしさを欠いていた。そうしたなかで大正天皇の息子たちはスポーツマンであることをアピールしていった。彼らは明治天皇とは対照的に、平民的な言動により国民の心をつかんでいった²⁶⁰。彼らはまた軍人でもあった。おりしも1920年代は多くの皇族が陸軍士官学校や海軍兵学校に在籍していた。陸軍士官学校について言えば、1920年の賀陽宮恒憲王の卒業は、1908年の東久邇宮稔彦王以来、皇族として久々の出来事であったが、1921年には山階芳麿（1920年に臣籍降下）、1922年に秩父宮、1923年に久邇宮邦久王、1924年に閑院宮春仁王と続々と皇族出身の将校が巣立っていった。彼らの存在が陸軍の雰囲気を変えたことはすでに見てきた通りである。こうして、1920年代前半の特殊な状況のなかで、軍隊とスポーツと天皇制は男性性を介して結びついたのである²⁶¹。

2. 反スポーツの底流

1920年代の軍隊にとって、スポーツの経験はどこまで普遍的なものだったのか。この問いに明確に答えることができないが、陸軍の場合なんらかの形でスポーツを経験した兵士は、最大に見積もっても1割に達しなかったのではないだろうか。学校や海兵団で組織的にスポーツを実践していた海軍と違い、陸軍の場合、スポーツをするかしないかは上官の嗜好に左右された。そして陸軍の内部にはスポーツを否定する人た

²⁶⁰ 坂上康博『スポーツと政治』6-28頁。

²⁶¹ 竹田恒徳、すなわち竹田宮恒徳王は自伝のタイトルを「菊と星と五輪：皇族からスポーツ大使へ」とした。菊は皇室、星は陸軍、五輪はスポーツの象徴である。すでに気づかれたことと思うが、本稿のタイトルはここに由来する。ただ若干の違いがある。竹田のタイトルは戦前の皇族＝軍人（菊と星）から戦後のスポーツ大使（五輪）への変化を意味するが、本稿では菊と星と五輪が分ちがたく結びついていたことを示した。また本稿では星に海軍も含めている。

ちが少なからずいた。

フランスに駐在中パリ・オリンピックを見学した儀峨徹二少佐（陸士19期）は、帰国後、とある中学校で「オリンピック大会といふ奴……は、其の競技種目のどれを見ても、みんな毛唐人本位の、毛唐人中心の競技であつて、あんなもの……のために遙々日本から選手を送つて競争させるなど、いふことは、全く意味のない話で、日本はあんなものに参加しない方がよいと思ふ」と語った。その場にいた競技部長の顔は苦り切り、柔道と剣道の先生がニヤニヤしていたという²⁶²。

軍縮のあおりで陸軍を去り、日本体育会体操学校講師をしていた小原正忠は体育と運動を峻別し、「今日一大流行となつて居る運動競技なるものが、青年子女の心身を如何に害毒しつゝあるかは、心ある者の常に患へて居る所である、私は此の如き迷盲を一日も早く覚醒せしめて、真の国民体育を振興させたいものである」と述べ、運動の普及が体育の普及につながるわけではないと主張した。小原はその証拠として、1924年度に東京市とその近郊で徴兵調査をおこなった麻布連隊司令官の、「都下の運動選手に合格者は甚だ少かつたと云ふ。概して運動選手は一見した所は体格優秀に見えるが、仔細に点検すると内部の疾患や、其の他に故障が有る者が比較的多く、而して中には本人が全く知らないものもあつた」という発言を挙げる。当然のことではあるが、陸軍の軍人にとって、体育の目的とは兵士にふさわしい身体をつくることであり、スポーツはそれをなしえないがゆえに否定されたのである。ただし小原は儀峨とちがって感情的にスポーツを否定したわけではない。ヨーロッパの事例を挙げつつ、「運動を奨励し体育の向上を図る」ためには「先づ全国の体育を統一指導する機関と、教員養成所の設置、改善等」が必要だと述べる。現在のスポーツは「高尚なる紳士道」から外れており、これをうまく指導することで「国民体育」を発展させることができるのである²⁶³。

紳士道＝スポーツマンシップはスポーツ擁護派がスポーツを正当化する際の重要な論拠であった。紳士道は日本の武士道に等しく、軍人である以上、かならず備えてお

²⁶² 法本義弘「儀峨さんの快気焰」『新武道』3巻1号、1943年1月。

²⁶³ 小原正忠『新体育家の思潮』東京宝文館、1925年、86-98頁。同書には陸軍戸山学校校長等々力森蔵が序文を寄せている。

くべきものであった。たとえ現実のスポーツ界に問題があったとしても、それは紳士道が欠如しているからであり、スポーツの本来の姿ではないと言うことができた。しかしスポーツ反対派は、紳士道そのものを問題にした。

イギリスから帰国してしばらく経って、本間雅晴は上原勇作元帥に呼び出された。上原は「三年間の駐在で、英国の最も良い点と感じたところ、最も悪い点と感じたところは、何だった」と尋ねた。本間は「良い点は、紳士道といひましようか、実に礼儀の正しいことです。悪いところと申せば、保守主義で、他国のことを学ぼうとしないことです」と答えた。上原は「君は三年もおって、まるで逆に見ている。英国の紳士道という礼儀は、国内だけの話、国際間のことになると完全に非紳士的だ。……又英国の悪いところは保守的だという。英国はそとに対しては、あのよう、おおっぴらに不作法な利己主義を振舞いながら、国内では全英人の団結保持のため、おおいに国粋と民族の優越性を説いてやまない。この保守こそ大英帝国を堅持している、唯一のつよみといえる。……君はもう一ぺん、英国の歴史や、英民族の性格を研究しなおさなけりゃいかん」と本間を責めたという²⁶⁴。

上原といえば、長州閥の田中義一、そしてその後継者である宇垣一成と対立し、のちの皇道派につながる人物である。この両派の対立点は多岐にわたるが、戦略観もまたその一つである。上原や福田雅太郎らは即決戦という戦略のもとに常備軍の拡大と精神主義を求めたのに対して、田中や宇垣は長期戦の展望のもとに、資源の確保、工業力の発展、予備兵力の充実を図った。この陸軍の二大派閥の抗争が、陸軍におけるスポーツの発展に影を落としたのである。

皇道派の中心人物であった真崎甚三郎は二・二六事件の「聴取書」で、大正末期の陸軍士官学校の様子を「当時予科生徒ノ中ニハ化粧道具ヤ『スター』ノ写真ナヲ持ツト謂フ状態デアリ、休養室ノ者カ脱柵シテ『カフェー』ニ行クト云フ状態デアリマシテ、或ル時ハ一度ニ四名ノ者カ脱柵シテ退校処分ニシタ事カアリマス」と振り返っている²⁶⁵。当時の軍人は男らしくなかった、と真崎は言いたいのである。真崎は1923

²⁶⁴ この逸話を書き残した今村均は本間と同時期にイギリス駐在武官をつとめ、本間の一週間前に上原に呼び出されて絞られていた。二人の結論は上原は「えらいおやじだ」というものであった（今村均『私記・一軍人六十年の哀歓』芙蓉書房、1970年、121-123頁）。

²⁶⁵ 原秀男・澤地久枝・匂坂哲郎編『検察秘録：二・二六事件』Ⅳ、角川書店、1991年、44頁。

年に陸軍士官学校本科長となり、1926年に陸軍士官学校校長、そして翌年に第8師団長に転じるまで約4年間(途中に半年の欧米出張があった)を陸軍士官学校で過ごした。この4年間はまさにスポーツ全盛時代であり、真崎は苦々しい思いをしつつも、沈黙を余儀なくされたのである。

二・二六事件の前年に相沢三郎中佐が永田鉄山を殺害するという事件が起きた。相沢は1920年から1925年まで陸軍戸山学校で剣術の教官をつとめた。これまたスポーツの全盛時代である。その相沢が永田を殺害する直前に訪れたのが、陸軍省整備局長の山岡重厚中将であった。陸軍士官学校教官だった山岡がサッカーボールを切り裂いたことはすでに述べた。また永田がスポーツを支持していたこともすでに記した。したがって、相沢事件とは、陸軍内部で武道がスポーツを圧倒する過程の一コマだったと読み替えることもできよう。

皇道派の領袖ともいべき荒木貞夫は1938年に第一次近衛内閣の文部大臣に就任すると、武道の奨励と学生野球の統制を進めることになる。東京のイギリス大使館が本国に送った記録によると、荒木はスポーツについて次のような考えを持っていた。

荒木文部大臣は、世界中で共有されているところのスポーツマンシップの精神は、日本においては適していないとし、国策により合致した「新しいスポーツマンシップ」の確立を企てています。ヨーロッパやアメリカからの「借り物の精神」は取り除かねばならず、スポーツマンシップは武士道(武士のしきたり)と一致しなければならない。文相は、日本の伝統的な競技を偏愛し、多くのヨーロッパ産のスポーツが消え去るのを望んでいます……²⁶⁶。

やや先走ってしまったが、1920年代の陸軍におけるスポーツの消長が、のちに皇道派と統制派の対立へと収斂していく陸軍内部の力学のなかで展開したことが理解できよう。

おわりに

最後に、男性性の視点から本稿の議論を整理しておこう。

²⁶⁶「イギリス公文書館所蔵史料(FO371/22189/22248)」(坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001年、171-172頁所引)。

イギリスの影響を強く受けた海軍では、スポーツに象徴されるイギリス的な男性性も基本的に肯定されていた。しかし、同じスポーツではあっても、ラグビーやサッカーは士官にふさわしいものとして、バレーボールやバスケットボールは下士官兵や職工にふさわしいものとして区別して扱われた。前者は士官にふさわしい資質を養成する鍛練としての側面が評価され、後者は気晴らし、思想善導、安全弁といった役割、すなわち娯楽的な効果が期待された。両者の男性性は区別され、後者は前者の引き立て役の地位に置かれた。

海軍はイギリス的な男性性を承認したが、それをそのまま模倣したわけではなかった。西洋スポーツに即して男性性を構築した場合、イギリスの優位は明らかであった。海軍兵学校では棒倒しのような独自の競技が編み出され、それが西洋スポーツに対して覇権的な地位を確立していった。また学問面での熾烈な競争も、イギリス的男性性とは異なる日本独自の点であった。

一方、海軍機関学校では異なる男性性が形成された。海軍機関学校を象徴したのは棒倒しではなくラグビーだった。軍隊的な側面はあったにせよ、それは純粋なスポーツとしてのラグビーで、民間指導者の指導を受け、民間チームと対戦をした。勉強の面でもじつにおおらかで、クリスチャンも少なからずおり、海軍兵学校と比べてイギリスのパブリックスクールにより近かった。海軍機関学校が海軍兵学校と異なる男性性を志向した背景には、兵機一系化問題に代表される、兵科と機関科の確執があった。兵科優位の海軍にあって、兵科士官と同じ男性性を志向すれば、機関科士官は従属的地位しか得られない。機関科士官たちは、士官としての誇りを維持するために、意識的に差別化を図ったのではないだろうか。言い換えれば、兵科士官が日本を代表してイギリス的男性性と対決したのに対し、機関科士官は兵科的男性性と対決するためにイギリス的男性性に依拠したのである。

陸軍はスポーツと無縁なまま男性性を形成した。陸軍幼年学校は例外であったが、それは生徒たちが陸軍の男性性を適用するにはまだ幼すぎたからである。そこでは民間の中学校にならって娯楽としてのスポーツ導入が図られた。1920年代、陸軍の男性性は深刻な危機に直面する。大戦によって明らかになった日本陸軍の後進性、デモクラシーや社会主義の台頭、米騒動や労働争議の鎮圧、スペイン風邪の流行、シベリア

出兵、軍縮、平和主義、軍隊無用論、軍人軽視の風潮など、その要因は様々だが、ともかく陸軍は新しい時代に適応した男性性を構築することを迫られたのである（この点で皇室と利害が一致した）。スポーツの導入はその対応策の一つであった。スポーツは鍛錬としての側面とともに、娯楽としての側面も評価され、軍民関係改善の役割が期待された。当初、歩兵第39連隊や陸軍戸山学校などで実践されたのは、まさしく民間と同様のスポーツであり、軍民間の交流も盛んにおこなわれた。陸軍当局は陸軍からオリンピックの選手を出すとの抱負を持ち、民間スポーツ界も軍人スポーツマンの活躍を期待した²⁶⁷。しかし1925年頃を境に陸軍スポーツのあり方は大きく変化する。陸軍スポーツの総本山、陸軍戸山学校でスポーツ研究の中心を担っていた大井浩は、日本の軍隊にあった形でスポーツを導入すべきだと考えていた。最終的に陸軍は体操教範に籠球と、陸軍独自の競技である投球戦、球戦を採用した。同教範では直接的鍛錬的な価値のみが評価され、スポーツの間接的効果や娯楽としての側面は捨象された。スポーツは独自の価値を否定され、完全に軍隊体育のなかに溶解し、それに従属してしまった。スポーツが軍事化された背景には、スポーツに対する根強い反発があった。陸軍のスポーツ推進者たちは、反対論者にスポーツの意義を説得する必要がある。彼らは娯楽化した民間スポーツを切り離し、ことさらスポーツの鍛錬面を強調することでスポーツを正当化した。その過程でスポーツマンシップと武士道精神の等号は取り消され、よきスポーツマンとよき兵士は一致しえなくなった。陸軍はスポーツを採用したが、その男性性を否認したのだ。

陸軍はたしかに深刻な男性性の危機に直面したが、ドイツやフランスに比べると、その危機はなお表面的なものだった。フランスやドイツでは体操が男性性を象徴してきた。大戦でドイツは敗北し、フランスも国土の一部を一時的ではあるがドイツに侵略された。大量の英米軍兵士が両国に進駐し、フランスを救いドイツを倒すことに貢献した。戦後、両国の軍隊はスポーツを本格的に導入するが、これは国家を防衛でき

²⁶⁷ 1924年のパリ・オリンピックに際して、陸軍は陸軍騎兵学校教官遊佐幸平少佐にオリンピック出場を、陸軍戸山学校教官加藤真一大尉にオリンピックの視察を命じた。そもそも馬術競技は個人での出場は認められていなかったため、遊佐は出場を果たせなかったが、遊佐と加藤はオリンピックを実見し、その経験を陸軍に持ち込んだ。

なかった体操に対する信頼が揺らいだことを意味する²⁶⁸。軍事的敗北により男性性の喪失を味わった両国は、スポーツに体现される英米軍の男性性を承認し、それを採り入れつつ新しい男性性を構築していったのだ。新たな男性性の模索は、敗戦国ドイツでは複雑な経緯をたどり、やがてナチスへと導かれる。しかし、そのナチスでさえスポーツの男性性を完全に否定することはなかった。すでにスポーツはドイツの男性性にとって不可欠の要素となっていたからである。この点は日本の陸軍との大きな違いと言える。スポーツの「弾圧」へといたる戦時下の日本の軍隊とスポーツの関係については次稿の課題としたい。

²⁶⁸ 本格的な導入は戦後であるが、部分的な導入はフランスでは1902年、ドイツでは1910年から始まっていた。